
ドリーム・コンシャス

NAO

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

ドリーム・コンシャス

【Nコード】

N4893A

【作者名】

NAO

【あらすじ】

夢の意味について考えたことがありますか？
これは夢のなかで出会った少女と繰り広げる、一人の少年の成長の物語です。

第一話・「お前を殺す」(前書き)

キッチン…紛い物、偽物の意。

第一話・「お前を殺す」

暗く長い路地裏を走っていた。

延々と続く路地裏だった。繁華街からどんどん外れていく。それに伴い光の手も届かなくなっていく。そして、僕は不安に苛まれる。揺れる視界は、はるか前方の小さな光を捕らえてはなさない。

足音が、路地に響く。僕の息は荒れ、肺も軋む。

いつまでも大きくならない前方の光点。出口を目指して走る僕には、それはかすかな希望の灯だった。

だがそれは、風前の灯でもある。

僕は気付いていた。背後に迫るもうひとつの足音を。

それは、僕が全速力で走っているにもかかわらず、確かに迫ってきている。僕は直感的に追いつかれてはいけないと悟った。接近を許し、追いつかれ、捕まえられたとき、僕のすべてが終わってしまうような、そんな気がした。根拠はない。ただの誇大妄想、被害妄想かもしれない。それでも、僕は追いつかれてはいけないような、そんな気がした。

しかし、明らかに危険は接近していた。

僕は悲鳴を上げる足をそのままに、肩越しに振り返る。繁華街からは距離があるのか、有視界はかなり黒に塗りつぶされてしまっていた。僕は、まだ視界に捕らえられる距離に、それ、が迫ってきてはいないことに安堵した。

瞬間、僕の視界は反転する。

猛烈な勢いで地面に仰向けに叩きつけられた。路地裏のコンクリートに、鈍い音がこだました。脳味噌が、まるでメトロノームのように揺れていた。

まぶたを持ち上げると、眼前にはフードをした人間の顔があった。いつの間にか、フードの人間の向こうには街灯が現れていて、フードの人間の顔を逆光で隠していた。

「お前は…誰だ？」

街灯が明滅を繰り返す。蛾が鱗粉を撒き散らしながら光にぶつかっていく。

「何で、僕を…」

首を絞めるフードの人間の力が徐々に増していくのがわかった。のどから絞り出せる声が絶え絶えになる。

「知りたいか」

男声だった。僕と同じ年代の人間の声だった。僕は答える力もなく、ただフードの中にあるだろう男の眼球を睨みつけていた。

「お前を殺すことが、俺の義務なのさ」

僕の意識が薄れていく。

「キツチュをな」

僕の意識は堪らずブラックアウトした。

第一話・「お前を殺す」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。新連載です。長丁場になるので、どうか未長く見守ってください。感想・批評、栄養になります

第二話・「元文学部だから」

僕は一番後ろの窓側の席で、気楽に外を眺めていた。最近見るようになった夢について、考えをめぐらせていた。だから、急にクラスがどよめきに揺れたときには、何事か、と忙しく教室内に首をめぐらせた。

「い、いったい何があったの？」

僕は、前の座席の男子、近藤巧（いんてつたくみ）に話しかけた。

「何って、聞いていなかったのかよ。転入生だよ、転入生。まったく、今日まで知らなかったぜ、そんなこと。総も知らなかっただろ？」

「知らないよ。それに、転入なんてそう簡単にできることじゃないはずだし……」

「だろ。それに、担任も知らなかったことなんて、なおさら不思議だ」

「そうなんだ……」

僕は外の景色から意識をはがされて、担任教師の動向に注視した。「静かにしろ。いいか、先生も急なことで驚いているんだ。正直、今のお前らと同じ気持ちだ。しかし、だ。決まったことは決まったことで、受け止める。今からその子を紹介するのに、こんなに騒がしかったら、自己紹介も聞き取れん」

その子、ということは女の子なのだろうか。

「どうやら、今の言い方からすると女らしいな」

「そうみたいだね」

耳打ちするように僕に顔を近づけた巧の言葉に、僕は同意した。窓からはモンシロチョウが迷い込んできていた。そしてまもなく、教室に充満する熱気に追いやられるかのように、あわてて外に飛び出す。

「葉月雅（はつきみやび）です。よろしくお願いします」

さつきまで蜂の巣をつついた様子だった教室に、蜂がいなくなつた。僕も、例外なくその一人だった。まるで魔法にでもかかったかのように、誰一人として言葉を発する者はいなかった。魔法は、彼女が教室のドアを開けたときから発動していた。

「総…」

巧がブリキのおもちゃのように首を回し、金魚のように口をパクパクさせて何かを言おうとしている。

「分かつてる。僕も同じだよ」

「…僕？」

「あ、い、いや、俺も同じだよ。転入生が綺麗だから驚いているんだろ？」

巧は大きくうなずいた。

「俺さ、こういうのドラマとか映画とか、漫画とか非日常の世界でしかありえないと思っていたから、なんか信じられなくて」

「俺だってそうだよ。こういうの、まさに青天の霹靂って言うんだろうな…」

「へ？ 晴天に辟易？」

「最近はずれ続きで猛暑が続いていたからね…」

僕が言いたかったことはそのことではなかった。

「すまん、俺、元文学部だから」

「ノリツツコミも中途半端に、今度は俺の悪口か？ そんなに文学部は博識か？」

転入生の話題もそこそこに、こちらに身を乗り出してくる巧をなだめる。巧は大きな鼻息ひとつで引き下がった。

「まあ、なににせよ、これで学校に来るモチベーションも高くなつたわけだ」

「そう…だね」

僕は、その綺麗な転入生に妙な感覚を覚えていた。栗色のセミロングが涼風に揺らぎ、わずかな光にも薄く輝く。同色の眉もきりつとしていて、意志が強そうに見えた。しかし、瞳は何よりも優しく

穏やかで、表情には笑顔がともされている。すっきりした頬、首筋、鎖骨、制服、そうして視線を滑らせていくにしたがつて、僕はその妙な感情を、僕の記憶から照らし合わせる作業へと変えていった。

「おい、こっち見てるぞ」

巧が僕に話しかけた。そう言いつつ、葉月雅に手を振っている。

僕は記憶との照合を中断し、雅の顔を見ようとした。

胸が一気に高鳴った。

時が止まったかと思った。全てを吸い込むような深遠な瞳を、彼女は持っていた。僕は瞬間的に、海の中へ深く、深く沈んでいく情景に遭遇した。

「おい、総、どうした」

周囲の景色が一変して、僕は黒い世界へと落ちていく。海の表面には太陽の光が反射しているが、やがてそれも見えないほど遙か海の底へ。底面などないようにも思えた。永遠の沈降がある。そう感じるほどに深い瞳と、海の情景は一致していた。

「おい」

巧は、僕の視線を遮断するように手を僕の眼前にかざしたり外したりしている。次に、葉月雅と僕を交互に見やり、その視線が重なっていることに気付くと、肩を落とし、呆れたように嘆息した。

「…笑った」

葉月雅は口の端を広げて、目尻を下げた。穏やかな夏の海のような微笑だった。

「総」

巧が、僕の頬をつねった。

「いてて」

「いつまで見とれてるんだ？」

「み、見とれてなんか」

「意外だなあ、真面目な文学青年の総君も、面食いなんだねえ…」
目を細めて、いやらしい声を出す。

「ば…」

僕の巧への反論をさえぎる形で、担任が大きな声を上げた。

「じゃあ、そうだな。とりあえず席は…」

担任が、廊下側から、窓側まで見渡す。

「まさかとは思うけどな」

「ああ、それこそ非日常的なドラマか映画、漫画の世界だ」

僕たち二人は、口ではそう言いながらも、内心では期待していた。

僕の席は、一番後ろの窓側の席。このクラスは奇数人数。僕の隣は空席だ。

担任の指示に固唾を呑む。

「…一番後ろだ」

そう、窓側の。

僕の、隣の席。

二人は申し合わせたように隣り合う。

それが始まりなんだ。運命的な、何か新しいことの

「…廊下側の」

「…え？」

「近くに女子がいたほうが話しやすいだろうからな」

蝉の鳴き声が、僕の耳に大きく聞こえ始めた。

「ま、それが現実だよ。文学少年」

巧が僕の肩に手を置き、同情する。

「元、だ。元文学部」

巧の手が実際以上に重く感じる。脱力感、必要以上に僕からいろいろなものを奪っていったようだ。

「悲しいのはむしろ、お前ではなく、俺のほうだぞ、総。現実はいくらも厳しいものか、と打ちひしがれているところだ。同情の余地はいくらでもあるぞ。同情するなら、今のうちだ。同情するなら金…いや飯おこれ」

「はいはい」

僕以上に落胆する巧に呆れて、葉月雅へと視線を移す。彼女は担任のほうを見ていた。

ちょうど彼女が眉間に力を入れたところだった。

「…いや、やめだ」

すると担任は、何かに操られるかのように、平坦な声で告げた。

「篠崎の隣の席だ。篠崎、葉月と仲良くな」

巧が素早く顔を上げた。

「おい、これこそ…」

「まさか、ね」

巧は僕を、僕は巧を見て目を丸くした。

「映画か」

「ドラマか」

「もしくは漫画のような展開だね」

疲れたように二人で息を吐いた。

「篠崎！ 篠崎総！」

大きな声に、僕たちは肩を強張らせた。

「すぐに倉庫に行つて、葉月の椅子と机を取つてきなさい。ホームルームは以上だ」

出席簿を持つて担任はさっさと出て行つてしまった。教室のドアが閉まると同時に、クラスは緊張の糸から解放され、葉月雅を取り囲んで話題を展開し始めた。

「席を取つて来い、とさ」

「何で俺…」

「そりゃ、総ほどうらやましい生徒には、彼女の席を持つてくるだけの、責、を負つてもらわないと」

「つまらないシャレだな」

僕は呆れ返つて、椅子の背に体を預けた。

「それじゃあ」

僕はひざに手をつき、よっこらせ、と年寄りのようにして椅子から立ち上がった。立ち上がる際、掛け声を上げて立ち上がるのは年をとった証拠だ、と言っていた健康番組を思い出した。

「仕方がないけど行くよ。次の授業まで時間がないしさ」

「頑張つてな」

にこやかに手を振ってねぎらう。まったく手伝う素振りも見せないのが巧らしかった。

倉庫とは体育館内部の倉庫のことで、校舎からは離れた場所にある。分かつてはいたのだが、往復の往の段階でとても面倒くさく感じられてくる。

廊下をこする上履きの音が、いつもより大きい。

「篠崎総…君」

少しためらい気味の声が、憂鬱で猫背になった僕の背中に届けられた。聞きなれない声だったが、僕はその声色になぜか懐かしい感じがした。

昔、どこかで聞いたことが…。

記憶のノートをめくり、声だけを手がかりにページを探す。やがてその声から推測された人物像の輪郭が、脳裏に描かれようとしたとき、再び僕の名前が呼ばれた。

「篠崎総君」

僕は振り返る。

「君は…葉月、雅」

彼女は微笑んだ。

「さん」

僕は自ら知らずに呆けた声になっていた。

「総…」

僕は、彼女がそう呼んでくれることになぜか抵抗感を感じなかった。まるで、そう呼ばれるのが当たり前で、ずっと以前からそのように呼ばれていた奇妙な感覚があった。むしろ、逆に君付けで呼ばれることのほうが、不自然で、不快感すらある。

「なぜ、君がここに？」

「なぜ？ 総を手伝いに」

「席なら俺が取ってくるから、教室で待っていればいいのに。それぐらいの、責、は僕にあるよ」

「シャレ…ですよね」

複雑な表情を見せる。僕はやはり巧のようにはいかない。

「責任があってもなくても、手伝います」

僕は心中で感心していた。あのクラスの喧騒の渦中であって、渦をかきわけてここまで来たこと、そして、転入早々に積極的に他人に接触したことについて。もし僕が彼女の立場なら、気後れして他人に積極的になれなかったであろう。

「そんな。転入していきなり手伝わせるなんて、気が引けるよ」

案の定、ファーストコンタクトで、気後れしている僕がいた。無意識のうちに、気が引ける、と言ってしまっているところからも、理解できた。考えた傍からこうでは、と僕は心で舌打ちした。巧とのファーストコンタクトでもそうだった。幸い巧は積極的な性格だったから、気後れする僕を飲み込んで、僕ともどもクラスに溶け込んでいった。巧のさばさばして物事にとらわれない性格、加えて、明朗快活な性格は、僕以外にもさまざまな生徒への求心力となった。もちろん、そうした巧を苦手とする者もいるにはいるが、前述の性格を持つ巧は、そうした些細なことなど全く意にも介さなかった。そうした巧がいてくれたからこそ、今、孤立していない僕がいるのだ。

「総は、私が怖いのか？」

「い、いきなりだね」

葉月雅は、僕に近寄り、僕の瞳をじつと覗き込んだ。何かを看破しようという、探るような視線の色だった。瞳の黒が僕を飲み込んでいく。瞳の周囲に広がるブラウンは、さながら木星のよう。変な例えだが、木星の中心にブラックホールがあるような、大きな力のある眼球だった。

僕は、耐え切れず目をそらした。

「行きましょう。時間がないわ」

僕を残してさっさと歩を進めていってしまう。廊下の窓から吹き込んできた風が、葉月雅の髪の毛をそつとなでた。波打ち、広がる。

僕は、彼女の横に並んだ。

「あ、あの、旧体育館の場所は分かるの？」

「ええ、分かるわ」

「今日が初めてではない？」

「そうね」

「じゃあ、俺が案内するまでもない、か」

僕の歩調が葉月雅に遅れをとる。

「不慣れだったら、総が案内してくれたの？」

「もちろん。俺だって、それぐらいはする」

「ふふ、たのましい」

葉月雅は、初対面のはずの僕を、総、と呼び捨てにする。一方で僕は彼女のことをまだ何と呼んでいいのか分からない。愛称すら思いつかない。初対面からいきなり呼び捨てにされた経験は、生まれて初めてだった。前向きに考えれば、僕も葉月雅のことを呼び捨てにしているということではないだろうか。葉月雅。葉月。雅。考えれば考えるほど気恥ずかしい。呼び捨てはさすがに馴れ馴れしいのではないだろうか。ならば、さん付けがいいだろうか。僕個人では、雅、と呼んでみたい。

雅。

馬鹿らしくも、心の中で反芻してみるのだった。

二階から一階への階段を下りるときまで、僕は葉月雅の少し後ろを歩いていた。彼女を見ると、ふいに彼女の後姿が、誰かに似ている気がした。思い出したように吹き上げてくる風。その風に舞う髪の毛の隙間から、うなじがのぞく。

「総」

階段を踏み外しそうになった。

「な、何？」

一足先に階段を下りたところで、葉月雅が僕を見上げる。

「雅、がいのよね。総は」

「え、あ、ま、まあ、そう…かな」

どぎまぎして、背中から一気に汗が噴き出した。

「でもさ、何で？ 俺、そんなこと言ったかな…」

「私…総のことなら何でも知っているから」

一陣の風が、僕と雅の間を通過していった。階段を下りることすら忘れて、僕は棒になった。思考回路もシャットダウンして、再び立ち上げるのに数秒を要した。

「君、エスパー？」

雅は、首を軽く横に振った。

「ストーリーカー？」

雅は笑った。口に手を当てて。はじめてみる雅の笑い声に僕は、恥ずかしくなつて視線をそらした。踊り場の窓から、青空が見えた。

「総、おかしい」

笑いが止まらない雅を見てみると、僕も顔が自然とほぐれた。

「だって、君がそんな風に見えたから。僕が考えていたこと、ずばり言い当てるなんてさ。雅と僕は、初対面のはずなのに。そんなこと、万に一つの可能性じゃないか。いや、もっとあるかもしれない」

僕は、少し興奮していた。ほぐれていった全身の緊張が、僕の感情を後押しした。

「とにかく、嬉しいんだ。まるで、映画や、ドラマのようで。都合よくいかないと思っていたこの現実の中で、こんなにもいろいろなお偶然があるなんて。まるで夢を見ているみたいだ。まあ、最近の僕の夢といったらろくな夢をみやしないけどね」

微笑んでいたはずの雅は、急に険しい顔をし、僕の言葉を遮断する形で、そつとつぶやいた。

「…夢を見たのね」

「え…？」

「何者かに追われる夢」

「それがどうかしたの？」

「夢というものには、いくつか役割があるわ」

うつむき加減の雅が、傍にいる僕ですらやっとな聞こえるぐらいの

声音で話し出す。

窓からの風が止む。

「ああ、それなら聞いたことがあるよ。一つ目は、記憶を整理する役目で、夢の中で色々なものが混在しているのは、まさに整理中だから。二つ目は、抵抗力をつける役割。怖い夢を見せるのは、それに対する抵抗力をつけるため。三つ目は、記憶力を持続させる役割。繰り返し同じものを見せることで、それに対する記憶力を付けることができる」

天然のクーラーがなくなり、僕は夏の暑さを思い出す。

「こんなところかな」

「一般的にはそう言われている。でも、それはどれも夢に対しての勝手な推論にしか過ぎない」

一週間を精一杯生きた蝉の死骸が、廊下に落ちていた。羽がちぎれ、胸部には穴が開いている。

「夢には、この世界と、もうひとつの世界をつなぐトンネルのような特性がある。そしてそれは、誰が望んだものでもない」

葉月雅は、強い口調でそう言った。

それきり、旧体育館まで雅は口を開かなかった。雅と並立して歩いていたが、とても話し出せる空気ではなくなっていた。

倉庫は、体育館の舞台袖から、さらに地下へ降りたところにある。舞台の真下がちょうど倉庫になっているという仕組みだ。湿っぽく淀んだ空気が、ほこりにまみれて停滞している。瘴気を吸い込んだように、僕は思わず咳き込んでしまった。口を手で被い、倉庫の中に足を踏み入れる。洞窟に挑む探険家の心境に似たものがあつた。洞窟の奥には、新旧の机や椅子が山積みになされていた。他にも、生首のような剣道の面、つぶれたピンポン球、お菓子の袋など、廃棄同然のようなものが散乱していた。電気をつけようとしたが、どうやら壊れているようだった。

「さて、どれにしようかな。…っと、それにしても…」

足場が暗くておぼつかない、と言おうとした僕の周囲に、突然ま

ぶしいほどの光線が差し込んできた。まぶしさに眼前に手をかざし、光線の元をたどると、直線の向こうに、雅がいた。舞台袖の窓を開けて、地下に光を届けたのだった。雅の必死に背伸びをして窓を開けている姿がとても神聖なものに見えた。雅の頭上に位置する窓から降り注ぐ光芒に、僕は天へ昇るような錯覚を覚える。幻想的なものだった。雅が、別の世界から僕を迎えに来た天使に見えた。もちろんそれは、僕の想像でしかないのだけれど…。

光は徐々に光量を増やした。

幻想的な光景とは裏腹に、背伸びを繰り返す途中で事後的に見えてしまう雅のスカートの中を、僕は見ないようにと努力していた。しかしながら、思春期に後押しされてついつい見てしまっていた。背伸びをして、目いっぱい手を伸ばして、開かずの窓を開ける雅。半分ほど開いたところで、雅は、僕のほうを振り返った。

当然、目が合う。

雅は、僕のほうへ進んできて、明かりの入った地下倉庫に足を踏み入れる。思春期ゆえの過ちを叱責されると思ったが、雅は何も言わずに僕を追い越して、机と椅子を選択し始めた。

「雅」

雅は手を止めて背中僕で僕の呼びかけを受けた。

「ごめん。その…」

「気にしないで。私も気にしてない」

しばらくの間入り口で佇立していた僕と、奥で机を選別していた雅。その間、光はその中間を照らし続けていた。今は光源である太陽が雲に遮蔽されたためであろうか、光が少々翳り始めている。

突然、雅は振り返って僕を見つめた。

僕をずっと見つめたまま、光の袂で立ち止まる。刹那、雲から太陽が顔を覗かせたのか、燦々と雅を照らし出した。ほこりが金色に輝き、雅の周囲をゆらゆらと舞う。スポットライトを一身に浴びた雅は、僕に言った。

「総、私はあなたを選んだ。そして、私を救ってほしい。すべての

ことから。私はもう、体中を深く病んでいる。自分ではどうしようもないくらい。自分自身の力では戻れないところまで来てしまっている。でも、可能性はまだある」

「…雅、いきなり何を言っているの？」

「総、あなた自身を…見つけて」

雅の顔が苦痛に歪む。

「…ひとつになるの。まずはそこから…」

「雅、君は急に…何を」

雅は大量のほこりの上にひざをついて、がたがたと震えだす。自らの肩を抱き、まるで何かにおびえるように、齒を鳴らし始めた。

「…痛い…」

ついには、ほこりの海に倒れてしまう。

「雅！」

僕は慌てて雅を抱き起こそうとするが、雅はぐったりしたままだ。

「どうすれば…どうすれば、どうすれば！」

僕と雅の周囲に広がっていた窓からの光も、終幕へと向かうように消失していく。そして、連動するかのように周囲の情景も限りなく黒に近づいていく。

「雅、しっかりしてくれ！ 目を、目を…」

黒から派生した闇が、触手のようなものを伸ばし、僕と雅を引きずり込んでいく。僕は、雅を助けようと身を呈すが、黒い触手はかまわず僕から飲み込んでいった。

「雅、目を…」

僕は、漆黒に染まった雅を抱きしめたまま、自身も黒に落ちていった。

「目を…！」

涙が流れたのか、この闇では分かるはずもなかった。

第二話・「元文学部だから」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。この小説は「スクール・オブ・ザ・デッド」以前に書いた
小説ですので、ライトノベルでありながら、少し純文学要素もある
非常にジャンルの微妙な小説です。そんな小説ですが、よろしけれ
ばこれからもおつきあい下さい。批評・感想栄養になります。

第三話・「性夢だ」

遠くから油蝉の鳴き声が聞こえた。そよぐ風の音も聞こえる。

「総、おい、総」

巧の声が聞こえる。耳元で、僕を呼んでいる。

「総、起きろ」

「…ん」

僕は、目をこすった。

「朝のホームルーム中ずつと寝やがって。まったく困ったやつだな。ほら、次は体育館なんだから、さっさと更衣室行くぞ」

「雅…？」

「趣き深い様、風流な様、を雅という。次は古典の時間じゃないんだよ。総、いつまでも寝ぼけていないで、着替え持てよ」

教室はもぬけの殻だった。僕と巧だけが教室の中にぼつねんとあった。巧はジャージの入った袋を肩に担いで、疲れたように僕を見下ろしていた。時計を見ると次の授業までもう三分程度しかなく、教室移動の時間も含めれば、ほとんど猶予はない。

「俺はもう行くからな、サボるんなら一人でサボってくれ」

「あ、スマン。今すぐいくよ」

机の脇にかけてあったジャージをあわてて取ると、教室の出口に向かった巧を追った。

「あのさ、巧。葉月雅って子のこと、知らないか？」

「葉月雅？ さあ、知らないな」

「そっか…じゃあ、あれは夢…」

少しほっとした。

「何だ、総。夢の中の女に恋したのか？」

「まあ、そんなところかな。それが妙にリアルな夢だったんだよ。こつ、光とか、風とか、葉月雅とか…まるで実際にいたような感覚で、しいて言えば、現実が二つあるような」

巧はニヤニヤしながら僕の話聞いていた。

「総、それは…性夢だ」

「性夢？」

「間違いない。思春期特有の異性の夢だ。異性への羨望、異性への好奇心、異性への執着…それらがこういう時期に現れるんだよ。どうだった？ 妄想にあふれた夢の内容は。まさか、もっといやらしい夢を…」

顔を必要以上に近づけてくる。僕は思わずたじろいだ。

「そんなんじゃないただ」

巧は不思議そうに首をかしげた。

「巧の言っているような、単純な夢ではなかったから」

体育館までの道のりが、夢の中のように見える。夢の中で雅と歩いた光景にそっくりだ。それは、現実を夢に投影したことからも当然のことなのだが、吹いてくる風の心地よさや、太陽光の濃淡さえも、夢にそっくりだった。考えようによっては、巧と歩いているこの瞬間のほうが夢のように思える。

「とにかく、あんまり考え込むなよ、総」

肩を叩かれる。そうして広がったわずかな痛みが、現実である証拠であって欲しい。僕は、心中で念じた。

「総、さっきの夢の話なんだけど」

今日の体育はバスケットボールだった。僕たち二人は同じチームに振り分けられていた。コートの外、二人で得点係を担当している。僕はAチームの得点に二点追加した。

「ん？」

僕たち二人の視線はセンターコートでボールを取り合う両軍に注がれている。そのため、僕は声だけで話を促した。

「俺、夢の中で誰かに追われたりする夢を、最近良く見るんだ」

男子の一人がピボットを繰り返しながらボールを奪われまいとし

ていたが、とうとう囲まれてボールを失ってしまった。

「さっき総の話を聞いて、なんとなく似たようなところがあった、思い出したんだ。夢が現実に見えたってところが、気になってさ。夢を見ているときは、夢が現実なんだよ。俺を追ってくるものが、圧倒的な恐怖を持ったものだって、どこかで分かっちゃまっているから、俺は夢の中で必死に逃げている。まるで、そのルールにとられていくかのように」

ゴール前でプッシングの反則を取られたのか、審判をしているバスケ部員のホイッスルが高く鳴り、Aチームにフリースローが与えられていた。

「それが、毎晩ではなくとも、一週間に一回は見るんだ」

僕は、巧に視線を移す。試合を傍観している巧の横顔が、不安の影を落としているように感じられた。

「総、一点追加」

「あ、ああ」

フリースローが入って、Aチームが自陣に後退していく。僕は慌てて点数を追加した。

「なんでもないような夢かもしれないんだけど、俺にはそれが不気味で仕方がないんだ。たとえば、夢の中で自分が殺されたらどうなるのかな、ってな」

「巧……」

Aチームの男子が、その背の高さを生かしてBチームのパスをカッとした。

「バスケットしている時、どうしても勝負事だけに夢中になるだろ。夢中、って言葉は現実にあるわけだから、どこか俺たちは夢の中で生きているのかもしれないな」

そのまま背の高い男子がドリブルで持ち込んで、すぐさまジャンプシュートを放った。大きな放物線を描いて、ボールはリングへ。

「巧……実は」

「総、二点追加」

「あ、悪い……」

リングにもかすらない美しいシュートが決まった。僕は点数を追加してから、巧に雅とのやり取りを告白しようと巧を振り向く。

そのとき、何かが視界の端に映った。

コートの向こう、ちょうど体育館の正面入口。僕らは一番奥の舞台の前で試合を観戦しているから、距離は少しある。僕は必死に目を凝らした。カメラのピントのように次第にそれが明瞭になる。

「母……さん？ いや、母さんは……」

僕は、ありえない現象に目をこすり、二たび目を凝らすと、今度は制服姿の葉月雅が微笑んでいた。僕を真摯な眼差しで捕捉する。

時間や、距離を跳躍して、彼女の中へ引き込まれそうな心地。

恍惚なのか、嫌悪なのか、僕には判断できなかった。

高らかなホイッスルの音が、僕の耳をつんざく。

僕は我に返らざるをえなかった。

「試合終了。ほら、行くぞ総。Aチームとの決勝戦だ」

僕は巧に話しかける間もなく、センターサークルに引き寄せられていった。

第三話・「性夢だ」(後書き)

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。サブタイトルを考えるのが面倒で、この小説も「」を題名にしました。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。感想、評価、栄養になります。

第四話・「入部は考えてくれたかね？」

僕は中学生のころ、文学部に所属していた。

立派な文学少年で、小説を年に百冊以上読破しているほどだった。部員数は少なかったが、少ないからこそ親しく話せるし、自分たちの作品を忌憚なく批評し合えた。

僕たちは、主に小説を執筆していた。

それほど上手なわけではないが、楽しく読めるぐらいのものは書いていた。そのころにしか書けない、生活の中の懊悩、恋愛、希望、それらを皆が皆の視点で執筆するということは、今から考えても唯一無二のものだった。

しかし、学校内での文学部という響きは、暗鬱な人間の集まり、というものに直結しているらしく、新入部員もままならず、廃部寸前の状態であった。

実際はそんなことはまったくなく、とても明るい部活であったのに、だ。

このときから、なんとなく文学部というものに対して、僕は劣等感を抱くようになってしまっていた。

中学三年のころ、僕は先生の勧めで、ある新聞社が主催する文学賞に応募することになった。青少年の部という部門が設けられていたので、僕はそちらに属することになった。中学校の文学生活の集大成とばかりに、僕はその文学賞に作品を送ることを決意し、創作に励んだ。

その甲斐もあってか、優秀賞という二番目にいい賞を受賞することができた。

頑張ったという自負はあったから、やった、という驚きや喜びよりも、充実感や満足感のほうが大きかった。新聞にも載り、僕は一躍時の人となった。もちろん、主催者である新聞社の記事の隅に載ったぐらいのことだから、誰でも知っているわけではなかったが、

時折親戚や友人から賞賛の言葉をもらったりして、僕はそのたびに謙遜して見せるのだった。

自然にほころんでしまう笑みを抑えるのに苦労したことは、いい思い出である。

「それで、篠崎、文学部への入部は考えてくれたかね？」

僕は、学年主任の前で苦笑いを浮かべていた。

「君は、中学校時代に文学賞を受賞しているし、文学部の顧問としては、よりよい部を築いていくためにも、とてもいいと思うんだが」

「は、はあ……」

文学部の評判は、やはり高校に入学してからも、変わってはいなかった。

暗鬱のイメージは払拭できていない。

入学したての僕にとつては、それはお世辞にもいい先入観ではない。僕にとつてもそうであるように、他人に対してもそうだ。自己紹介のときに文学部であることを公表してしまえば、僕のイメージに、暗鬱のレッテルが例外なく貼られてしまう。

高校に入学してもそれでは、とても耐えられない。

「何が君をそう渋らせるのかね？」

「その、勉強とか忙しいのもありますし、二足のわらじはなかなか……」

胸のうちでは、僕も文学部に入りたかった。

この高校は文学部にも伝統があり、数々の賞を受賞しているほど全国でも有名だった。

しかし、それゆえにイメージの伝播率も高く、僕にすれば、リスクが大きいというわけだ。それに加え、満足のできる文学生活を送れるという保証もない。

「それは言い訳ではないかな？ いいかい、私の頃は、文学部といえば野球部と並んで部活動の花形だったんだ。それは、もてはやされたよ。もちろん、女生徒からもな。それが今は……」

話が長くなりそうな予感が漂い始める。

「あの、先生、時間がないので…」

「待ちたまえ、話はまだ…」

僕はそそくさと職員室を出てきてしまった。

学年主任は、話が長いので有名な先生だ。授業中にひとたび話が脱線すると、二十分は脱線したままだ。それだけなら救いようがあるが、脱線した時間を取り戻そうと、休み時間まで平気で使い始めてしまうから、生徒にしてみれば憤懣やるかたない。だから、学年主任の時間にはなるべく私語や、不用意な質問をしてはならない、というのが生徒たちの暗黙の了解となっている。

僕は廊下で嘆息した。

まだ日が沈む気配はなく、蝉の合唱もかける様子がない。学年主任の前世はきつと蝉に違いないと、僕は中庭の巨木にとまった油蝉を恨めしそうに眺めた。

職員室前廊下の壁には、過去の栄光が所狭しと並べられている。

その中には、伝統ある文学部のものも多数展示されていた。ガラスケースに収まった賞状は、多少色褪せてしまっても、その栄光は少しも色褪せることはない。脈々と受け継がれる文学部の受賞の歴史の中には、学年主任の名前が書かれたものもあった。

学年主任の言う、もてはやされた、というのも、あながち嘘偽りではないようだ。

僕は、蝉の作り出す喧騒の中、飾られた賞状の上に、過去の思い出を見ていた。

中学時代、最後の年、文学賞の授賞式のこと。

そこで邂逅した、一人の少女のことを

第四話・「入部は考えてくれたかね？」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。作者は、高校時代文学部でした。そこで交わした議論は今でも作者を支えています。懐かしいです。そんな作者ですが、これからよろしく願います。感想、評価、栄養になります。

第五話・「忘れないで！」

授賞式は、ただ表彰されれば終わり、というものではなかった。

授賞式はもちろんのこと、受賞者同士のレクリエーション、審査員との懇談会、文学の活動状況を話し合う会合、有名小説家の講演会と、パネルディスカッションなど、その内容は一泊二日にしては過密な日程だった。

この式典のテーマそのものが、次世代の文学を担う、という錚々たるものである以上、それも仕方がないのかもしれないかった。

僕は、引率の文学部顧問の先生と一緒に、会場へ入った。

「篠崎、実はな、同県でお前の他にもう一人受賞している生徒がいるんだ」

「そうなんですか」

僕には興味もないことだった。自分の学校以外に知っている人間などいないのだから、他県も同県もさして関係のないことだからだ。「先生は、後ろの席だからな。主賓はお前たち生徒だ。緊張せずにな。後ろからしっかり見ておいてやるぞ」

僕は、唇を引き結んで首肯した。移動の電車ではまったく緊張していなかったのに、いざ会場入りすると、体の節々から緊張が染み出してきて、関節の動きをぎこちなくさせた。歩くたびに関節のきしむ音が聞こえるのだから、相当なものだった。

席に座って開式を待っていた僕は、ついに緊張に耐え切れず、柄にもなく隣の生徒に話しかけた。

「君は、どこの出身？」

生徒は小さい声で答えた。おそらくは、僕同様緊張しているらしかった。

「福島、です」

僕と同じだった。ということは、先生が言っていた同県のもう一人の受賞者というのは…。

「あなたは、どこですか？」

「あ、僕…俺も、福島なんだ」

「じゃあ、同じなんですね。先生から聞いてはいたんです。同県で二人の受賞者は珍しいことだって」

「へえ、そうなんだ」

僕は知っているのにもかかわらず、知らないふりをしていた。いや、ふりをしていたのではなく、正確に言えば、緊張していたから返答の内容を噛み砕けず、適当に返していたのだった。

「あの…『夢と現実』を書いたんですね」

それは僕の書いた小説だった。内容は、夢の中で本当の自分と出会い、それを認め、理解することで現実の自分を変えていく、というものだった。

「私、あなたの小説を読んだとき、とても感動したんです。共感、という言葉では済まされなくらい、大きな何かをもらったような気がするんです」

恥ずかしそうに顔を伏せながら、小さな声で話す。周囲の雑音に簡単に消されそうなほど、弱々しい声。

「文学部らしくないですよ。気持ちをつまく言葉で表現できないなんて」

「そんなことはないよ。むしろ、日常に溢れているのは表現できないものばかりだよ。それを何とかして言葉にして伝えるのが、僕ら文学部であり、文学そのものなんだよ」

僕は少しだけ熱く語っていた。椅子から身を乗り出しかけていたので、慌てて座りなおす。

「あの、篠崎君は…」

初めて僕のほうにしっかりと顔を向けて彼女は聞いてきた。あどけなさで一杯の、まだ大人への階段を上り始めていない相貌、はにかむような表情。

「俺、と、僕、を使い分けるんですね」

僕はおそらく赤面していたであろう。

自分の顔を見ることはできないが、顔が急速に火照りだし、汗が体中に吹き上がるような状態に突入しているのが、嫌というほど感じられた。

気が動転した僕は、とにかく、話題を変えようと、パンク寸前の頭で狂ったように考えていた。

ちょうどそのとき、役員らしき人たちが入ってきた。会場が、一気に静まり返り、いよいよ始まるのだな、と誰もが同じ気持ちになっていた。

式は、淡々と進んでいった。賞状が授与されるたびに拍手が起ころうところは、すべての式に共通していた。その中でひとつ驚いたのが、隣に座ったあの少女が最優秀賞を受賞していたことだった。

少女は名前を呼ばれて立ち上がると、登壇していった。

決して綺麗な子ではなかった。明らかな童顔で、頭髮も整えられておらず、後れ毛が何本も風に揺れていた。伏し目がちで、顔も色白で、健康的とは言えなかった。返事の声もか細く、どこかおどおどしているようだった。

「さつきは、緊張しすぎて、階段でつまずいてしまいました」
やはり伏し目がちで、恥ずかしそうにサラダをフォークでつついていた。

僕たちは授賞式を終え、昼食をとみにしていた。引率の先生は、先生方同士で食事をし、生徒は生徒同士で食卓を形成していた。

「見ていて心配したよ。転げ落ちるんじゃないかと思った」

さらに伏し目がちになるのは、恥ずかしさからか。

「あ…冗談だよ」

「いいんです。事実なんです。私、何かを書くことでしか、うまく伝えることができない人間だから。リアルタイムで何かをしようとするとは必ず失敗してしまう。でも、文章を書いているときは、冷静に頭の中で考えてから書くことができる。思った通りのことを丁寧

に伝えることができる。こういうのって、人からは敬遠されてしま
いますよね」

僕は、昼食をとり始めてから、まだ一度も彼女と目を合わせたこ
とがない。

「自信がないの？ 自分に」

「自信なんて…そんなもの、ないです」

「賞をとったことは？ それも自信にはならないの？」

「私には、これしかないんです」

「それだけで十分じゃない。俺だって、これ以外には何もないよ。

他人から嫌悪されて、それでも書いて、書けたとしても、それは自
己満足。こうして評価されたからいいものの、されなかったら意味
すらないのかもしれない。だから…」

壁のようなものだった。薄々感じていたことだから余計に悔しか
った。

「同じ、ですね」

「…そうだね」

昼食は、食べた気がしなかった。胃に食物が入っているような気
がしない。満腹感はもちろんのこと、何を食べたかすら思い出せな
いほどだった。

僕たちは、どうして小説を書くことになったのか。

何を伝えたいのか。

誰に伝えたいのか。

書けば何かが劇的に変わるのか。

明確な答えなどなかった。

書くことが自分の存在証明になる。

それは建前で、本音は、誰かに評価されることで嫌悪する人たち
を見返したかった。そんなことだけを考えていたのかもしれない。
はつきりと口に出さないまでも。

式が終わってから、こうして彼女と話す機会は何度かあったが、
明るい話題になることはなかった。それは、二人が見る未来が前途

多難であることを、計らずとも予期していたからだ。冷静に分析してしまうことに自己嫌悪を抱く。能天気な未来の展望を眺めてみたい。

それができない二人が、賞状を受け取ったのだ。

翌日、全ての式が無事に終了してから、帰宅の途につく前に少しだけ時間ができたので、食堂で彼女を待っていた。朝食に訪れる彼女を待っていた。

彼女に会っておきたかった。

「あの…」

僕たちは、最後に宿舎の周りを散歩することにした。

鳥の鳴き声がどこからともなく聞こえてくる。雲が青空に映えていた。

僕は、黙って足元に生える草に目を落としていた。

「夢を見たことがありますか？」

「夢？」

「あ、夢といっても特定の夢なんです。必死の思いで何者から逃れる夢」

「つまり、追われる夢ってこと？」

「そうです」

僕は、一本木の下にある白いベンチを指差した。木漏れ日がベンチを斑模様染めていた。

彼女は座りながら、口を開く。

「夢の中にいるときは、それが現実であって、夢を夢だと思うことができない。夢から覚めて、そこで初めて『何だ、夢か』って。だから、私が夢の中で追われているとき、私は殺されるんじゃないかって本気で思っているんです」

僕はベンチの背に体重を預け、天を見上げていた。光の揺曳は、僕の眼球を刺激した。

「篠崎君が書いた小説を読んで、私、変われそうな気がするんです。夢の中の自分を変えることができれば、現実での自分を変えること

ができる気がする。安易ですけど、まずはそこからはじめようと思うんです」

木漏れ日に目をつぶり、太陽の暖かさに身をゆだねる。血液に熱が浸透して全身を回る。

僕は別世界にいるようだった。

「あの」

目を開けるとベンチには僕一人。彼女は目の前に立っていた。

「ありがとうございます。私、篠崎君に会えて本当に良かったです」

深々と礼をした。髪の毛が鞭のようにしなる。体裁を考えない純粹な感謝。

「私、変わります。変わってみせます」

僕を真摯に見つめていた。そこにいるのは、伏し目がちの女の子ではなかった。大人の階段を上る決意をした、強い女性だった。

僕は、そんな彼女に何も言えず、ただベンチに体を吸い寄せられていた。これほどまでに不器用で、行動力に欠ける自分に腹が立った。

「さようなら」

もう一度深々とお辞儀をした。彼女の背が遠ざかっていく。見えない階段を駆け足でのぼっていく彼女。彼女としか言えないのは、彼女の名前を知らないから。

自己紹介もしていない。

彼女を知るために開けなければいけないドアすら開けていない。

ドアノブすら握っていない。

もう会えないかもしれない。

それは嫌だった。それだけは嫌だった。

「僕は、まだ君の名前を聞いてない！」

大声で彼女の真っ直ぐな背中に届ける。振り返った彼女に、僕は胸が高鳴った。

「授賞式の時寝ていたんですか？ 私の名前は、二条恵理子^{にじょうえりこ}。恵理子って呼んでください！」

両手でメガホンを作って僕に伝える。

周囲の人たちが一様に不思議がっていたが、それをはねつける意思を、勇気を、彼女は手に入れたようだった。木陰にいる僕と、太陽の袂にいる彼女。その対比が、まるで陰と陽の対比のように僕は感じた。僕が太陽の袂にいたら死んでしまう。

錯覚に過ぎないが、彼女と僕とは、もうそれほどの差ができていた。

「そして、あなたの名前は、篠崎総」

スカートが微風にひらひらと舞っていた。

「絶対に、絶対に忘れませんから。だから、篠崎君も……」

はにかむ少女は、また大声で。

「総も、忘れないで！」

そうして、僕はそれ以上何も言えないまま、二条恵理子を見送ったのだった。

当然のことながら、恵理子、の名前を口に出すことはなかった。

第五話・「忘れないで！」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。名前って不思議ですね。苗字で呼ぶのと、名前で呼ぶのと
では感覚が違ってくるのですから。そんな作者ですが、これからも
よろしくお願いします。評価、感想、栄養になります。

第六話・「ここはあなたの世界」

「絶対に忘れませんか……か」

古ぼけた賞状と、放課後の微風が、僕を過去の情景へ導いた。

僕は小説を書いていない。

世間の体裁を気にして書くことさえできないでいる。そして、夢の中では誰かに追われている。当時の彼女が経験したことを、僕は今、経験しているのだ。

時間は、誰にも平等に流れているというが、それは本当であろうか。時間の流れは、人によって千差万別のような気がする。僕の体はほとんど大人になるが、精神時間はいまだに子供のまま、成長していない気がする。

「僕も、君の名を忘れてはいない」

二条恵理子という名の女の子。同じ年の女の子。同じ県に住んでいる女の子。伏し目がちな女の子。文学好きの女の子。

…僕の心に、今なお残る女の子。

会いたい、もう一度。

会って、彼女と話がしたい。でも会えない。連絡先も、電話番号も知らない。彼女の情報はあのときの思い出だけ。本当にこのまま一期一会になってしまうような気がする。

僕の前髪をゆする午後の風が、職員玄関へ抜けていく。人の気配のない廊下が、静かに横たわる。世界が僕一人になったようだった。そう仮定してみると、簡単に僕は孤独に支配された。今にも涙が落ちていきそうな感覚。涙は落ちないだけで、僕の中に確実に水溜りを作っていく。やがて池になり、湖になり、海になり、いつまでも流せないまま巨大化していく。

自分の意思で涙を流せたら、どんなに幸せだろう。

汗のように涙を流せたら、僕は楽になれるような気がする。少しだけ幸せになれる気がする。

僕はふらりと中庭に出た。

職員室の前は、廊下を挟んで中庭になっていて、新緑が美しい。僕の高校は、校舎が二棟あり、それを結ぶ廊下が二本敷かれている。二階建ての校舎が二棟向かい合う形なので、俯瞰すれば長方形に見える。中庭は縦長で、例えばとしては大げさだが、ニューヨークのセントラルパークのようだった。

僕は、過去の情景に照らし合わせるように一本木の下の白いベンチに座った。奥のベンチには、恋人同士らしい生徒が手を握りながら会話していた。

僕はゆつくりと目を閉じる。蝉の狂想曲が、僕の頭の中をくくるとまわる。緑の香りをそよぐ風がつれてくる。

心地よい感覚が、体中に浸透していく…。

中庭を抜けていく風が止むと、僕の左手に暖かい感触が滲んできた。

「気持ちいい」

人肌の感触だった。

「…雅！ 葉月雅！」

僕は、驚いて彼女を凝視した。雅は瞳を閉じて中庭の空気を吸い込んでいた。肺にためた新緑の息をゆつくりと丁寧に吐き出すと、僕をその瞳に映す。

「これは、夢…？」

僕は、周囲を見渡した。

奥のベンチに座るカップルが、抱きしめあっている。頬を赤く染めた二人が、熱く見つめあいキスをする。何度も何度も唇を合わせ、熱く、そして、深いキスをする。あの二人はここが学校であることを分かっているのだろうか。

「総…」

僕はぎくりとして、あわてて雅に向き直った。

「あなたが望めば、どうにでもなる」

奥のベンチのほうから嬌声が聞こえ始めた。僕は自分のいきり立

ちそうな下半身に神経がいつてしまう。雅の前で、という恥ずかしさも手伝ってコントロールすることができない。

「ここはあなたの世界。あなたがしたいと思ったことを自由にできる世界」

「そんな…今までどんなに望んでも、そんなことはなかった。この世界が僕の自由になるなんて、それこそ夢みたいなのがあるはずない」

雅は少し困った顔をした。

「時間は待つてはくれないわ。あなたが理解してくれなければ、あなたは消えてしまうことになる。総、あなたはもう感じているはず。あとは、理解するだけ」

雅が僕の手を強く握る。

「こんな感情移入をしてはいけないのかもしれない。けれど…」

雅のためらいは、無遠慮な声にさえぎられてしまう。

「…そこまでにしてもらおうか」

夢の中に現れた黒いフードの男が、奥のベンチの近くに立っていた。二人の男女が抱き合う隣で、不敵な笑みを浮かべる。

「これがお前の望んでいることなのか。さすがはキツチュだな、とんだまがい物だ」

低くこもった声だが、そこに秘められた氣勢は鋭い。

「雅、そこをどけ」

雅が初めて見せた苦渋の表情だった。僕の前に毅然と立っている彼女を見ると、僕はとても懐かしい感情に陥る。いつぞやも同一の感情を抱いたことがあった。

この感情は何なのだろうか。

「お前が俺に言ったことを忘れたのか」

「雅、あいつは…」

黒いフードの男と雅に、なんらかの関係があることが信じられなかった。

「総、これはあなたにとって不可避の出来事。私があなたを選んだ

瞬間から、宿命づけられてしまったことなの。でも…、私はあなたを選んだことを後悔し始めている。自分でも分らない、すべてを知っているはずなのに」

雅は僕を向き、黒いフードに背を向ける。そして、優しく微笑んだ。

「覚えておいて、この世界はあなたの望むようになる。あとは、理解するだけ」

フードの男が、雅の行動を阻止しようと突進してくる。

「雅！」

男は叫んだ。大地を力強く蹴った途端、空中高く舞い上がり、コートがはためく。その手には、いつの間にか長槍が握られていた。

僕はまるで映画を見ているような気分だった。

ありえない跳躍力、いつの間にか出現した長槍。

僕は震えるような恐怖に襲われた。恐怖が全身に充満してしまったのか、体は反応しない。

「総！」

雅は僕の手をぐいと引く。

重力加速を得た槍は、僕のいた場所を深々と突き刺した。中庭の芝がはげ、槍がほぼ垂直に突き刺さっている。男は、槍を握り締めたまま、雅を睨みつけた。フードで顔は見えないが、僕はそうだと確信した。

「総、来て！」

雅は僕の手を離さない。

中庭を出て、職員室前の廊下に行く。フードの男は、槍を引き抜く動作も見せず、僕らのほうへ歩み寄ってくる。

ちらりと見えた奥のベンチでは、僕たちの騒ぎなどまるで存在しなかったかのように、カップルが蜜のような行為に耽溺していた。

「何なんだ、一体全体何だって言うんだ！」

僕の声に応えるかのごとく、廊下の窓が吹き飛び、職員室の壁に突き刺さる。廊下は銀色のかげらで埋め尽くされた。きらきらと芥

子粒が舞う中、フードの男は廊下へ着地した。

「どうやら、運は俺に傾いているようだな。キツチュは理解する気がないらしい」

雅の齒軋りが聞こえてきた。

「私は、本当はこんな風にあなたをかばってはいけなはずなのに。でも、私はそれに逆らうしかなかった。私のどこかに齟齬が生じた。やはり、世界は欠陥しか生み出せないのね」

男が両手を広げた。そして、何かを持ち上げるようなしぐさを見せる。すると、破砕された窓ガラスの破片がいつせいに空中浮遊し、ゆらゆらと漂い始めた。

「キツチュにはできないだろう。所詮、まがい物、だからな」

「何を言ってるんだ。ちゃんと分かるように説明してくれ！」

男が大きく振りかぶった。

「世界って何だよ！」

ガラス片が身構えるように牙を剥く。

「キツチュって、まがい物ってなんのことだよ！」

僕にその切っ先を集中させているのが分かった。

「これだけは教えてやる」

きらめきが、鮮血を求めて男の指示を待つ。

「これは、俺とお前の世界なんだ」

男が腕を大きく振った。獲物に向かうハイエナが、僕に大挙して押し寄せる。

僕は、目をつぶった。恐怖と、非現実的な出来事と、不理解な問題、そのすべてにまぶたが押しつぶされたから。終わりの予感を覚悟した。

絶対に忘れませんから。

僕は暗闇の中でその声を聞いた気がした。

第六話・「ここはあなたの世界」(後書き)

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
います。終着駅で誰かに起こしてもらったおかげで、駅員さんに起こされなくてすみしました。そんな作者ですが、これからもよろしく
お願いします。評価、感想、栄養になります。

第七話・「私、あきらめたくない」

「…もしもし？ 起きてますか？」

ベンチに座っていた僕を、下から見上げるようにひざを抱えている。僕はどうかやら、ベンチに座ったまま居眠りをしていたようだった。

ひどく暑い。

滝のような汗が、僕の肌という肌にまわり付いていた。眠っていると体温が上昇する、ということを知っていたことがある。しかし、これは異常すぎるほどの発汗だった。暑さによる汗ではない、言うなれば、冷や汗のようなものに似ていた。

「すごい汗。いったいどんな夢を見たらそんなに汗がかけるの？」

僕は汗をぬぐうと、冷静になろうと深呼吸を繰り返した。

「雅は…」

僕は周囲を先ほどの出来事と照合した。

「優美で上品なこと。洗練された感覚を持ち、恋愛の情趣や人情に通じていること」

にこやかに答えるのは、僕を見上げる女生徒。

以前、文学部員勧誘してきた女の子だ。つぶらな瞳に、セミロングの組み合わせは、雅とは違ってどこか活発な雰囲気が漂っている。

「いや、違うんだ。そういうことではなくて」

全体的には華奢な雰囲気だが、腕には引き締められた筋肉の張りがある。ただ痩せているのではなく、脂肪を絞り込んでいることからも、活発な雰囲気という僕の読みは外れではないだろう。

「何が？ 私、間違ってる？」

僕は、肩の力が一気に抜けたような気分になった。ふと、奥のベンチが視界に入る。仲の睦まじい恋人同士が肩を寄せ合って、会話をしていた。夢であることに安堵感を覚え、思わず微笑んだ。

「ちょっとこっちに来て」

「え、あ、おいっ！」

いきなり僕の腕をつかみ、中庭の出口に歩き出した。

夢の中の出来事が脳裏によみがえる。黒いフードの男が現れ、僕を襲ったこと。雅が僕の手を引いて助けようとしてくれたこと。夢は目覚めるとすぐに忘れてしまふはずなのに、ありありと頭に描くことができる。

傾きかけた太陽の日差し、中庭を駆け抜ける風、芝の質感、ベンチの白さ、そして、雅の手のひらの温かさ。ガラスの碎ける音、フード男の下卑な声、雅の切迫した表情、僕の叫び、そして、最後の瞬間に聞こえた、あの少女の声…。

「忘れてるでしょう」

僕の手を彼女が離れたのは、文学部の部室の前まで来てからだっただ。引つ張られていた腕がひりひりする。女性にしてこの握力はいかなるものだろうか。

「総、忘れてるでしょ…」

僕を甘えた瞳でみつめる。

この瞳を見てしまったら、僕は断ることができなくなりそうだった。そう確実に言えるほど、この女生徒は男性の心をくすぐるものを、たくさん持っていた。

「忘れていたというか、思い出さなくなかったというか」

僕はあからさまに目をそらす。

「覚えているならどうして来てくれないのよ？ 文学部を見学するってそういう約束だったじゃない」

「でも、それは先生から半ば無理矢理…。それに、さっき顧問の先生に入部の意思はないって断ってきたし」

「そうであっても、約束は約束でしょ。はい、さっさと入った入った」

僕は強引に背中を押され、部室に連れ込まれた。

連れ込まれたというのには語弊がある。反抗するつもりならいつ

でもできた。

しかし、あえてそれをしなかったのは、どこか必要とされることに満足感を覚えていたからだった。

部室は長年の伝統などは見る影もないくらい狭隘で、本やプリントなどが散乱していた。

でも、僕はこの空間に嫌悪感を抱いたりしなかった。中学校のときの部室もこれと同等であつたし、何よりこの本やプリントなどの紙類が乱雑にされているのは、僕の好きな空間のひとつだつた。

そう、僕は紙の匂いが好きだ。

中庭の空気のおいも好きだ。

雨上がりのあぜ道の匂いも好きだ。

ただ、同じ雨上がりでもアスファルトのにおいは嫌いである。

とにかく、僕はこの紙で混雑した空間に埋もれることが好きな人間だつた。だから、嫌悪感は微塵も抱かなかつた。

しばらく部室を眺めていた僕は、自分が再びこの世界に引き込まれつつあることに気付き、頭を振った。

「そんなところに立っていないで、座つてよ」

僕を向かいの椅子に促す。

「それじゃ、はじめに、これどうぞ」

僕にプリントの束を渡す。表紙には部活紹介と銘打たれていて、一枚目は主に活動内容と実績が記載されていた。

「活動内容は、小説、評論文、俳句、短歌、など多岐の分野にわたる文学作品の執筆。月に一度の月刊誌の発行……」

「本当は、隔週にしたいんだけどね」

残念そうに、僕の音読に補足する。

「月刊誌の発行の翌週には、各部員による批評。優秀な作品は、文学賞への応募もある。年一回、文学誌の発行が文学部としての目的であり、部員の主眼はここにあるといってもよい」

うんうん、と頷きながら僕の音読を聞いている。

「実績……」

僕は読むのが面倒になって黙読に入った。

県文学賞の連続受賞記録、有名文学賞の受賞実績、文学部から輩出された小説家の記録…。

「どう？　すごいものでしょう」

「そうだね」

僕は、次のページをめくった。そこは、部員紹介だった。

「部長、和泉恵理子^{いずみえりこ}。一年…。は？　一年？」

僕は目を疑った。そして、目の前にいる女生徒を疑った。

「これ、いつの部活紹介？」

「二年前」

「何だ…」

「嘘。今年の」

「…」

僕は嫌な予感がして部員紹介を読み進めた。

「好きな本、太宰治、武者小路実篤、谷崎潤一郎など。趣味は執筆に映画鑑賞。特技、小説を書くこと。最近気になっていること、文学部の部員が少ない。好きな食べ物、焼肉。特にタン塩…」

一枚のページに長々と自己紹介が書かれていることと、自己紹介のページ数がとても薄いことから、僕は心配になってきた。この部の未来もそうだが、部長の今後も。

「スリーサイズ、上から…」

僕は、そこまで言って無性に悲しくなってきた。窓に透き通る落陽と、文学部の落日が重なって見えた。部室が暗くなっていくのは、落陽のせいではないような気がした。

「聞きたくないんだけどさ」

「なら、聞かないで。私も、結構感じているんだから。もう少し色をつけてもいいわよね。そうでもない、部員増えないよね。やっぱりか…。色気で部員を増やそうという考えが、そもその間違いなのかも」

「…」

「え、違うの？」

僕は少し大きさにうなずいた。

「俺が聞きたいのは、総部員数は何人なのかなって」

僕は問い詰めるように彼女に迫った。取調べをする警官と、被疑者のやり取りに似ていた。

「実は……」

急に、齒切れが悪くなり中央においてあるテーブルに文字を書き始めた。

「バストを二センチほど割り増しに書きました」

僕は帰ることを即決した。

立ち上がり椅子を戻すと、入り口へと向かった。紙の匂いは名残惜しいけれど、僕にはその残滓で十分だった。もはやこの紙の匂いで充満した部屋にはいまい。思ったとおり、部の状態も芳しくないようだし、厄介ごとに巻き込まれるだけは避けたかった。

「総、お願い」

僕のシャツを引っ張って、追いつがってきた彼女を、僕は羽虫を追いつかのように振りほどくと、彼女は傷ついたような顔をした。

電気をつけていない部室は、泥棒に物色された部屋にしか見えなかった。

僕はさすがにかわいそうになった。胸の奥にとげが刺さるとともに、僕の無慈悲な行為を何度もリプレイして反省する。

「ごめん」

僕はそれだけ彼女に届け、沈黙するしかなかった。部室の空気はよどんでいる。窓はあるが開けてはいない。いつの間にか汗は乾いていて、涼風が遠くからほんの少しだけ駆け込んできていた。肌で感じられるほど、僕は神経を周囲に張り巡らせていた。

彼女の動向が気になって仕方がなかった。

僕以外の男なら、おそらく彼女の気を引くために優しい言葉をかけたり、二つ返事で入部してしまったりするだろう。

でも、僕にはそれができなかった。

彼女は確かに誰から見ても、端麗な容姿を持っている。それだけに、僕は彼女が信じられなかった。僕である必要が感じられなかった。僕を真つ先に勧誘するほどの優先性を、僕は持っていない。過去に文学賞受賞という経歴はあるけれども、それは文学部の現在の問題に合致しないのだ。

今の文学部に必要なものは、あくまで部を存続するための部員であり、即戦力ではない。

だから、彼女がこんなに苦勞してまで僕を誘う理由が分からなかった。彼女ほどの人間なら、僕以外の部員を探したほうが断然早い。それだけは間違いなかった。

「総、私……」

考えれば考え込むほど馬鹿らしくなってきた。少しでも僕が必要にされていると早合点して、天狗になりかけていた自分に。

「それに」

僕は自己嫌悪の呪縛から解き放たれようともかくあまり、苛立ちと焦りを同時に声に出した。それは、誰が聞いても、苛立ちのほうに優先して聞こえてしまう声だった。

「俺の名前を知っているだけならともかく、どうしていきなり呼び捨てなんだよ」

思い起こせば、出会った直後から変だった。

彼女、和泉恵理子は、僕が廊下を歩いていると、急に驚いたように声を上げ、僕の名前を呼び捨てにした。そういう些細な事にこだわらない性格なのかもしれないが、僕はそうではない。どちらかと言えば、些細なことでも過敏に反応してしまう性質だ。

彼女は僕をいきなり廊下の真ん中で呼び止め、文学部のことを話し始めた。

僕は、廊下の真ん中、公衆の面前ということもあって、恥ずかしさのあまり文学部への見学を承諾してしまった。

僕が文学部だった、ということを知られたくない。その気持ちの答えが、部活見学の承諾につながっていた。

僕の承諾を聞いた和泉恵理子は、太陽のような燦々とした笑みを残して教室に戻っていった。それを見た巧は、かなりうらやましそうにしていた。

「俺は君に会うのはこれで二度目なんだ。なんというか、急に親しくされても、正直どうしていいか分からない。君は関係ないのかもしれないけど、俺はそういう人間だから」

「…そう、だね。二度目なんだね…」

一気に彼女の語気がしぼんでいくのが理解できた。可憐な花が一夜で枯れていくように。

僕はいよいよ彼女を振り向けなくなった。振り向いたら最後、僕は世界一最低な男の烙印を押されるような気がした。

もう、すでに手遅れなのかもしれないが。

「総…うつん、総君」

呼び捨てにする癖が付いているのか、君をつけて改めて呼びなおした。

「私、あきらめたくない。あきらめない、から」

僕の背中をそつと撫でた声は、涙に濡れている気がした。彼女は僕の隣にそつと並び、静かに追い抜き、そのまま廊下の角を曲がって見えなくなった。

僕は開けっ放しの部室の前で、呆然と廊下のしみに目を泳がせていた。

第七話・「私、あきらめたくない」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
CDケースを踏んでしまつて足がいたです。また、踏んだ
CDケースは壊れました。泣きつ面に：なんたらです。そんな作者
ですが、今後ともよろしく願ひします。感想、批評、栄養になり
ます。

第八話・「慰めて欲しいのね」

何者かに執拗に追われる夢を、いつから見始めたのだろう。

いつだと断定することはできないが、高校入学してからの線が色濃い。

前触れもなく見始めて、そして、気づかないうちにその夢を見なくなっていくのだろうか。

夢などその程度だ。

子供のころに見た夢を、僕は覚えていない。それが当たり前だと思う。夢は記憶の整理のためでもあるのだから、いつまでも覚えていては脳内が繁雑になってしまう。だから、覚えたままにしていることにさしたる意味はない。

僕はそう考える。

「ただいま」

僕は玄関のドアを開けた。

暗闇が僕を出迎える。毎日の日課のようなもの。無意味な挨拶。

それとわかっていて繰り返すのは、長年そうしてきたから。

この瞬間が、一日で一番嫌いだ。

思い出す自分がいる。過去の思い出にとらわれてしまう自分がいる。

僕は、和室にある仏壇の前に座り込んだ。両足を抱え、写真に写る女性をみつめた。楽しくもないのに毎日僕に微笑み返す。僕はいつか表情を変えるのではないかと、時々、頑として目を離さないときがある。どちらが先に笑ってしまうかを競う、我慢大会の要領で。結果はいつも引き分け。

母は、微笑んだまま決して表情を崩すことはなかった。

「ただいま」

玄関から、重く疲れた声が聞こえた。

「いたのなら電気ぐらいつけたらどうだ。空気の入れ替えもしない

で。蒸し暑くてかなわないな」

「…今、帰ったところだったから」

「夕食はとったのか？」

僕は首を横に振った。

「昨日は俺が作った」

「ん、そうか。今日は父さんの当番だったな。そうだな、何がいい？」

「…別に。何でもいい」

「…そうか」

このやり取りも、日課のようなものだった。

母が仏壇に飾られるようになってからは、僕と父が順番に夕食を作るようになっていた。家に帰ると、毎日同じことの繰り返し。

この日々は、退屈以外の何物でもない。

父がキッチンで食事の準備をしている気配を感じながら、僕は二階にある薄暗い自室に入る。電気もつけずに、ベッドに横たわった。停滞した湿気。シーツに顔をうずめながら、僕は子宮にいる赤ん坊のように体を丸めた。

「僕は、何がしたいんだ…」

誰に伝えるでもなく、そっと暗闇に流し込んだ。

ふいに、暗闇が揺れる。

「…！」

「こんばんは」

雅は、僕のベッドに腰掛けると、僕の顔を見て微笑んだ。あわてて体勢を立て直すと、雅から少しはなれてベッドに腰掛けた。暗闇の中では、この距離感が僕にとっては安全な距離だった。

これ以上近づくと、僕はうまく言葉を話せないほど緊張してしまいそうだった。

「どうしてかな…」

雅が僕の横顔をじっと見つめているのに気付いた僕は、急に顔中が熱くなった。もちろん気温のせいではない。

「雅がここにすることが、当たり前のような気がする。本当は、驚いて当然の状況なのに」

「ここにいたい。そう思ったから、私はここにいるの」

「そんなことを言えるのは、君だけじゃないかな。普通の人間は、思ったからって、望んだからって、すべてが自由になるわけじゃない。君が何を望んだかは、知らない。でも、君のように自由になれない人間が、たくさんいるんだ」

「総、それはあなた自身のことね」

静かな薄い闇。うつすらと見える雅の顔。時間の流れが分からない真っ暗闇に暑さが加わり、僕は思考を鈍らされていた。

「僕は…」

自分の手を強く握り締めた。握力を高めていくと手が震え始める。「僕は、本当は文学部に入りたいんだと思う。自由に文学をやっていたい。こんな無駄な流れを続ける生活は…嫌なんだ。きっと、本当は…」

「慰めて欲しいのね」

僕は、いつそう優しく微笑んでくれる雅にどこか惹かれ始めていた。

自分の気持ち正直に吐露できる存在。そんなより所となれる彼女に惹かれ始めていた。

「そうだとしたら」

僕はとても寂しかったのだと思う。

「総、おいで」

だから、雅が両手を広げて、僕を受け入れてくれたことが分かった、僕は気がどうにかなってしまいそうだった。胸からこみ上げてくるのは、言葉だけではなかった。

嗚咽や、涙、感情、ストレス。

僕が長年溜め込んだものが、胸から一気にこみ上げてきた。

雅は僕を優しく抱き締め、そっと頭を撫でる。

「よしよし…」

雅の柔らかな胸の中で、僕は誰にも開くことのできなかった胸懷を開くことができる。

「昔、昔、母さんが生きていたころ、今よりはずっとましだった。父さんは、家よりも会社にいるのが好きだったから、いつも僕と母さんを省みることはなかった。僕が家に帰ってくると、母さんが僕を迎えてくれた。『お帰り』って微笑みながら言ってくれた。でも、僕はそんな母さんが悲しかった。夜になると、一人で寂しく泣いている母さんを知っているから。父さんが家に帰ってこないのは、自分のせいじゃないか、って。父さんの写真を見ながら泣いていた。僕にはどうすることもできなかった。母さんを支える力がなかったんだ」

雅の背中を強く抱きしめた。雅は何も言わず、ただ僕の頭を愛撫している。

「でも、朝になると母さんは、夜泣いていたのが嘘のような笑顔で、『行つてらっしゃい』って、僕を送り出してくれた。そんな母さんに僕は、何をしてあげられる？ 何をしてあげられた？ 何も、してあげられない。してあげられなかったんだ」

母の夜の涙と、朝の笑顔を、僕は鮮明に覚えていた。忘れていく記憶は多々あれど、忘れることのできない母の両極の表情。僕の知らない昼の母も、きっと泣いていたのだろう。

「そして、母さんは、死んでしまった。自ら命を絶つて……」

雅が撫でるのをやめて、僕をしっかりと抱きしめなおす。強く、さらに強く僕を抱きしめる。苦しくなるのが、逆に心地よかった。

その強さが、思いの強さに感じられたから。

決して離すまいという雅の気持ちに染み込んできたから。

僕は、そうしてくれることが心地よかった。

「だから、僕は……」

「だから総は、お父さんが許せない。お母さんを苦しめたお父さんが許せない。でも総、すべてが総の思っているようなことではないの」

雅は僕の顔を上げさせ、言い聞かすように言葉を綴った。

「お父さんは、泣いていた。…愛すべき人を失って、悲しい人などいない」

「父さんが母さんを愛していた…？」

「言葉にできない思いがある。言葉では伝わらない思いがある。だから、人はそれを表現するために行動する。総のお父さんは、行動で示そうとした。働いて、誰よりも働いて、そして、家族を幸せにしようとした。不自由なく暮らせるように。でも、伝わらなかった。思いのすべてを人に伝えることはできないから」

僕は雅の鼓動を聞く。一定のリズムで刻まれる、生きているという証。

「静かに周りのものを見て。そうすれば、今まで見えなかったものが見えるようになる。一方が伝えることができないのなら、一方で感じてあげるしかない。お父さんも、お母さんも、総も」

安寧な空間に、僕の意識がスライドする。

「…不思議だ。君の言うことがすべて正しいように聞こえる。何でも知っていて、誰よりも広い心を持っていて…。なのに、こんなにも身近で、肌で感じられる」

雅の匂いが、母の匂いに似ていた。鼻の奥につんとくる、安心感と涙をつれてくることのできる匂い。

「総、私は、あなたの思うような存在ではない。こうしているのは、本来はありえないことなの。私がここにいる理由は、あなたにあなた自身を取り戻させるため。いわば、その使者のようなもの」

苦渋の色を濃くする声色。

「私が存在していられるうちに、可能性が見たい。あなたの可能性を」

ドアの向こうから、僕を呼ぶ声がする。父の声は、夕食の完成を告げていた。

「総、私は、もう…」

父が僕の部屋に近づいてくるのが足音から理解できた。僕は狼狽

し、雅の言葉を静止する。

「ごめん、夕食をすぐ済ませてくるから。それまで、ここにいて。絶対にこの部屋から出ては駄目だ。戻ってきたら、もっと話をしよう」

僕は自分の顔を普段の顔に戻すために、顔の筋肉をいろいろ動かし、最後にシャツの袖で顔をぬぐう。憂いを払拭した僕は、部屋に下りた夜の帳の中、雅に微笑んだ。

対して、雅は悲しそうに微笑んでいた。

第八話・「慰めて欲しいのね」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
包容力は、身に付けようとして身に付けられるものではないような気がします。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。感想、批評、栄養になります。

第九話・「何でそんなことも分からないんだ！」

食器の音だけが、静かな食卓に虚しく響く。

父が料理を作るようになったのは、母が死んでからのことだった。仕事一筋に見えた父も、仕事で一日中家を空けることがなくなった。家庭的な仕事もこなすようになったし、積極的にではないにしろ、僕に声をかけてくるようになった。

ただ、そういったあからさまな態度の変化を、僕は見せて欲しくなかった。

母が死んだから、家庭を大事にすることに気付いた。

母が死んだから、家庭的な仕事をこなすことにした。

母が死んだから、僕とのコミュニケーションをとることにした。

僕はそんな父の変化を望みはしない。たとえ雅の言うことが本当だとしても、僕には、母には伝わらなかった。

伝わらなければ、無意味だ。

けれど同様に、僕が、母が、父の愛し方に気付いていないだけだったとしたら。

「総、味はどうだ」

味噌汁の味が、母の味付けに似ている事が僕はたまらなく嫌だった。僕はその味が感じられないように、一気に喉に流し込んだ。父は僕からの返事が得られないと分かると、自分の食事に取り掛かった。

「ごちそうさま」

「もういいのか」

席を立つ僕に言う。

「父さん」

逆に呼びかけた僕は、背中を向けたまま。食卓だけにともされたオレンジ色の光が、過去の情景を思い出させた。スポットライトの当てられた舞台のように。

「母さんと、どうして結婚したの」

僕が誕生してから、一番初めの記憶は川辺で母と遊んでいる記憶だった。

そこに父の姿はない。

僕が知っている母の記憶よりも、父の知っている母の記憶のほうが圧倒的に多い。それは確かなことだ。それだけに、母を幸せにしてあげられるのは、僕ではなく、父であったことも、僕は悔しいくらいに知悉している。

母は、僕によくこう言った。

総は、お父さん似ね。きつと、素敵な男性になる。そうなたら、お母さんをお嫁さんにしてね。

僕は、母が喜んでくれるのなら、と幼心で考え、大きく頷いて見せた。

直後、母が僕を強く抱きしめ、震える胸の中から切ない声を漏らした。

きつと、約束ね。

母は、泣いていたのだろう。

「父さんは、どうして母さんを好きになったの」

父はただ押し黙っていた。

「…もういい」

僕は部屋に雅を待たせていることを思い出して、話を切り上げる。もともと、父にはろくな返事を期待してはいなかった。母が死んだときも、そうだった。母が死んで傷ついた僕は、父にきつく当たった。罵詈雑言などは序の口で、父に対して手をあげることすらしてしまった。それぐらいのことをしても、僕は誰にも咎められないと思った。僕が母を亡くしたことの重大さは、誰よりも僕自身が理解していたから。もはや、父に暴力を振るうことも、当時の僕の理性は制止しなかった。

しかし、父は梨の礫で、弁解、反撃はおろか、母のことさえ何も話そうとはしなかった。

ただ、ときどき父が自分の定期入れの中から写真を取り出して眺めているのを見たことがあった。

父の胸ポケットにしまつてある二枚の写真。

父はそれをじつと眺めているだけで、特にリアクションはなかった。だから、それが母の写真であるかどうかを確かめる術はない。それがもし、母の写真だとしても、それが僕に作用を及ぼすことになるうか。

いまさら、もう遅い。

母は、仏壇に飾られているのだから。

「高校のときから、あいつは誰よりも綺麗だった。すべてを包み込むような……綺麗な目をしていた」

「それが、母さんを好きになつた理由？」

僕は声が震えていた。憤懣が拳に力を与える。

「ああ。私は、あいつを愛してやまなかった」

防波堤が決壊するように、僕の中から怒りが迸った。

「いまさら……いまさらそんなこと言つたつて遅いんだよ！ 母さんは死んでしまった。もう、戻つてこない！ 父さんの愛し方では、母さんに伝わらなかった。何でそんなことも分らないんだ！」

吐き捨てた。

雅の語ることが真実であろうとも、狭量な僕には、それを信じ、父を許すことなど到底できるはずがなかった。長い年月を経て固まつたしこりが、一瞬で氷解するのなら苦しみはしない。それができないから、僕は父を嫌悪し、そんな自分自身にも嫌悪しているのだ。僕は部屋へ戻った。

僕の居場所は、この家にはここしかない。父と共有するその他の空間すべてが、僕は嫌だった。

父が僕を殴り飛ばす気概を持っていれば、違っていたのかもしれない、と思うときがある。

僕の暴言を父は甘んじて受けている。

怒るでもなく、悲しむでもなく、ただ唇を真一文字に引き結んで、

耐えている父。

父が何を感じ、何を思い、何を成そうとしているのか、僕は何も知らない。

それが、父の贖罪なのだろうか。僕のしたいようにさせることが、父の償いなのだろうか。石のように寡黙で、受身な父からは何も感じられない。それゆえ、僕は父の本心を知らない。

僕は、生暖かい空気を取り除くために部屋の窓を開けた。カーテンを空けると、月明かりが差し込んでくる。青白い光の筋は、一直線に僕の部屋に突き刺さる。

部屋を見回すと、雅はいない。

もともと、雅が僕の部屋にいること自体、不思議なことだった。

突然現れては、突然消える。

まるで魔法使いのような女性。理解できない言葉を言ったかと思うと、僕にしか理解できない言葉も発したりする。全てを知悉していて、超然とした、そう、この世の物事全てを見てきた傍観者のような、とても言葉にはできない女性。

中学のときに会った二条恵理子は、一瞬の輝きを秘めた人。

たった一度出会っただけなのに、僕の記憶に鮮明に残る人。

葉月雅は、まるでそこにいるのが当たり前のような、極端に言えば、体の一部のような、そんな人。

雅との邂逅で感じた懐かしさは、それを裏付けているような気がする。失われた僕の一部分が帰ってきた感覚。相当に異常な感慨を僕は雅に抱いてしまう。嘘についても、強がっても、きつと彼女には見透かされてしまう。だから、僕は彼女に正直に、素直になれる。それは、とても素晴らしいことなのだと思う。

雅は、きつと母親のような包容力を持った人なのだ。

「そういえば、雅と初めて会ったのは夢の中だった…」

僕は自然と笑いがこぼれた。ベッドに横たわり天井の模様を漫然と眺める。

「また、夢でも会えるのかな」

まぶたに雅の笑顔が映って、消えた。

第九話・「何でそんなことも分からないんだ！」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
ネクタイを締めるのにだいぶ慣れました。そんな作者ですが、これからもよろしくお願いします。評価、感想、栄養になります。

第十話・「虚しい死だ」

「あのまま寝てしまったのか……」

僕は汗をたっぷりとかいた体をベッドから起き上がらせた。額の汗が頬を伝って顎先へと達し、そのまま自由落下していった。

喉が砂漠化していたので、僕は部屋を出てキッチンへ向かった。

キッチンの冷蔵庫を開けると、冷蔵庫は空っぽだった。飲み物がないだけではなく、レタスの葉一枚ない、真っ白な空間。

僕は諦めて、外に出ることにした。

何の考えもなしに自動販売機を求めてさまよい歩く。行けども行けども、目的のものは現れては来なかった。

電灯にともされた路地を抜け、工事現場を迂回し、やがて駅前の大通りに出た。ここまで来ても自動販売機はない。すべて取り除かれてしまったかのようなだった。

「やっとつながったな、キッチン」

月夜に濡れた街中で、僕は声をかけられた。

「お前と夢をつなぐには、時間を同調させなければならぬなんて、本当に面倒だよ」

僕は周囲を見回すが、そこには誰もいない。いつの間にか駅へ向かう四斜線の道路の中央に僕は立っている。

車は一台として通らない。町には人影も見られない。店舗のシャッターはすべてが頑丈に下りていて、僕を拒絶している。風だけが道路脇の木々を揺らしていた。

「昼間は、運が良かった。が、同時に運が悪かった。まさか、使者である雅が邪魔をするなんて聞いていなかったからな」

僕は信号を見上げた。青から黄色に変わった信号に座っているのは、昼間に僕と雅を襲ったフード男。背後に満月を背負い、風にコート裾を揺らしている。嘲るような声は顕在だった。

「また……お前だ。どうして付け狙うんだ」

信号が赤に変わった。同時に男の姿も血のような赤に染まった。

「お前も雅に聞いたんじゃないのか？ それとも、ただ馬鹿なだけなのか？ どっちにしろ、知らないほうがこっちとしては好都合なんだがな」

「雅に聞いた…？」

「俺とお前は、こうして戦うことが運命付けられてしまったんだ。あの使者によつてな。もともとは出会わなくてもかまわなかった俺たちは、大きな意思によつてこうして選ばれた。逆らうことのできない、巨大な意思に。雅はその巨大な意思の代弁者であり、意思そのもののさ」

「何のことだ。雅は、ただの…」

「ただの何だ。ただの学生だとしても言うつもりか？ さすがはキツチュだな。虫唾が走るよ」

「それに僕はキツチュじゃない…篠崎総だ！」

「その名前を使うな。まがい物が！」

信号が赤から青へと変わった瞬間、フードの男が信号からジャンプした。正面に着地したかと思うと、体勢を低くし、風の音とともに突っ込んでくる。拳が唸り、僕の懷を完全にとらえた。僕はなすすべなく吹き飛ばされた。後頭部をしたたかに打ちつけ、腹部の痛みとの二重の痛みに悶えた。

かろうじて起き上がるが、腹部の強烈な痛みが吐き気を催させた。「まだコントロールさえできないか。ま、所詮こんなものだろうな」フードの男が、痛みを腹を抱えてうずくまる僕の前に立つ。「最後にひとつだけ問題をだしてやる」

フード男は、僕の髪の毛を引っ張り上げ、自分の顔の前に持つてくる。そして、フードを取った。

「これは、現実か、それとも夢か」

フードから現れた顔は…。

「答えるよ、篠崎総」

僕は、自分の目を疑うことしかできなかった。

僕の眼前には、僕がいた。

「夢だ……」

痛む体をこらえて僕は呟いた。

こんなことがあるはずがない。

その言葉が、無限の螺旋となつて僕の脳内を駆け巡つた。人間離れした技も、僕と同じ顔を持つのも、すべてに説明がいかない。まるで、映画や漫画の世界だ。そして、それを納得いくものに変えるには、夢、とすることしかない。

これは、夢だ。

「正解のようで、不正解だな」

僕は僕に下卑な声で笑いかけた。

「確かにこの世界は夢だが、目の前にいる俺は現実だ。つまり、どちらとも外れつて訳だ」

僕にはもう言葉もなかった。

「俺はお前を殺して、俺を取り戻す。それが俺に課せられた使命だ」
信号が、再び黄色に変わる。僕はそれをじっと見詰めていた。自分の死が近いことを知っていたからなのかもしれない。

「ここでの死は、すなわち、精神の死を意味する」
すでに諦めていた。

夢なら覚めて欲しかった。

しかし、再び眠りに付けば、僕はまた追われ、またこの一方的な殺し合いが始まるのだろう。そう考えると、ここで僕が死んでも死ななくても、最終的な結果は僕の死で固定されていることは明らかなのだ。

だから、僕は諦めて黄色の信号をみつめていた。この夢のような現実から目をそらしたかった。

「つまり、これでジ・エンド。エンドロールも流れない、虚しい死だ」

唐突に、信号が黄色から赤へ、変わらない気がした。
なぜかは分からない。だが、突然思った。

変わらない。

黄から赤へ、変わらない。

信号が黄色から赤色へと変わるの、いわば法則のようなもの。交通法規で定められた絶対的なもの。疑う余地はない。

しかし、僕はその黄色に灯った火が、赤に灯ることはないと思った。

「信号は、黄色から…何色に変わる…？」

「死ぬ間際に何を言うかと思えば、そんなことかよ。せめて念仏のひとつでも唱えろ」

「信号は…」

僕の視線を感じたのか、もう一人の僕は先ほどまで自分の座っていた信号を振り返った。

「信号は…」

刹那、黄色に輝いていた信号は、紅蓮の赤へは変化せずに、草原のような青に輝いた。

第十話・「虚しい死だ」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。今年初めて桜を見ました。あまりの美しさに、百聞は一見にしかず、という言葉を思い知らされました。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。感想、批評、栄養になります。

第十一話・「忘れられないんだ」

僕は、夜中に目覚めてから、朝まで決して眠らなかった。往年のホラー映画に、そのような類のものがあつた気がする。

眠ると怪人が襲ってくるため、子供たちは眠らずに日々をすごす。しかし、結局は眠ってしまい、夢の中で凄惨な目に遭う。

まさに、それと同じだった。

それでも眠気は何度も襲ってきた。僕はその度ごとにカフェインを摂取し、冷水で顔を洗い、ガムを噛み、体に痛みを与え、何とか耐えた。

一日目はそれほど苦痛ではなかったが、二日目に入ると身体機能が低下し始め、津波のように眠気が押し寄せてきた。

学校で授業を聞いているときが一番つらい時間だった。まるで子守唄のような授業が続く、僕は何度も頬杖を崩した。再三の注意を受け、そのときは目が覚めるが、一時的な効果しかなく、眠りに落ちてしまう。

放課後を迎えるころには、もはや何度眠りにつきかけたか数えられないほど、睡魔に襲われ続けていた。

きつと、僕の周りを睡魔が楽しそうに踊っているはずだ。

「夜更かしも大概にしとけよ」

僕の失態を見かねた巧が声をかけてきた。珍しく心配そうにしている。

「顔色悪いぞ。何かあつたのかよ。夜に寝れないほど面白いこともあるのか？」

「いや、そういうのじゃない。むしろその逆なんだ」

僕は放課後の教室で窓に寄りかかりながら、鈍重な体を休めていた。

「誰かに追われる夢なんだ」

だるさと暑さに今にも溶けてしまいそうだった。

「誰かに追われる夢：か。いつか話したやつか」

大げさな仕草で考え込む巧に、僕はあまり気の利いた答えを期待してはいなかった。

「そういうのって、色々な所で聞くよな」

「色々な所？」

午後五時を回ったというのに構内はまだ光に包まれている。遠くからは吹奏楽部の演奏が聞こえてくる。大会が近いからだろうか、本番同様の荘厳な音色が、校舎のバックグラウンドミュージックになっていた。

「噂みたいなものさ。特定の場所で聞けるんじゃないかと、話の流れとか、その場その場の弾みでそんな話をするのさ。誰が最初に話し始めたとか、そんなことなんてわからないけどな」

巧は、持ち主が帰宅した机を選んで、そこに腰掛けた。

「ただ、気にはなるよな。なぜそんな夢の話を噂しなければならいいのか。追われる夢を見ると何が変わるのか、とか。火のないところに煙は立たないって言うし、その噂だって、どこかに火があつて、そして、火種があるんだよ」

机に腰掛けている巧が、足をぶらぶらさせている。机が体重で苦しそうにきしむ。

「で、お前は日々そんな夢を見る、と」

「ああ」

「それで眠れない、と」

「ああ」

「何でそんなに恐れるわけ？ たかが夢だろ。夢はいつか必ず覚めるんだし、深く考えることなんてないだろ？」

巧の言う通りだった。たかが悪質な夢で、僕がそんなに悩むことはない。結果的に夢は危機的な状況でもかろうじて覚めるのだし、こうして僕はいつもどおり生きている。夢の中で言われた言葉も、僕が作り出した夢の一部かもしれない。

そう考えると、今僕が不安に思っていることも無駄に思えてくる。

「そんなものかな」

「そんなものさ」

僕の肩を叩いて、笑顔をたたえる。僕は、深呼吸をすると預けていた体を起こした。

寝不足でまだ鈍重だが、巧のおかげで少しは軽くなったような気がする。

「ま、あんまり深く考えないことだな」

もう一度、巧が僕の背中を叩く。背筋がすっきりと伸びるような気がした。

「…ん。総、誰かに呼ばれてるぞ？」

「誰かって、誰だよ」

僕らは耳を澄ました。確かに遠くで僕を呼ぶ声がある。僕を大声で呼ぶような輩は、この学校には巧以外にいないはずだ。

僕たちは辺りを見回しながら声の主を探す。

「あ、あそこ」

僕は二階の教室から外に視線を移す。視線の先には校門があり、下校する生徒やランニングをするバスケット部員が校外から出たり入ったりしていた。

その校門のほぼ中央に、大手を振っている生徒がいた。

「あれって…一組の和泉恵理子だよな」

「知ってるの？」

「有名でしょ。サッカー部の有名人と双璧だからね。ちなみに彼女のニックネームはオールマイティ恵理子」

僕は吹き出してしまった。

「何だよ？ そのあだ名。漫画じゃあるまいし」

「俺がつけたんだけどさ、結構浸透力あって。なかなか他の人にも通じるんだよね、これが」

「オール、マイティ…なんでもこなせる人、ね」

「嘘だと思っただろ」

「そんな人間いるわけない」

吹奏楽部の演奏が途切れる。続いて合唱部の声が静かに聞こえ始めた。吹奏楽部の演奏に隠れていたのか、まったく聞こえてこなかった。そこが、廃部寸前の部に漂う悲壮感だった。

「ところが、俺たちに見えているところは、まったくもってオールマイティなのさ。学年で三本の指に入る成績、身体能力テストでは並み居る運動部員を破つての堂々一位。おまけに最上級の美人。街中を一人で歩くと、たいてい男に声をかけられる。まさに才色兼備ドラマとか、漫画の世界から、そのまま飛び出してきたかのような存在だね。…そうだった、総、この前勧誘されてただろ。覚えてるぞ、俺は」

「そう、だったかな」

「肯定なのか、名前なのか、紛らわしいな」

「総、かよ」

「そう、だよ」

「……」

「つまり」

気付けば、オールマイティ恵理子が僕たちの真下にいる。腰に手を当てて、今にも怒号が聞こえてきそうだ。

「やあ」

「やあ、じゃない!」

怒号が耳にこだました。思わず僕は首をすくめた。

「気付いたのなら、手ぐらい振るべきでしょう!」

僕は、怒声を張り上げる恵理子に手を振った。

「いまさら遅いだろ」

巧が僕のほうを見て、ぼそっとつぶやく。

「今からそっち行くから!」

周囲を気にせず二階に向かって大声をあげると、玄関口のほうへ歩き出した。こちらをちらちらと窺っているのは、僕が逃げ出すのではないかという危惧からだろう。

「ところで。お前、やっぱり知り合いなんだ?」

「まあ…ちょっと」

巧が僕の首を腕でぐいつと引き寄せる。

「ちよつと、っていうのが気になるな、真面目な文学青年であるはずの総君も、面食いなんだねえ…」

夢の中で聞いたことのある言い回しだった。雅がクラスに転入してきて、見とれていた僕に対して巧が発した言葉だったはずだ。

それにしても、夢のことなのにここまで覚えているのは不思議だ。「そういえば俺の情報網だと、彼女はただ一人の文学部だったような…。あ、そうか、そういうつながりか。とすると総、お前文学部に入ったのかよ？」

「誘われたけど、断った」

「元文学部なの？」

「元文学部だからって、高校でも文学部に入らなくちゃいけない道理はないだろ」

「ま、それはそうだ」

つつけんどんな対応に、巧は詮索をやめたようだ。僕の不可侵領域に触れたのが分かったからだろう。

「とにかく、うらやましいのはあるな」

「そうかな」

「そうかな、ってあの容姿を見て何も思わないのかよ。彼氏として隣を歩いているところを想像してみる。おそらく、俺だったら天にも昇る心地だね。それでもって、家に呼んで、二人きりになってみる、狼のような心地だぞ。そしてあの体を…」

「巧、下ネタに走るな」

反射的にたしなめていた。

…が、確かに巧の言う通りなのかもしれない。

校門のところで手を振って僕の名を呼んでいた彼女を、何人の男子生徒が振り向いていたことだろう。そして、彼女の手を振る先が僕だと分かった時の、男子の舌打ちの表情のすさまじさは、筆舌に尽くしがたい。語るもおぞましいほどだ。

「それとも、総、誰か気になる人でもいるのか？」

「ど、どうしてそうなるんだよ」

「怪しいな、その反応……」

トンボの目でも回すかのように、指を僕の目前でくるくる回す。

巧の表情はなんともいやらしい。

「言っちゃえよ、総。誰が気になるんだ？」

「いいじゃないか、そんなこと」

「じゃあヒントだけ教えてくれよ。そうだ……この高校の人？」

「……違うんじゃないかな、多分。どこの高校に行ったのか知らないから。ただ、県内の人だよ」

「年は？」

「同年だった。……はい、ここまで」

「何だよ、水臭いな。それじゃあ全然ヒントになってないじゃん。な、もう一つだけ」

せがむ巧は、両手を合わせて拝むように目をつぶる。

「その子に出会ったのは、昔？」

「うん、一度だけなんだけど、忘れられないんだ……って」

「あ、和泉恵理子」

手を合わせたままの巧が、間の抜けた声を上げた。僕は、ついつい巧の言葉と思って即答してしまった。

「その忘れられない子っていうのは、中学校三年のときに出会った子じゃないの？ 文学部員の子で、授賞式のときに一緒になった……」

「何なの、何だっというの」

巧の視線が、僕と和泉恵理子を行きつ戻りつし、和泉恵理子は、僕ににじり寄ってくる。そのどこか鬼気迫るものに、僕は気圧されていた。

「違う、違うよ」

僕はとっさに否定した。ただ、その否定は、質問に対してではなく、確信をつかれたためにあわてて否定したものだっただ。

「本当に違うの？」

残念そうな声と表情が、視界いっぱいに広がる。僕は、これ以上その表情に耐えられなかった。

「ところで、何だよ。ぼ…俺を呼んでいたじゃないか」

つい、僕、と言いつづになる。

「あ…」

自分の興奮に改めて気付いたのか、にじり寄っていた体を元に戻すと意気消沈したように言葉を詮索し始めた。

「文学部への勧誘を、しようと思って」

「それは断つただろ」

「でも、入部して欲しい」

「別の奴に頼めよ」

「…そんな人いない」

「なら、色気でも何でも使って、意地でも勧誘すればいいだろ」

僕は言葉の切っ先が鋭くなっていくのを感じた。

自分でもどうしてこんなにむきになってしまうのか分からなかった。雅と話しているときのような落ち着いた気持ちにはなれない。それどころか自分でもおかしいくらい冷徹になってしまふ。

僕の今の言葉は、まるで軽蔑するような色に満ちていた。

「俺、入ってもいいよ」

「巧…」

僕は巧を驚嘆の声と眼差しで凝視した。

「和泉の望むような文学活動はできないかもしれないけど、努力はする。それに、こんな俺でも部員の人数にはなるし。もしかしたら幽霊部員になるかもしれないけどね」

巧が和泉恵理子に笑いかける。その笑顔に和泉恵理子もつられて微笑む。

「…じゃあ、書類渡しますから、部室まで来てくれますか」

「もちろん」

僕は朴念仁と化していた。この会話に入る余地が見つからなかった。それ以前にこの場にいるべきではないような気がしてきた。

「そうと決まれば、今すぐ俺の気の変わらないうちに行こう。俺、秋の空のように気が変わるからさ」

そう言いながら巧は、和泉恵理子の肩を軽く叩いた。先に教室を出る巧につられて和泉恵理子も廊下につま先を向けた。

僕は最後までその場に存在しないように無視されていた。

第十一話・「忘れられないんだ……」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
これから頑張っていきますので、どうかよろしくお願いします。
感想、批評、栄養になります。

第十二話・「小説が書きたい」

僕は、文学が好きだ。

小説を読むことが、言葉を綴ることが好きだ。

小学校のころ、僕はひとつの小説を書き上げた。それは、幼稚な小説だったが、僕の初めての小説だった。誤字脱字の目立つ、それこそ小説といえないくらいのもだった。しかし、僕は今でもその小説の内容を良く覚えている。僕の願いの込められた小説だったから。

幸せな家族。

そう銘打たれた小説を知っているのは、僕と母だけ。当時の僕の生の感情が反映されていたから、今でもよく覚えているのだ。

内容は、単純明快。家族を省みない父が、やがて家族の大事さに気付いていき、最後には幸せな家庭生活が戻る、という話。

母にその小説を渡したとき、母はとても喜んでくれた。

こんなにたくさん書いて……。頑張ったわね。えらい、えらい。

母の暖かい手が、僕の頭を撫でてくれた。偉大な優しさを秘めた胸の中で抱きしめてくれた。

愛しているわ、総。

僕は、その言葉が聞きたくて、何度も何度も小説を書くようになった。

母に喜んでもらうため、母の笑顔を見るため、声を聞くため、撫でてもらうため、抱きしめてもらうため、そして、褒めてもらうため。

些細な動機。ほんの些細なことだけれど、当時の僕にとっては死活問題だった。

上手な小説を書くために、手当たり次第小説を読んだ。思いついては寝る間も惜しんで原稿用紙に向かった。物語の方法論を知り、プロットを作り、破綻のない小説を目指した。起承転結を知り、短

編と長編に書き分けることを知り、感動の法則を知った。

僕は、急速に書き手として熟成されていった。しかし、一方で母は衰弱していった。

やがては小説を読む気力さえもなくなっていったようで、感想を聞いている、同じ言葉が返ってくるようになった。

母が自殺したのは、中学校一年の夏。

僕が、文学部に入部したときだった。悲しむことを忘れて小説に打ち込んでいた。そうでもしなければ、僕は抜け殻のようになってしまいそうだったから。悲しみを小説の中にしまいこむことで、僕は現実の絶望から逃れることができた。

しかし、ふと我に返ると、雫が滂沱として僕の目からこぼれだすのだった。

僕には、文学しかなかった。

小説を書くことしかなかった。

それでしか自分を表現できなかった。

口から発する言葉には微妙なオブラートがかかっていて、本質を突くことができない。そういった僕の内実を、小説には包み隠さずに表現できる。自由な空間がある。現実にはない、すばらしい空間が。

夢のような空間が…。

「総、まだいたのか」

夕焼けの赤みを帯びた巧。廊下から教室に入ってくる。僕は思い出の劇場から舞い戻る。

「一体どうしたんだよ。さっきのお前、明らかにおかしいぞ」

巧が窓際の自分の席に座る。

「ああでもしなければ、お前は和泉のことを泣かしかねなかった」

「多分：俺も、そう思う」

巧は珍しく沈黙を作った。

「なあ、総…」

「…ん？」

蝉の鳴き声が止んだ。真っ赤に染まった夕日が、教室中を赤く染めている。

「お前、文学部に入りたいんだろ」

僕は、息が詰まりそうになるのをこらえて、やっとの思いで言葉を吐く。

「…ああ。きつと、小説が書きたいんだろうな…」

このときの僕の表情はどんな感じだったのだろう。おそらく、ひどく格好が悪いに違いない。

「何で総が意地張っているのか、俺は知らないし、聞かない。俺、そういうの苦手だから。でもさ、人が何を考えているか、っていうのは分かるつもりだよ。なんていうのかな、観察眼だけは持つてるから」

いつもの巧のおどけた調子が、このときばかりは嬉しく感じた。

いつでも誰とでも分け隔てなくおどけることのできる巧が、このときは救いだった。

「ほら、これ」

巧はシャツの胸ポケットから、折りたたまれたプリントを取り出した。

「文学部の入部届。今すぐ書いて持っていけよ。部長、部室にまだいるからさ」

巧はそそくさと帰宅の準備をする。

「部長？」

巧は恥ずかしそうに表情を隠して席を立つ。そして、帰ったと思いきや、廊下からひょっこり顔面を出すと、笑う。

「ちなみに、俺は書記だから、覚えておけよ」

顔を引っ込めて廊下を闊歩する。足音が澄んだ音色のように聞こえた。

「副部長のポスト、わざわざ空けておくなよ」

ペンケースを開けてボールペンを取り出す。肩をほぐし、机に向かう。

僕は、この入部届けをしっかりと丁寧な字で書こう、と思った。

第十二話・「小説が書きたい」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。
私小説はどれも少し似通っています。似たようなものしか書けない、という点でもまだまだ未熟者です。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。批評、感想、栄養になります。

第十三話・「私の名前」

正直に言えば、辛辣な言葉を吐いた手前、どういう表情をして部屋に入ったものか分からないでいた。部屋を開ける僕に、彼女がどういった態度をするのか、僕の想像では追いつかい。平手打ちでもされるほうが簡潔でいいような気さえした。

部屋の扉の前に立って、扉からもれる明かりにため息をついた。その、次の瞬間だった。

「総…君？」

部屋の扉が大きな音を立てて開かれた。そして、僕の額も大きな音を立てる。

僕は、苦痛に額を手で覆いその場にうずくまった。

「だ、大丈夫…？」

「なんとか、ね」

僕は涙の漏れる目じりを手の甲でこすると、安心させる目的で作り笑顔をした。

「総君、どうしてここに？」

声は訝しげだった。僕は右手で額を押さえながら、じつと彼女の顔を見た。それから、ポケットにある入部届けに左手で触れる。

「なんていうか…君付けで呼ばれるのって、逆に慣れていないからさ。この際、総でいいよ」

そう言うなり彼女の顔が華やいでいった。大量の蕾がいつせいに開花していくような光景が、目前に広がった。

「総」

明るい声で僕の名前を呼ぶ。

廊下にはエコーがかかり、僕の名前が淡く溶けていく。

「何？」

「総…総」

「だから、何？」

「…総。総…総！」

「なんなんだよ」

「篠崎総！」

自分の名前がどんな形であれ、大声で連呼されるのは気恥ずかしい。

僕は、廊下に人影がないかきよろきよると見回した。

「俺の名前に何かあるわけ？」

「ある。今まで、呼べなかった分、溜め込んだ分、一気に呼んでみたの。総も呼んでみて私の名前。和泉恵理子、恵理子って」

脳が追憶に回転する。

授賞式で呼べなかった思い出の人の名前が、のどの奥に詰まっている。

「和泉…そんなことよりさ」

僕はポケットから入部届けを出した。ポケットに目を落としたために、そのときの和泉の顔は分からなかった。

「予備の紙ないかな。力んで書き損じた」

「え、何の紙？」

あわてて何かを取り繕う和泉の明るい声が、廊下に寂しく染み込んでいく。

「…入部届の紙」

だがそれも一瞬の出来事で、僕の入部の意向を知るや、さっきの寂しさがまるで夢だったのか、と思わせるほどの笑顔が返ってきた。悪戯を画策する子供の顔だ。

「聞こえない。もう一回」

「文学部に入りたいから入部届が欲しいんだよ！…三度は言わない」

そっぽを向いた僕に、和泉は満面の笑みを向けた。

第十三話・「私の名前」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださいました方、ありがとうございます。
います。最近映画を見ていません。見ようと思っていたら、いつの間にか上映が終わっていたということもしばしばあります。そんな作者ですが、これからも、よろしく願います。評価、感想、栄養になります。

第十四話・「父親が憎いんだ」

「じゃあ、巧君なんだ。入部届けを総に渡したのって」

文学部の部室に鍵をする和泉が、僕に聞いてきた。

校内はすでに真っ暗で、生暖かい空気が廊下を包んでいる。

「そうだよ」

「そっか、それで二枚もらっていったんだ。『書き損じるといけな
いから、もう一枚頂戴』って、そういうこと」

合点がいったのか、手のひらをぽんと叩いた。

「あいつも入部したんだ？」

「そ、空気を読んでいない誰かのせいで」

「…悪かったよ」

「結構、つらかったよ」

「悪かった」

廊下を一步先んじて歩く和泉の背中に詫びる。

「でも、今はぜんぜん気にしてない。だって、結果的に文学部員」

振り返った和泉の髪の毛が、まるでテレビコマーシャルのように
美しい弧線を描く。

「夢じゃないよね」

僕の瞳を真摯に捕らえる和泉の瞳。

「夢じゃないよね、総」

「うん。夢じゃないよ、夢だったら、困る」

僕は真剣に答えた。この世界が夢であるならば、真実の世界はき
つともう一人の僕が存在する世界に決まっている。もう一人の僕が
言うように、僕が偽者であるということになってしまう。

それだけは嫌だった。

こうして、文学部に入れたこと、小説を書けるということ、そし
て、授賞式で出会ったつつむいた才媛のこと。すべてが真実でない
はずがない。

「夢であつてたまるか」

「…うん」

和泉が、大きく頷き、大きく微笑んだ。

「一緒に帰らない？」

僕たち二人の声が重なって、彼女も僕も同時に微笑んだ。

校庭には、夜間照明が煌々と点灯している。野球部員たちが大きな掛け声を上げて、校庭をランニングしているところを見ると、どうやら、一日の練習を終えて整理運動中のようなだった。白いユニフォームが土にまみれて汚れている。真っ黒に日焼けしているのが、ライトの光に照らされてはつきり見えた。僕と和泉はそれを横目に校門を抜ける。

「今年こそは、甲子園に行ってもらいたいな」

「きつと行くさ」

「バスを何台も引き連れて？」

「うん。外野席でブラスバンドの演奏にあわせて大声出して」

「全員で勝利の校歌斉唱」

僕と和泉の声が再び重なる。

「感動だろうな」

「感動だろうね」

しみじみと甲子園の情景を浮かべる。県予選も三回戦まで勝ち抜いているだけに期待感がそうさせるのだった。

「話は変わるけどさ」

コオロギの声が草むらから聞こえてくるが、僕たちの足音が近づくとも突然歌うのをやめた。まるで恥ずかしがっているかのよう。

「和泉は、怖い夢って見たことある？」

「怖い夢？ 例えば？」

僕たちが草むらを通り過ぎると、こおろぎはまた歌い始めるのだった。

「例えば…」

僕は、僕をキツチュ

まがい物と呼ぶあの男を思い浮かべた。

明滅する電灯が不気味に僕たちを待ち受けている。

「誰かに執拗に追われる夢、とか」

和泉は神妙に唸り、電灯を通り過ぎたところで話し始めた。

「そういう類の夢の話ってよく聞くな。実際、私もその類の夢を見たことがあるし」

「誰にでもある、当たり前のことなのかな」

「…多分。でも、結末はそれぞれ違うと思うよ」

下り坂を足元に気をつけながら歩く。スリップ防止のため、わざと凸凹にしてあるコンクリートは、足裏に確かな感触を残す。

「結末…？」

「そ、結末。いつしか気付かないうちに見なくなっている人、毎日ではないけど見続けている人、そして」

あえてそうしたのは分からないが、和泉は間を置く。凸凹したコンクリートの坂は終わり、平坦なものになっていた。通り過ぎていく自動車のテールランプが気持ちの悪いほどに輝き、その余韻が赤い帯のように眼に焼き付いた。

「その追いかけてくるものにやられてしまう人、逆に打ち勝つ人…」

黒い猫がブロック塀の上をすばやく移動していくのが見えた。目だけが暗闇に浮かんでいるかのように、不気味に輝いていた。

「なんて、あくまで想像の話。そんな深刻な顔しないでよ、総」

和泉が僕の顔を指差して笑う。僕は、彫像になった顔をあわてて両手でこねた。その様子を見て、和泉はさらに笑う。

「まるで、明日にでも世界が終わってしまうような顔」

「そんな顔してたかな…」

下り坂が終わって、線路の上をまたぐ陸橋を渡り、駅前通りに入る。

「和泉、参考までに聞いていいかな。和泉の場合はどうだったのか」
横断歩道で信号待ちをしながら、僕はその答えを待つ。

「私の場合は、打ち勝ったかな」

駅前ではしゃぐ若者の粗野な笑い声が、耳をよぎる。

「それはつまり、夢の中で追ってきたものを振り返りにしたってこと？」

「そう」

横断歩道の信号が青に変わり、信号待ちをしていた人々は歩き出す。僕はテンポ遅れで歩き出した。

「そうしたら、もうそんな夢は見なくなった」

「それだけ？」

横断歩道を通過する靴音が、何重にもなって僕の耳を埋める。

「夢を見なくなった、ただそれだけ？ 何か変わったことはないの？」

僕の傍らを通り過ぎたサラリーマンが僕を横目に見ていた。それだけ僕は場に不相応な声を出していた。

「変わったこと、か……」

和泉は横断歩道で立ち止まる僕を振り返る。

「総、そんなところで立ち止まっていると、車に轢かれるよ」

「あ、ああ」

点滅する青信号にせかされ、僕は足早に横断歩道を渡りきった。

「総も、ここからバスに乗るんでしょ？」

横断歩道を渡りきつてすぐのバス停を指し示す。僕は話の腰を折られてしまって、どうにも切り出しにくい状態に陥っていた。

「も？ …… ってことは和泉もなんだ。気付かなかった」

「気付いてないのは、総だけ。私は知っていたし。総はいつも最前列で窓側。このバス停で降車するまで、ずっと窓の外ばかり眺めているから、知っていて当然の事に気付かないのよ」

「最前列から、後ろをじろじろ見るほうがおかしいだろ」

「それもそうだけど……でも」

和泉は力なくバス停のベンチに腰掛ける。

「気付いていて欲しかった、かな」

「……ごめん。俺の悪い癖なんだ。考え事したりしていると、自分だ

けの世界に入ったまま、周囲の情景なんて無きに等しくなってしまうんだ。猪突猛進…ではないけど、頑迷固陋というか。うまい言葉が見つからないけど、とにかく、こう、視界が狭いんだ」

僕は両手で空気を挟むように、そのときの視界を眼前に描いた。

「別に責めてるわけじゃないから、そんな風に謝られても困るな」

視線を足元に落とし、ベンチから道路際に投げ出した足をぶらぶらさせる。細くしなやかな足が行ったりきたりしている。ローファ―の踵がアスファルトにあたって音を立てた。

うつむいている和泉を見ながら、僕は昔を思い出していた。

一本木の木陰で、ベンチに座った二人。日差しの強い日のこと。

「総？」

和泉と視線を合わせる。

「また、いつもの癖？ 何を考えていたの？」

「僕は…あ、いや、なんでもない」

思わず、僕、と出てしまった。反射的に汗が噴き出す。和泉は、そのことに気付いたのかどうかは分からないが、しばらく僕を眺めていた。

「バス、遅いね」

大げさに背伸びをして道路の先に目を細める。もちろん、バスは姿形もなかった。諦めてため息をつく、ポケットの中で携帯電話が震えていることに気付く。

一気に体温が冷やされていくのが分かった。僕の表情の明らかな変化から、和泉もそれを感じたのか、落ち着いた声で僕に問いかけてきた。

「どうしたの？」

「別に、ただのメールだよ」

「ただのメールなのに、そんなに顔色を変えられるものなの？」

答えに窮している自分がある。そんな自分自身に、僕は無性に腹が立った。

僕は大きく深呼吸をする。

この方法を教えてくれたのは母だ。生の感情を生そのまま吐露するとき、その言葉は刺々しいことが多い。だからその前にまず深呼吸をして、自分自身とその言葉の意味を省みる。その上で感情を吐露する。すると、鋭いとげが少しだけ丸くなっている、と母は言っていた。和泉に自分の苛立ちをぶつけることだけは、二度としてはいけない。そのための深呼吸だった。

「父親からのメールなんだ。仕事で今日は帰って来れないって」

僕は苦笑いを作ったつもりだったが、どうやら失敗していたようだ。和泉が、気まずそうに僕を見上げる。恐る恐る何かに触るようなおびえた瞳が、僕を捕まえた。

「聞いても…いいことなのかな」

僕は和泉とは反対向きにベンチに腰掛けた。眼前を自動車が通り抜けていく。

「隠すようなことではないんだ。ただ、どう話しても明るい話題ではないから」

背中を向けて会話することを選んだのは、きっと無意識の判断に違いなかった。

家族のことを告白するときの自分自身の顔は、おそらく世界一番醜い。

払拭することのできない感情の渦が、物凄い勢いで渦巻き、僕の顔をめちゃくちやにするはずだ。それを分かっていたから、無意識に僕の体が反応して背中を向けたのだろう。

「それでもいいよ。話してくれることなら、何でも聞きたい」

「…父親が憎いんだ」

奥歯をかみしめる自分がいた。

「ただそれだけだよ」

言えなかった。すべてを話すことがただ怖かった。怖くて仕方がなかった。

あの朝の光景が今でも記憶に鮮明に残る。

朝日に映える朝露に、すずめの合唱。純白のカーテンが微風に揺

らいでいた。ガラス戸が開いているのを不思議がった僕は、カーテンをかくぐり外に出る。庭に広がった光景は、僕が今まで見たこともない景色だった。

人が木にぶら下がっていた。

言葉では簡単に言える。が、そのときの僕はそうとしか言い表せなかった。

「そっか」

なぜ父親が憎いのかを聞かれなかったのが、せめてもの救いだっただ。

「そう、ただそれだけだよ」

そうした経緯を持つ僕自身が嫌だった。常に人に負い目を持ち、気軽に両親の会話をするのができなくなってしまふ。他人の優しさが痛かった。

僕は自殺をした母親の子供だ。

僕自身も、いつか自殺をするかもしれない。強迫観念のようなものが、自分を苛んでくる。他人の目が怖い。他人の会話が怖い。僕の真実を告白した瞬間に、百八十度変わってしまうかもしれない他人の心が怖い。

だから、これから出会う人には話さないで生きていこう。僕はそう決めた。

「私はね。私には…父親が三人いるんだ」

声は実に明るいものだった。内容とは裏腹すぎて、僕は思わず彼女を振り返った。

「私の直接的な父親と、育ててくれた父親、そして、今の父親。どれも、私にとっては大切な人。自分でも不思議なんだ。どうしてこんな環境で生きているんだろう…もっと、普通の、父親と母親が一人だけの、いたって平穏な家庭で生きられないんだろう、って。世の中にはそんな家庭がたくさんあるのに、私だけがこんなに特殊なんだろう、って。でも、それっておかしいんだよね。自分自身が、まるで世界で一番不幸な人生をおくっているように見えているだけ。

悲劇のヒロインを演じているだけ。本当は、自分が思っているほど私は不幸じゃない。そう思うことができたなら、急に視界が開けてきて…。だから、自分でも不思議。うつむいて、自分には何もなかった思い続けてきたのに、今はこうして前を向いている。文学部に入って、望んだ人と一緒に文学活動をすることができる。きっと、幸せなんだよね、私」

和泉が、振り返った僕と視線を共有させる。

混ざり合ったそれは、驚くほど静寂な感情を連れてきた。こうして目と目をしっかりと見詰め合うことが自然に思えた。恥ずかしさなど微塵もない。

「でも、怖いんだ。夢を見なくなってから、私自身がどんどん変わっていつてしまつて、まるで別人のようになって、いつか私が私でなくなってしまうような…そんな気がする」

目と目を通して感じあっているから、和泉の恐怖心が切に伝わってきた。

「過去の私にできなかったことが、今では当たり前のようにできる少し、自分が恐ろしい。まったくの別人に魂が乗り移ってしまったかのようで…。よかったことといえば、こうして総と見詰め合うことができるようになったことぐらい」

僕は急に恥ずかしくなつて目を道路の先にそらしてしまった。するとちょうどこちらに向かつてくるバスが見えた。

「それは…夢の中で追いかけてくるものに打ち勝ったから？」

「分らない。でも、それ以来私は…」

「私は？」

バスを真紅の信号がせき止める。夢の中で見た信号が、今まさにバスを止めているのだった。

この場所で、僕はもう一人の自分に殺されそうになった。

あの信号の上から僕を見下ろし、嘲笑した。夢の中で信号が赤から青に変わったとき、僕には死の宣告がなされた。それに抗うように、僕は今、バスをせき止めている血の色をした信号を強く見つめ、

念じた。

黄色に戻れ、と。

しかし信号は無情にも青に変わり、せき止められていたバスはゆつくりと走り出した。

これが当たり前の法則。厳然たる事実。

何人にも侵されざる、現実という領域だ。

「私は 夢を見なくなった」

「夢を？」

和泉は頷く。

「全く？」

今度は少し悲しそうに頷く。

「些細な夢も見なくなった。ずっと目が覚めるまで真っ暗闇」
自分を抱きしめるように手を肩に回す。

「おかしいでしょ。こんなこと、あるはずなのに……。幸せなはずなのに、また私は自分が不幸なんじゃないかって考えるように……。自分が変わっていくのが怖い……」

「和泉……」

僕は、衝動的に和泉の頬に手を伸ばしていた。和泉は、特に嫌がる様子もなく、僕の手を受け入れた。そして、ゆつくりと瞳をまぶたの裏に隠し、強張った体の力を抜いていった。

僕が小さいころ、母はよくこうして僕の恐怖や不安、怒り、悲しみを静めてくれた。母の手は誰よりも優しく柔らかく、そして安心感に満ち満ちていた。洗剤負けた手も、僕は真綿のように感じられた。

それが、母の手だった。

それが、ぬくもり、だった。

「安心する。総の手に触れられていると」

うつとりした声で噛み締めるように和泉は言った。誰かに安心を届けてあげること。その手を持った母の気持ち、今の僕にははっきりと理解できていた。母のぬくもりを感じることもなくなって、

もう数年が経つ。そして、その数年という時間を経て、僕はやっとあの時の母の気持ち理解了きたのだった。

バスの扉が開く音で、僕たちの世界は遮断された。僕は頬に触れた手をあわてて引っ込め、和泉も勢いよく立ち上がった。

バスの整理券を取るときに、和泉は小さな声で空気を振動させた。「もう少し遅く来て…欲しかったな」

僕は整理券をボックスから引き抜きながら、その意見に同意した。

第十四話・「父親が憎いんだ」（後書き）

読んでくださった方、興味を持ってくださった方、ありがとうございます。前話は短かったのに、今回は長くなるという不規則な分け方ですいません。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。評価、感想、栄養になります。

第十五話・「帰りたくない」

バスに揺られること十数分、僕が降車ボタンを押すと、和泉が急にそわそわしだした。

ボタンを押す直前まで弾んでいた会話がかみ合わなくなり、外の風景を気にしだした。そして、バスがその速度を落としていった時、和泉は僕に耳打ちした。

「私も降りるから」

和泉は、朝、僕がバスに乗るのより早くバスに乗って登校してくる。

「でも…ここは」

「いいからいいから」

僕は背中を押されて、バスから吐き出された。バスが大きな発進音とともにその場を去ると、奇妙な静けさに支配された。バスのテールライトがだんだん遠のいていく。僕は何の気なしにただ見送っていた。

「これは、つまり、どういうこと？」

「別に、深い意味はないわよ」

「そ、そうだよね」

口の端が引きつった笑いが、自分でも醜い。

「総の家が見たかっただけ。ただ、それだけ」

「…別に、かまわないけど…もし来るんだったら」

僕は道の先を視線で促し、自分の向かう方向を示唆した。

「それほど遠くないから、すぐに着くよ。あんまり自慢できる家じゃないけどさ」

「自慢されても困るけど」

「…じゃあ、帰る？」

強い口調で僕は牽制した。

「帰りたくない」

正直、この答えには牽制した僕のほうが驚かざるをえなかった。
昔のドラマの台詞を聞いているようだった。

「和泉は、家族とうまくやれているんじゃないの？」

「やれている、けど」

言葉尻に向かつていくにしたがって、トーンも落ちていった。家路の途中、通り道の電灯が明滅を繰り返していた。いつの間にか、和泉が僕の後ろを歩いている。

「自然体ではないの。うまくやろうとして、うまくいっているだけだから」

「それが、普通じゃないの？」

「疲れるんだ…。うまくやろうとするのが」

和泉の曇りゆく表情を隠そうとするかのごとく、電灯の力は潰え、闇が僕たちを覆った。

「だから、帰りたくない？」

「…やっぱり帰ったほうがいいのかな」

今まで聞いたことのない悲痛な声。

「総は、帰れ、って言いたいんでしょ」

和泉は振り返った僕から数メートル離れて、幽霊のように立っていた。

今の僕に振り絞るものがあるとすれば、それは暗闇を振り払う勇氣だった。僕はそれをどう変換すべきか迷った末、慣れないことをしてみるのだった。

「…実は昨日、カレーを作りすぎてちょうど困ってたんだ。近年稀に見る傑作だから、誰かに意見を聞きたかったんだ、うん」

僕は背中越しに言った。恥ずかしくて、格好悪くて顔を見せたくなかった。下手なドラマだった。きつと、こんなドラマの視聴率は右肩下がりだろう。

僕は反応が知りたくて恐る恐る振り返る。臆病な証拠だった。
すると、死んだと思っていた電灯が息を吹き返して、和泉を煌々と照らしていた。

スポットライトの下で、和泉は輝くような笑顔をたたえていた。

第十五話・「帰りたくない」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
連載「スクール・オブ・ザ・デッド」も、よろしければご覧になってみてください。評価、感想、栄養になります。

第十六話・「ドリーム・コンシャス」

「つまり、こういうこと？」

僕はテーブルを挟みながらカレーを頼張る和泉に、回答を求めた。
「僕が今経験している悪夢と、和泉が経験した悪夢が同じ類のものだと仮定すると、打ち勝つことができる、と」

和泉は頬張っていた分を飲み込むと、スプーンを目の前にかざした。

「結果的にはそう。突飛な話かもしれないけど、だからって外れているわけでもないと思う。例えば、このスプーンが夢と現実の境界線だとするでしょ。で、こっちが夢で、こっちが現実。そして、これがもう一つあるとする。

「はい、俺のスプーン」

「ありがと」

スプーンを二つ手にした和泉は、両手に持ったスプーンをかざす。
「夢を中心にして、二つの現実があると仮定するでしょ。片方の現実が総の現実。そしてもう一つの現実が、追跡者の現実。その二つが交わっているのが、夢。だから、二人は夢の中で出会い、争う。もちろん、勝負事には必ず勝敗がある。だから、私が追跡者に勝つことができたように、総も勝てる。もちろん、ひとつ間違えば負けることも」

「動機は？」

スプーンを和泉から受け取りながら聞いた。

「何かの得がない限り、そうする必要がないじゃないか」

和泉は、スプーンをカレーにもぐりこませたまま考え込んでしまった。

時計の針が、九時を指そうとしている。まもなく九時を知らせる音が鳴ろうとしていた。時計の秒針が十二に近づくその音が、僕の思考を強制的に解答へ導く。ひらめきに似たそれは、自分でも驚く

ほど簡単に思いついた。

「…本当の自分を取り戻す」

九時を告げる電子音が続けざまに響きだす。

「え？」

電子音で遮られたのか、和泉に聞き返された。僕は自分でも確認し、復習するように、ゆっくりと解答を整理しながら、作った力レ―を見下ろしていた。

ジャガイモが大きな顔を出していた。

「あの時、追跡者は、僕を殺すことで、本当の自分を取り戻すと言っていた…。そして、追跡者は僕自身だった…。和泉が打ち倒した追跡者は？ まさか…」

「私が倒したのは…そう、そうだよ！ それしか考えられない」

今の和泉の表情に何かの熟語をつけるのならば、驚愕、が相当だろう。それぐらい、目を見開いていた。

「私は、私を取り戻した。それから、夢をまったく見なくなった。夢の中にいる必要がなくなったから。見る必要がなくなったから…。私は、そのときから自分がどんどん変わっていく感覚を覚えるようになった。たとえるなら、進化、のような。自分に足りなかったものを補って、自分でも驚くくらいなんでもできるようになった。私の内外が進化していった…」

自分の両手をじっと見つめて、震える。両手を握っては広げ、感触を確かめているようだった。

「私は、補完した…。自分自身を倒して、私の持ち得ないものを持つことができた。だから、だから…」

和泉が今、感じている感慨を僕は推し量ることができない。今まで納得のいかなかった答えを手にしたことへの歓喜と戸惑いが、津波のように押し寄せているはずで、僕にはまだその意味が良く分かっていないのだ。推し量れるはずがない。

「和泉、君の体験をもっと詳しく教えてくれないか？」

僕は堪らずに聞いた。とにかく、先輩の意見を聞いておきたいと

思った。自分自身が、もう一人の自分に殺されないためにも。僕自身、消え去らないためにも。

「う、うん。分かった」

和泉は深呼吸を繰り返し、呼吸を整えた。胸に手を当てて動悸の調子を確認していた。

「最初はね、私自身に追われるなんて、ただのたちの悪い夢だと思っていた。普通、夢って奇想天外なものでしょ。でも、周囲の情景は奇想天外なのに比べて、私を殺しに現れた私……追跡者に対しては、妙にリアルに感じる事ができた。言動や、仕草が、次の日になっても、その次の日になっても、ずっと覚えていられた。夢なんてすぐに忘れてしまっていることがほとんどなのに」

落ち着いたかに思われた和泉だったが、閉じ込めておいた扉から次々と飛び出してくるのを抑えられずに、再び興奮してきているようだった。平常の和泉に比べて、何倍も語気が荒い。それは、僕も同じだった。

「僕と同じだ。夢の中は情報が錯綜して、つぎはぎだらけの世界なのに、僕と追跡者に関しては、よく覚えている。そこが現実だとか思えないような、夢なのにそこが現実だと思い込んでしまつて……僕は何度も殺されそうになつた」

「私も……逃げるしかないと思って、必死に逃げて……。でも、簡単に追い詰められて、そして、大声で叫んだ。死を覚悟して。でも、次の瞬間、私は汗びっしょりでベッドの上にいた。生きているって実感して安堵の息を吐く。それが何度も続いた頃に、私はあることに気付かされた。きっかけは……奇跡のような出会いだった……」

僕は、唾液を飲んだ。のどがぐくりと鳴る。

「私は、気づいた。夢の中はあくまで夢の中。だから、夢の中での私を変えることができれば、きっと打開することができるはず、つて。現実での、何も出来ない何も無い自分を変えられるって……」

「で、何か打開策はあったの？」

「……あった。だから私はここにいろことができるのだと思う」

和泉は一つ一つ自分の体験と言葉をかみ締め、噛み砕いているように見えた。僕の瞳を真剣に見つめるその威圧感に気圧されて、僕は椅子から転げ落ちるような錯覚に襲われた。

「 自覚夢」

「じかくむ？」

「自覚する夢と書いて、自覚夢。英語で言うと、ドリーム、コンシヤス、意識する夢、かな」

「それって…」

「簡単に言うと、これは夢って認めてしまうこと。夢の中で」

僕にはそれがどういう打開策なのかいまいちぴんときなかつた。

夢の中で、夢であることを認めるとどうなるというのか、概要がまったくつかめなかつた。

「それができたとしてどう変わるの？」

「変わる。それも劇的に！」

椅子を仰向けに倒す勢いで立ち上がった。握りこぶしが力強い。

「いい？ 夢の中は、作られた世界ではなくて作った世界なのよ。

例えば、総が夢を見ると、それは総自身が作り出した記憶、想像の世界なの。だから、夢の中では何もかもが総の心にゆだねられるわけ。単純に言えば、すべてが思い通りになるってこと」

「…そうか！ 夢の中には、もともと現実感なんてない。自分で作った世界なんだから、どうにでもなる。そうか、だから…」

僕は、追跡者がありえない高さまで飛び上がったり、何もないところから武器を取り出したり、ガラスの破片を操作する奇行を思い出していた。

「もちろんそれは総だけの話に限ったことではない。追跡者もそれは知っているはず」

「ああ。追跡者は確かにそれを理解して、すでに自分のものになっている様子だつた」

「だから、総も夢を自覚することができれば、追跡者に対抗しうるはず。そして…」

「自分を補完して、より優れた自分になることができる」

「…多分。そうとしか、考えられない」

僕たちは、興奮の余韻に浸るようにしばらく黙した。

「落ち着いたところで、お手洗い借りていい？」

「返してくれるの？」

和泉は小さく笑う。

「…面白くない冗談」

「言うと思ったよ。トイレは、そこ出て左をまっすぐ」

「サンキュ」

時計の針は、九時半を指していた。テーブルの上のカレーはすでに冷めてしまっている。ジャガイモを多めに入れすぎて、ほかの具材が目立たなくなったカレーでも、和泉は美味しいと言ってくれた。「カレー、冷めちゃったね」

戻ってきた和泉が椅子を引く。

「でも、僕はまだ体が火照っている」

「私も」

そう言って、和泉はスプーンを手に取り、残ったカレーを口に運んだ。僕はそれを見て、なぜか少しだけ幸せな気分で満たされた。誰かに自分の料理を食べてもらえること、美味しいと言ってもらえることが、心の片鱗に触れて凍っていた何かを溶かしていく。

「総は、料理上手だね。こんなに美味しいカレー、久々に食べたな。ジャガイモは多いけど」

「どうも」

「こうしていると、なんか夫婦みたいだね」

「…そうかな」

「そうだよ」

「団欒って言っただろうな。こういうの」

「うん。団欒だね」

僕は、遠き日の団欒に思いをはせる。学校から帰ってくると、食事の用意をした母のエプロン姿に出会う。

おかえり。

キッチンからは、ぐつぐつと煮物の音がして、今日の夕食を想像する。僕は今日の出来事を、夜のニュースのようにまとめて母に報告する。母は楽しそうにそれを聞いてくれ、一つ一つ丁寧に答えを返してくれる。

その毎日の儀式が終わると、夕食を待ちきれずに僕は冷蔵庫を空けようとする。そんな僕を、母は叱咤する。

夕食まで我慢しなさい。食べられなくなるでしょう。

それでも僕は冷蔵庫からアイスを取り出して、見つからないように自室に退散する。

でも、母はそれに気付いていて諦めたように、こう言うのだ。

「…もう食べちゃ駄目よ…か」

「え？」

「いや、昔のことを少し思い出したもんだから」

「…お母さんのこと？」

僕は、外していた視線を和泉に引き戻した。

「ごめん、仏壇見ちゃったから」

「別に。謝ることじゃない」

「総のお母さんは」

「送るよ」

和泉の言葉の流れを遮断した。

「バス停まで。最後のバスまで時間が無いし」

僕は椅子から立ち上がり、和泉を通り過ぎる。

時間にはまだ余裕があるのを、僕は知っていた。

「総…」

シャツが何かに引っかかったような感覚がした。見ると、和泉がシャツを引っ張っていた。

「別に怒ってもいいし、なんとも思っていないから」

僕は和泉の返答を待たずに、玄関へ向かった。

和泉の返答はない。ただ、黙然と付いてきただけだった。

僕は、母の死因をまだ誰にも話したことがない。

あの会話の流れに、僕はどうかして終止符を打ちたかった。なぜ母が死んだのか、という話題に移ってしまうのはどうしても避けなかった。

聞かれて話す勇気がないというのが僕の正直なところであり、話すことができたとしても、和泉が今のまま僕に接してくれるという保証はない。

そうして誰にも話さずに生きてきた。他人からの余計な同情、憐憫を受けなくて済むその状態を維持して生きてこられたのだから、これからも生きていけるはずだ。僕さえしっかりしていれば、墓穴を掘ることなどない。

簡単なことだ。

しかし、か細い声で叫ぶ僕が、心の中にいる。

和泉ならば話しても大丈夫なのではないか。彼女は自分の痛みを僕に吐露することを厭わなかった。そんな彼女ならば、僕の暗い過去でさえも受け止めてくれるのではないか。もしかしたら。もしかしたら…。

過去の重荷を下ろせるのではないか。

「和泉」

「え…？」

バス停に立つ僕たちの前にバスが滑り込んでくる。空席が目立つバスには、会社帰りのサラリーマンや、初老の男性、僕たちのような高校生が座っていた。

和泉は、整理券を取ったところで、沈んだ顔を僕に向けていた。

僕の態度を気にしていたからであろうか。

バスの中では、ドアが閉まります、というアナウンスが流れていた。

「母さんは、自殺したんだ」

ドアが大きな音を立てて閉まり、僕と和泉を遮った。

和泉は閉じられたドアの中で何事かを僕に伝えようとしていたが、

聞き取ることができなかった。

排気ガス交じりの生温い風に、僕はめまいを覚えた。

第十六話・「ドリーム・コンシャス」(後書き)

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございました。この小説が、省略されて呼ばれるときが来たならば、「ドリコン」がいいなと密かに思っております。そんな作者ですが、これからよろしく願います。評価、感想、栄養になります。

第十七話・「…すまない」

「お帰り。誰か来ていたのか？」

帰りが遅いはずの父が帰ってきていた。

「女の子だろう？」

僕はさつさと食器を片付けるために、吹かれた風を受け流しながらスポンジを握っていた。

「お前のカレーは、なかなか美味いからな、きつと満足しただろう」
泡だらけになった食器をすすぐ。食器同士のぶつかる甲高い音が、父の言葉同様に不愉快だった。

「今度、見てみたいな。お前が連れてくるくらいだから、きつと美人だろうな」

すぎぎ終わった食器の水を布巾で払拭し、僕は食器棚に戻る。

この嫌な空気、嫌な音、嫌な人間から逃げ出したかった。

しかし、それよりも、真っ先に怒りで我を忘れそうになる自分が嫌だった。

「母さんも、お前が女の子を連れてきたと知ったら、きつと喜んだだろう。…いや、逆に悔しがるかな」

父の口がよどみなく蠢くさまが、汚らわしく思える。

「あいつは、お前に過保護だったし、おそらくお前の彼女を目の敵にする」

「…うるさいよ」

「あいつは、そういうところは子供だったからな。もともとあいつは…」

「やめてくれ！」

怨嗟を搾り出すとこんな声になるのだろうか。毒々しい黒い吐息が見えた気がした。

「父親気取りはやめてくれ。あんたは、母さんが苦しんでいたとき何をしていたんだ。涙を拭いてあげることすらしなかったくせに…」

何で、父親気取りなんだ！俺が本当に欲しかったのは、あんなにかじやない、母さんさえいてくれれば、それでよかったんだ！」
テーブルを拳で叩いた。怒気がテーブルを伝わって、目の前に座る父に届く。父の飲んでいたコップがテーブルの上でひっくり返り、水が散乱した。

「僕が苦しんでいたとき、母さんはずっと傍にいてくれた。僕が今ここにいられるのも、母さんがいてくれたからだ！」

コップが音もなく転がって、やがてテーブルの端から落ちていった。

「父親は要らない。要らないんだよ」

コップの割れる音が響いた。静寂が二人の間を縫い合わせる。それを待っていたかのように、父は厳かさを装うように口を開いた。

「総が言つのなら、その通りなんだろうな」

父にしてはあまりに弱々しい、自嘲を含んだ声だった。その声が耳に入るや、悔しさが胸にこみ上げてくる。

こんな感情はありえなかった。

こんな男が、母の愛した男であることを信じられなかった。母がこんな男の愛を得るために辛苦していたことが許せなかった。僕がどんなに罵詈雑言を浴びせようと、憤怒の腕を振り上げようと、僕はこの男と血が繋がっている。

切っても切れない永遠の鎖につながれていることが、悔しかった。

この男を愛してしまった母が悔しかった。

絶対的な存在であることを誇示していた父。

怖くて近寄りがたかった父。

話しかけても返答すらもらえなかった父。

威厳ではない。それは、畏怖だった。そんな恐怖の対象だった父が、今は僕に手のひらを返すよう。暴言を吐く僕に対して殴り飛ばす気概さえない。力でねじ伏せようと、言い訳しようともしない。甘んじて受け止めることはあっても。

父が席を立ち、僕の前にひざをついた。

「…すまない」

父が床に額をつけた。

「すまない」

僕にはその光景がにわかには信じられなかった。

「すまない…」

やがて、僕は涙が出そうなほど悲しくなっている自分に気付いた。怒りが涙腺を緩ませることなどあるのだろうか。

割れたコップの破片を自らの額にめり込ませる父。

それが断罪であり、贖罪であるかのように。

父は顔を一切上げずにただ念仏のようにつぶやいていた。

土下座をする父の下で、芥子粒が輝く。

「すまない」

何度も何度も、父は繰り返した。

…雅に会いたい。

僕はことあるごとにそう願った。願わなくても会うことができた頃とは大違いだった。夢の中に現れて何事かを伝えようとしたことから、僕と雅の運命は繋がった。僕が苦しんでいれば、まるで瞬間移動でもするかのように僕の傍に現れ、癒してくれた。

なぜそうするのか、僕にはわからない。

しかし、何よりも暖かく、何よりも柔らかく、何よりも優しく、

僕の心の琴線に触れた。

「会いたい…」

ベッドの上でつぶやいてみた。そうすることで、今すぐ雅が来てくれるような気がした。

一人では、どうにかなりそうだった。

ベッドに染み付いた自分の匂いを肺一杯に吸い込む。それは怠惰を体に持ち込み、僕を睡眠へいざなってくれる。

雅に会いたい、そして、雅に抱きしめて欲しい。

第十七話・「…すまない」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。夜の10時に寝て、朝の2時に起きて小説を書き、7時には出かけるという生活を繰り返しております。慣れれば、そうでもないのですが、最初は大変でした。そんな作者ですが、これからもよろしくお願いします。評価、感想、栄養になります。

第十八話・「補完」

鳥のさえずりが僕の耳朵に届くということは、僕がすっかり深い眠りについてしまったことを意味していた。

靄がかかる頭を振り、時刻を確認する。いつも壁にかけてあるはずの時計が見当たらないので、諦めてカーテンを開けると、輝くような太陽が僕の瞳いっぱい顔を出した。

「…。まずい！」

バッグにある程度の教科書が入っているのを確認して、家を飛び出した。

現在の時刻が知りえない以上、バスの時刻表も当てにならない。行き当たりばったりでバスに乗るしかなかった。

僕は、バスがタイミングよく乗せてくれることを願った。

すると、バスは今まさに停留所に着かんとしているところだった。僕は狂喜乱舞で飛び乗ると、そのまま身をバスにゆだねた。

町には人通りはなかった。バスの車窓から見える景色が淡泊すぎて、僕は再び睡魔に身を寄せそうになる。なおもバスには誰も乗車していない。こんなことは初めてだった。バスが信号に引っかかっても、僕の気がせいっているのを読み取ったのか、十秒と経たずに青信号へと変わった。

それらの不思議な現象は学校についてからも同じだった。

校門をくぐってから自分のクラスに到着するまでの間、それ以上に家からここまでの道のりに、人っ子一人いなかった。

「今日は、いったい何の日だ？ 祝日か？」

答えを知らないために、それは自問自答にもならない。ただの独り言だった。僕は机に向かうと、てきとくに教科書を開いてみた。

「ノート？ いや、これは確かに教科書じゃ…」

白紙の教科書が机の上に広がっている。表紙には確かに数学と書かれていた。

僕の頭に、何かがよぎる。

「今思ったこと、今よぎったもの。それが鍵」

雅が、いつの間にか隣の机に座っていた。

「ついてきて、総。時間がないの」

そう言つと、雅は僕がついてきているのを確認しながら、通常は閉まっているはずの屋上への扉をくぐった。

僕は今まで二回しか屋上には来たことがなかった。

屋上は風のない穏やかな日本晴れだった。遠くからは蝉の大合唱が聞こえてきている。

「だいぶ昔のような気がするよ。雅とこうして話せたことが」

僕の心臓が、自分の発声とともに、まるで坂道を駆け上ったように鳴り出した。

「私も、ずっとこうしていられたら、と思う」

青空を背景に雅の姿が浮き立つ。

「なら、どうして僕を殺そうとさせたんだ。もう一人の僕の手を使つて」

「そうしなければならなかった。そうすることが私の役割だった。

そのために私がいる。篠崎総が、より完全なる篠崎総になるために」

「そんな…」

どうやら和泉の言っていたことは真実で、おそらくは二人で話しあっていたことも、ほぼ正解に近いのだろう。自分自身を補完し、より進化した自分になる。それが、もう一人の自分を倒すことで達成される。

「基本的には、それで間違いはないわ」

僕の心を見透かしたような返答だった。

「全部知っていたのことなのか」

「私の意思に関係なく、私は知らなくてはならない。この表裏一体の世界も」

「表裏一体？」

雅は少しだけ悲しそうな顔をした。なぜなのかは分からない。

「二つの世界。それは一つの夢によってつながれている。そこで人々は出会い、そして自分を取り戻していく。本来あるべき自分の姿へ」

「…」

「総が考えている人間は、人間であって人間ではない。真実の姿をした人間は、もっと高等で万能な生き物。そう、ちょうど和泉さんのように」

「和泉を知っているのか？ 和泉を補完に導いたのは、君なのか？」

雅は首を横に振った。

「彼女は自分自身の力で補完にたどり着いた。自分を補完するということは困難であるし、限られたことなの。結果、補完を成した者はすべてにおいて最大の力を発揮することができる。今までの自分を自分だと思えないくらいに。和泉さんもそれが原因でとても苦悩している。ただ、彼女の場合は、少し違うようだけれど」

「まるで、SFだ。信じられない」

「オリンピックメダリスト。ノーベル賞受賞者。世界的な企業の経営者。他人よりも圧倒的に優れた人々が、努力だけで頂点に立てるというのは、まったくの嘘。天才であるということも、補完の賜物なのよ。何かをきっかけにした能力の開花もそう。補完することで本来の力が引き出された。彼らは皆、自分自身を補完した人々。完全なる人間の姿とは、そういう圧倒的な可能性を持した存在。リミッターがかけられているのよ、総は。この世界に生きる人々も、同様に」

「じゃあ、僕が補完したら、僕は変われるのか？」

雅は鷹揚に頷いた。

「でも、分からない。君は僕を助けてくれた。なのに、僕を殺そうと…」

「…この真実を、あなたから先に告げていればよかった」

僕は押し黙るしかなかった。

「総」

僕は、悔しさで落とした視線を、雅へと移す。

「私を助けて。あなたの可能性を見せて。あなたたち人間には、この世界を救うことができる」と

懇願する雅の目に、僕は言い知れぬ不安を覚える。

「僕には、その可能性が？」

「…ある。…と信じたい」

雅は、そう言って僕に背を向けると、屋上を囲う金網に背をもたれた。ゆっくりと凪いでいく風に、匂いはない。大騒ぎしていた蝉の声も静まった。静寂に満たされた屋上に、澄み切った青空。写真のように完璧で、研ぎ澄まされた一枚の風景画だった。

引き寄せられるように雅の隣に同じ格好で寄りかかる。

金網が、ギシ、とこすれあった。

「自分を補完することができれば、君を救うことができる？」

雅が、僕の手を握ってきた。繊細で暖かい手。白く透き通るようだ。

僕らは、しばらくの間、そのまま手を握り合っていた。存在を確かめ合うように、離れたくないという感情を代弁するように。

言葉もない、動きもない。

その握り合っている手に、僕は大きな安心をもらっていた。自分が消えてなくなってしまうかもしれない。そんな、不可避の恐怖でさえ癒すことのできる暖かさを、雅は持っているのだった。

「これが、総の世界なのね」

僕は雅を横目に見た。

「温かくて、懐かしくて、とても愛しい。総の優しさが伝わってくる」

僕が見ているのを気付いたのか、雅は笑顔で僕を向いた。

「そうか」

僕はやっと気付くことができた。

「これが、夢なんだ。これが、僕の夢。僕が見てきた様々な風景」
地面を良く見れば、現実とは違ってディテールがはつきりして

いなかった。細かい砂だとか、老朽化した感じだとか、はつきり再現されてはいない。細部が曖昧なのは、僕が屋上にほとんど来たことがないせいなのだろう。それに比べて、自分の部屋や、バスの中は、詳細に描かれていた。人通りがまったくなかったのは、僕の想像力が足らなかったからだ。信号が僕の望んだ色に変わったのも、これなら頷けた。

僕は、雅とつないでいない反対の手を前方に伸ばしてみる。目をつぶり、キャンパスに絵の具を乗せ、形にしていく。大きな木。授賞式の日、白いベンチ。あのときの風景を、僕は描いた。

「…おめでとう」

雅は、僕にそう告げた。

「それが、あなたたちが言っていた、自覚夢」

屋上に一本の木が立っていた。その下には白いベンチがある。

「望めば、空を飛ぶことだってできる」

地面を蹴った雅は、僕の手を握ったまま空中に飛び上がる。僕はあわてて足をばたばたさせるが、雅の上昇速度のほうが勝っていた。上空を見上げる雅の首筋には太陽の光。恐る恐る見下ろすと、屋上がどんどん小さくなっていく。航空写真さながらの高度だった。

「驚いた？」

「驚いたも何も…」

僕の住んでいる町が見渡せる。駅前の雑多な状況とか、デパートとか、はるか向こうに見える山々まで、まるで子供のころに怪獣映画で壊された町の設定に似ていた。

「これが、僕の夢だなんて」

「人の記憶容量は果てしない。忘れてしまっていることも、実はしっかりと覚えている。ただ思い出すことができないだけ。夢の中で整理して、必要なものだけに絞り出せるようにしているのよ」

僕は雅の手にぶら下がったまま、雅の芳顔を見上げていた。

「こうして、何度も総の夢の中を歩いていた。楽しいことも、悲しいことも、いろいろ見てきた」

上空だというのに風は出ていない。これも僕の夢の範疇だからだろうか。

「…僕の過去も？」

力なくぶら下がった僕を、雅が引つ張り上げた。僕を腰から抱きしめるように腕を回す。僕の体が雅に引き寄せられ、下半身から密着してしまった。顔が真っ赤に茹で上がってしまった僕は、焦って雅の視線から逃げようとしたが、逃げるのより早く、雅は僕の額に自らの額をぴたりとつけた。急接近してきた雅の瞳が、澄んだ光を持っていた。

「…怖くない。何も怖くなんかない。総を怖がらせるものは、全部あの山の向こうに飛ばしてあげるから」

雅は、僕をしっかりと見つめたあと、目を閉じる。何かを念じているようだった。僕は無音の境地へと導かれていく。空と地上の狭間で、僕たち二人だけの空間で。

僕も、目をつぶった。

雅の温かさが、しっかりと伝わってくる。夢では何も感覚がない。そう言われているのが嘘のよう。僕にはこれが現実のページにしか思えてならなかった。

「怖い怖い、飛んでいけ」

雅の柔らかな声が、僕の体に染み込んでいった。

僕は小さい頃、夜眠ることができなかった。寝付くことはできるのだが、真夜中にトイレに起きてしまうのだ。僕は家の外から聞こえてくる風の音や、家の物音で一向にトイレに立つことができない。それを見かねた母が、僕をしっかりと抱きしめながら、そっと額を合わせてこうつぶやいた。

「怖い怖い、飛んでいけ」

すると僕は、母の温もりを武器に、ドアの外に広がる暗闇に勇敢に立ち向かえるようになる。床のきしみに怯えず、風の脅しにも屈せず、僕はトイレまで前進する。

恐怖は彼方に去った。

痛いものを飛ばす、のではなく、怖いものを飛ばす、それが母の特徴だった。

怖いものなどない。母が飛ばしてくれたから。母が…飛ばしてくれたから。

「総、お母さんが恋しいのね？」

僕は涙を流していた。

「ああ…」

涙声が掠れていて、言葉がおぼつかない。

「僕は、ずっと母さんが好きだった。コンプレックスと言われたって、軽蔑されたってかまわない。僕は…僕は、母さんが好きだった。誰よりも優しく僕を撫でてくれた母さんが…。ずっと生きていて欲しかった。聞きたいこと、教えてほしいことがたくさんあったんだ。もつと沢山、数え切れないくらい、沢山。僕は、僕は…」

木から垂れ下がる母の体が、時計の振り子のようにゆっくりと揺れていた。胸が、ずきり、と痛む。

「僕は…僕は…！」

僕は大声を上げていた。

「よしよし」

その雅の言葉が、僕の涙を連れてくる。泣くことが何につながるのだろうか。ここが現実ではないことは、すでに証明済みなのに。それでも滂沱として咽ぶ心を制御することができない。泣くことは感情を吐き出すことだと、知っている。でも、吐き出したあとに、吐き出したものがあつた場所には、今度は何が残るのだろうか。

空虚だろうか。

それとも、また別のものだろうか。

雅は、何も言わずに、僕の顔に頬を寄せる。

言葉で伝えられないことを知っているからなのか、直接的に僕の体に訴えようとしているように感じられた。その行為の中に、非現実の空間で、確かに優しさを感じ、確かに胸を締め付ける、確かな、何より確かな温もりがあつた。かつて母から注がれ、人生半ばで命

を絶やすまで止むことのなかった、心の結晶だった。

幸い、僕はそれを言葉で表現することができる。

…母は、愛、を注いでくれた。

雅もまた、僕にそうしてくれるというのだろうか。吐き出した涙があつた場所に、注がれていく水。

それが、愛情。

「総、まだ泣き足りない？」

「…もう、十分だよ」

流した涙は、雅の制服に吸い取られていった。吸い取れない分は、高高度から、地上へと落下した。

「…良かった」

雅の手が僕からほどけていく。

「…雅？」

雅はうつすらと笑みを浮かべ、次の瞬間、仰向けに倒れる。

「雅！」

ここは鳥も飛ばぬ高空である。地面に倒れこむような衝撃ではすまない。雅の体は仰向けではなく、垂直落下する。力が抜けた雅の状態に、僕はただならぬ危機感を覚えた。

「くっ…！」

僕と雅は、もつれるように劇的な落下速度を迎えようとしていた。その先に待つのは、地面に激突する致命的な衝撃。カメラのレンズでズームしていくような奇妙な感覚。よりくつきりと、地面が見えるようになる。乱暴な風の音、暴れはためく制服。息もできないくらい速度。目がつぶれる錯覚にとらわれ、僕は死を予感する。

「これは、夢…」

僕は、地面を見ずに集中する。現実を直視することで、人は動転する。今まで容易にできたことでも、極度の緊張が加われば、失敗する。とっさに僕は考えた。

「僕の夢だ！」

雅をしっかりと抱き寄せた。決して離さぬよう、絶対に守り抜く

ように。

脳内でイメージが出来上がった。

第十八話・「補完」（後書き）

興味を持ってくださいました方、読んでくださった方、ありがとうございます。不足している部分を補って、完全なものにする。補完。ぴったりの言葉を見つけたときは、かなり嬉しくて踊りたくなります。そんな作者ですが、これからもよろしくお願いします。評価、感想、栄養になります。

第十九話・「部長を、よろしく」

「…で、どうなったの？」

停車したバスに、僕たちと同じ制服を着た生徒が乗り込んできた。空席はなく、やむなくつり革につかまって雑談を始める。

「地面に激突したと思ったら、俺が念じた場所だけ、深いため池のようなものになっていた。そして、俺たちは助かった」

「俺、たち？」

和泉が僕の顔を鋭く覗き込みながら、眉間にしわを寄せる。

「…俺は、助かった」

停留所にバスが止まっては、そのたびに老若男女を吸い込んでいく。さながら、バスの朝食、といったところか。胃袋がすし詰め状態へと近づいていく。腹八分目で済みそうな勢いではなかった。

「なにか」

僕は席をさらに通路際に詰めて座る。和泉の不穏な空気が漂い、僕の側面を焦がす。

「隠してない？」

「な、何も。これが昨日見た夢の概要だよ」

僕は、いつもの席に座れなかったことが災いして、自分で思っていないくとも、そわそわしてしまう。

座席の中に詰まっているスプリングの反発が弱く、座り心地が悪い。

「概要ねえ…。私は全貌が知りたい」

僕の席には、今、和泉が座っていた。決まった時間、決まったバス、決まった座席。

僕の特等席。

それが、和泉に占有されてしまったことで、僕のルーティーンは大きく狂ってしまっている。毎日決まったことから入る僕の習性は、巧に言わせると、年寄りくさいそうだが、僕にとってはそれが一連

の流れなのだから、どうしようもない。例えるなら、野球で言うピッチャーの投球モーションのようなものだ。

「聞いている？」

「聞いているよ。耳元で怒鳴らなくても」

不満そうな和泉は、それきり口をつぐんでしまった。

バスは、お腹一杯に朝食を食べ終えて、ついに吐き出すときを迎える。

僕は、ぴりぴりする空気を感じながらも、何も言わずバスを降りた。

和泉は僕の後ろを黙ってついてきているようだったが、やはり背中に突き刺さるものを感じないではいられなかった。

バス停を降りてからは、学校までの上り坂が続く。そこを総本山に、大勢の生徒たちが上っていく光景は、繰り返される年中行事のようなものだ。自転車を引く者もいれば、横一列に並んでおしゃべりする生徒もいる。まさに十人十色。

「放課後、部室で話すよ。それで許してくれないかな」

僕はその台詞を面と向かって言う度胸はなかった。恥ずかしさもあるし、どんな表情をしていいのかも分からなかった。

「許す」

笑みを浮かべた和泉のリアットが、後方から振りぬかれた。視界が前のめりになり、後頭部は猛烈な痛みに襲われる。

そのさなか、母の自殺のことを聞いても普段と何も変わることに無い和泉の言動に、僕はほんのりと安心を覚えるのだった。

： いざ放課後になってみると、僕は和泉に雅のことをどんな風に話したらいいか困った。

僕は、昨日見た夢に関して、雅の存在を端折って和泉に話した。自覚夢が可能になったこと、補完に関しての事実。

それらを和泉に話したとき、まず彼女は僕に猜疑の目を向けた。

どうしてそこまで仔細に夢のことを知るに至ったのか。いくらなんでも、そんな途方もないことをすぐに確信、理解できるはずがないと。

そうになると、彼女の意見は正しい。和泉が第三者の介入を疑うのも、自然な流れだった。僕の説明に不備が多すぎたのも一因だろう。パイプ椅子に腰掛けながら、僕は部室の扉が開くのを待っていた。部室に転がっている本の冊数を僕は数えたことがない。

部室の隅の段ボール箱が天井に向かってそびえていて、ゆづに僕の身長を超えている。どの段ボール箱にも本が詰まっているとすれば、相当数の本が存在していることになる。中身のほとんどが、部の冊子、つまり部誌であるというのだから、まさに驚天動地である。伝統は積みなっていくもの、受け継がれていくもの、そんな言葉が否応にも信じさせられる。

「ごめん、待った？」

和泉が息を切らせながら入室してきた。

「待った」

「本当にごめん。追われてたの」

「誰に？」

そのとき、廊下からはつきりと足音が聞こえてきた。

「来た！ 隠れるから、私はいないって何とかごまかして」

そう言うと、和泉は狭い文学部室で唯一の隠れ場所と言っている、段ボール箱の隅に身を潜めた。それでも、頭かくして尻隠さずだ。

「総、その黒いビニール袋こっちに持ってきて。全部よ、全部」

僕は言われた通りに、黒いポリ袋を和泉の隠しきれない部分に置いた。

「サンキュ」

和泉の小声が、ポリ袋の間から漏れてくる。最後に、僕は自然体を装って椅子に座りなおした。

「失礼します」

扉がノックされるのとほぼ同時に男が入ってきた。背の高い、精

悍な面魂は、いかにもスポーツマンだった。

「ノックしてから、返事を待ったほうがいいよ。更衣室だったら、一大事だし」

「すいません、つい」

僕はそのきはきした声に好感を持った。体格といい、声といい、顔貌といい、どれも一級品で、非の打ち所がなかった。

「サッカー部の西口清吾にしぐちせいごです。和泉恵理子いずみえりこさんはいますか？ 話があるんです」

サッカー部の西口清吾といえば、県内では有名人だ。

左足から放たれるシュートは、プロも注目の逸材で、新聞の紙面を飾るのも珍しいことではない。加えて、テクニクはすでに全国区。我が高サッカー部創設以来のスーパースターといっても過言ではない。層が厚いサッカー部にあって、一年生にして即レギュラーで、エースストライカー。

僕は、新聞でそう読んだことがある。

「何か重大なこと？」

西口清吾は、僕の目をしっかり見て口を開く。

「実は、恵理子には前から頼んでいたことがあるんです。サッカー部のマネージャーになってほしいって。それが、話そうとすると一方的に逃げられてしまっただけ」

恵理子という音が、心にざわめきを呼ぶ。

「でも、彼女は文学部の部長だし」

「そうです。そのことなんです。もしかしたら、これはちょうどいい機会なのかもしれません。あなたは副部長の篠崎君ですよ？」

僕の名前をどうして知っているのか不思議に思ったが、とにかく僕が彼の話の中に登場した。

「総、です。俺が、そうです」

軽い冗談を交えたが、彼は取り合いもしなかった。

「彼女を、恵理子をサッカー部にください」

「くださいって…物ではないし」

「サッカー部には彼女のような人が必要なんです」

僕は答えに窮してしまった。

僕が軽々しく答えられるような質問ではなかった。僕の意見を挟む余地など、その質問にはないようにも感じられた。当事者同士の話し合いの末に決断されるべき問題であって、僕の答えを聞いても何の解決にもならない。

僕は、その旨を彼に伝えた。

「そうでしょうか」

西口清吾は、納得いかないといった表情と声音で、僕の意見に反対した。

「俺には、そう思えません。恵理子は、ずっとあなたを勧誘していた。ただ文学部の人数を稼ぐだけだったら、個人に執拗にこだわったりしなくていいはず。おかしいとは思いませんでしたか？」

そのことについては、僕も直接和泉に問うたが、答えは最後まで聞けずに文学部に入ってしまった。僕が過去に受賞暦があつて、文学部にとって有益になるから。

見当をつけるとすれば、そんなところだろうか。

「俺と恵理子とは、幼い頃からの付き合いです。昔のあいつは、もつと控えめな、目立たない存在だった。見違えるように綺麗になった今とは違って、昔は美人だなんていえるような女の子ではなかった。毎日、物静かに教室の片隅で本を読んでいて、誰かから話しかけられるまで、話そうともしなかった。でも、彼女は誰よりも温かい心を持っていた。クラスのみんなが気付かない、些細な親切、思いやり。教室の机を整頓したり、花の水を取り替えたり、誰も知らないし、気付かないこと。俺は、彼女のそんなところが眩しく見えた。目立とうと、活躍しようとする自分が卑しく見えた」

真剣に言葉を刻む西口清吾に、僕は釘付けになつてしまった。

「俺は、そんな彼女を見ていたかった」

拳を震わせ、悔しさを滲み出している。

「でも、恵理子は変わった。何かが、恵理子を変えてしまったんで

す。…今の恵理子は、恵理子であって恵理子ではない気がする。でも、やっぱり恵理子なんです」

その変化が自覚夢であるなら、つじつまが合うような気がした。

「サッカー部には、いや、俺には、彼女のような存在が必要なんです。それを、あなたに聞いてほしかった」

「ぼ…俺に？」

つい、僕、と言ってしまいそうになるのをこらえた。

「はい。あなたに」

「俺は…」

胸にとげが入り込んだようだった。

取り除きたいのに、取り除けない。もやもやした、やりきれない感情。

「俺は、それほど付き合いが長いわけではないし、二人の間に口を挟むような感情もない」

西口清吾は口を引き結んで僕の言葉を受け止めていた。

「部長は、そこにいるよ」

僕は、黒いポリ袋を指差した。

僕にとって、和泉は、部長。自分に暗示をかけようとした。

「部長を、よろしく」

僕は言葉を置き去りにして部室を出た。

第十九話・「部長を、よろしく」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張っていけますので、最後までおつきあい
いただきますよう、よろしく願います。評価、感想、栄養になり
ます。

第二十話・「それでも」

ドアのノブを回すと、一回転もしないうちに回転は止まった。

「出れるわけ、ないか」

屋上へのドアは、相変わらず施錠されていた。ドアを背にして、僕は崩れるように床に座り込む。

「部屋にバッグを置きっぱなしだ」

無性に笑いたくなった。馬鹿な自分を笑ってやりたかった。正しいことをしたことがない。事態が好転したためしがない。僕がやろうとすることはいつも裏目に出てしまう。

これは、病気と言ってもいい。

和泉は文学部を辞めるだろう。サッカー部の、ひいては西口清吾のマネージャーになるだろう。その方が、二人のためには最善の流れだと思った。思ったから、和泉の隠れている場所を教えた。

そうすることが、お互いの幸せにつながると。

西口清吾は、いまだき珍しいほど誠実で、男らしかった。言葉遣いも洗練されていた気がする。

思えば、あのときの僕はどんな言葉を返せばよかったのだろうか。西口清吾は、僕のどんな言葉を待っていたのだろうか。

和泉はどんな言葉を待っていたのだろうか。

「雅、君ならどう思うかな」

僕は空中に話しかけた。

雅を守ろうと必死に念じたとき、僕は自覚夢の力を知った。地面に激突する直前、地面がスポンジのように柔らかくなったかと思うと、そのままそれを突き抜けて水の中に潜り込んだ。僕は水風船のようなものを、頭の中で想像していた。もし現実なら、救済措置などあるはずもなく、問答無用で地面に激突して二人とも命がなかった。

しかし、実は夢の中であっても、それは同様だった。リアルな夢

は、現実でしかない。精神の死は、肉体の死につながる。

つまり、夢の中で自分が死んだと認識してしまえば、それは現実の死に直結するからだ。夢はもともと途中で覚めるように設定されている。夢の続きを見ることができないのも、その措置のひとつ。なるべく危険を回避させるように、プロセス化されている。

「その例外としての、自覚夢、自分自身の補完、か…」

飛び込んだ水の中で、雅の思念が僕に伝わってきた。意識なく僕の中で横たわっていた雅が、僕に語りかけでもするかのように、夢という不完全なシステムのことを教えてくれた。すべての真実を知ったわけではないにしろ、僕にとっての夢は、すでに夢ではない。

…ただの戦場でしかない。

「それでも」

雅自身に危機が迫ってきている。助けを求めている。

「雅…」

西口清吾が和泉を必要としたように。

「やらなければならない」

黙祷を捧げるように、静かにまぶたを下ろした。

僕には、雅が必要だったから。

第二十話・「それでも」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張っていきますので、最後までおつきあい
いただきますよう、よろしく願います。評価、感想、栄養になり
ます。

第二十一話・「僕があるから、世界があるんだ」

今なら戦場に望む兵士の気持ちがかかる気がする。

地下鉄のプラットフォームに僕はいた。地元の駅は良く知っていたから、僕はここに足を運んだ。夢の中と理解していても、僕にはこの風景が現実の気がしてならない。人の群れや、滑り込んでくる電車、電車の発車を告げるベルの軽快な音。都会の駅とは違う、どこか閑散とした構内。だが、風景の細部を見てしまうと、これは夢だ、と意識を引き戻される。時刻表に書かれた文字に時間は記されていない。電車の形もどれも同じ。細かな傷や、錆などは再現されていない。

何より、僕が望んでしまえば、電車はそこにいつまでも停車していた。

戦場とは、どんな景色をさすのだろう。映画でよく見る戦場は、ひどく荒廃したものばかりだった。瓦礫の山と化した市街地、地面が裏返された平原、血の色に染まった雪原、どれも恐怖を想起させるには十分なもので、否応無しに、これが戦場だと思い知らされる。しかし、この景色はどうだろう。

僕の暮らしてきた町。誰もが幸せに見える町。この戦場とは無縁に見える町を、僕は舞台として選んだ。戦いとは、いったん開戦してしまえば、候補地はどこでもいいものかもしれない。平和であるうが、そうでなかるうが。

電車が、また滑り込んできた。

ブレーキ音の反響とともに、降車口と銘打たれたアスファルトに、電車の扉が停止する。

僕は、その閉じられた扉の向こうにもう一人の僕を発見する。

扉一枚隔てて、僕らは対峙する。高校の制服を着た僕と、黒いフード付のコートを着ているもう一人の僕。

扉はもったいぶったようにゆっくりと開いていった。

「死ぬ覚悟ができたみたいだな。いい加減に俺の糧になればよかったんだ」

フードをまくりながら、笑って見せる。

「雅から聞いたか？ この世界の仕組みを」

僕は、黙って向かい合う自分の顔を見つめ続けた。

「自分も自覚夢ができれば、勝ち目はある。真の自分を手に入れることができるかもしれない。そう思ったから、俺から逃げずにここにいる。違うか？」

鋭い目つきの僕には、僕自身も驚いた。こんな表情を僕ができるとは思っても見なかったからだ。

「笑えるな」

歩み寄って来たもう一人の僕は、僕の肩に手を置いて告げる。

「お前は、所詮キツチュだ。篠崎総の劣性部分なんだよ」

僕は肩に乗せられた手を振り払った。

「それは、決められたことなのか」

「…いや」

僕は迫り来る異様な空気を肌で感じ取った。

「これから決めることさ」

僕は危険を察知して飛びのいた。すると僕のいた場所に剣が振り下ろされていた。

いつ、どこから取り出されたのか分からないほどのスピードだった。

「これぐらいは、難易度的にみても、イージーだ」

僕は時代劇を想像する。侍のイメージ。刀。

「やはり、自覚夢を理解したようだな」

僕は左手に現れた刀を握り締める。黒い鞘を握り締めて、刀を解放する時を待つ。いつでも、抜刀できるように。

「難易度が少しぐらい上がったようだが、関係ない。キツチュには変わりがないからな」

「…総。倒してみせる」

柄を握る手に更なる力が入る。これが、僕の戦い。篠崎総を越えるための戦い。

僕は、剣についた汚れを振り払う総めがけて、突進した。ある程度の距離があつたが、関係ない。

自分の夢の中では、僕の望みどおりのスピードを得られる。

戦いにおいては素人であっても、夢の中では速度を得られる。踏み出した一歩が、地面を蹴ると同時に、眼前に広がる風景が収縮されていく。

総は僕の突進を視認して、剣をとつさに構えた。二歩目には、すでに刀の軌跡の範囲内に総を捕らえていた。僕は最速のイメージで、刀を鞘から解き放った。銀の閃きが、総の首に喰らいつく。受け止められた刀と、受け止めた剣。互いの獲物が鋭い閃光を放った。一撃の凄まじさを物語る音が、互いの耳をつんざく。僕の初撃を受け止めた余裕からか、総はうつすらと笑みを浮かべる。

僕はその笑みを見て、刀を剣から滑らせ、素早く腰を回転させた。剣の刃先を滑っていく刀が悲鳴を上げると、左手に握り締めていた鞘が刀のたどった軌跡をトレースしていくのは、ほぼ同時進行だった。

刀の一撃を受けるのは予測範囲内。

だからあえて単純な行動に出た。納刀状態での攻撃方法は限られ、相手の予測を容易にする。しかし、追従する二撃目には相手にも隙が生じる。狙いすました一撃が、総の眉間を襲う。総の余裕の表情が一瞬で凍り付いていくのが横目に確認できた。僕は直撃を確信する。

案の定、眉間に強烈な打撃を受けて総の首は反り返り、刀の範囲外に吹き飛んでいった。僕は回転力が加わった体をさらに一回転させて、倒れた総に向き直った。うつぶせに倒れた総の頭にはフードがかぶってしまったていて、状態の確認はできない。隙を突いた完璧な攻撃だったはずだ。

あのスピード、あの角度、起き上がれるはずがない。

しかし、僕の願いは、脆くも崩れていく。ゆっくりと立ち上がり、かぶさっていたフードを払った総は頭部をさらす。

「難易度が低めであっても、油断すると……か」

驚くことに、顔を覆うフルフェイスの兜が出現していた。総は兜を脱ぎ、せせら笑う。

「付け焼き刃にしては、見事だったけどな。……くそ、頭がくらくらする」

兜を僕に放り投げる。僕は反射的にそれを持っていた鞘で打ち払った。

それが、ミスだった。

兜に意識を取られて視線が移動してしまったことに気付いたときにはもう遅かった。僕の左手がおろそかになっていたところを、総に踏み込まれた。低い体勢で剣を構えた総が、横薙ぎに移行する。

僕は、抜刀したままの刀を苦し紛れに防御に回すか、それとも体をひねって回避するかを選択を瞬間的に迫られ、迷わず後者を選択した。ワイシャツが切り裂かれ、肌があらわになる。

どうにかかわせた。

だが、かろうじて飛び退った僕に向けて、総は手を休めようとしていない。横薙ぎの剣を上段に構え、すばやく振り下ろす。刀で払い、難を逃れようとするが、続けざまの攻撃に防戦に追われる。剣の力とスピードに、僕の刀は悲鳴を上げる。重量的にも非力であるせい、刀は何度か打ち合っただけで真つ二つに折れてしまう。それでも、僕は新しい武器をイメージすることができない。間髪いれず繰り出される総の剣戟に対処することで頭がいっぱいになり、とてもイメージする余裕などなかった。

総の笑みが止まらない。

折れた刀で何とか致命的な傷を避けてはいるが、僕は確実に押され始めていた。斬られる。そう判断してその方向に刀を出した僕を、総はあざ笑う。刀に剣はぶつからず、総は体をひねった。刀での防御に固執しすぎていた結果、対処が遅れ、僕は回し蹴りをまともに

受けてしまった。ブーツの踵が僕の左肩にめり込む、みし、という音が体に伝播する。驚くほどの力が左肩から全体に加わり、僕の足は地面を離れた。

総は、僕を蹴り飛ばした状態のまま足を静止させている。

その表情には、やはり余裕の笑みがあつた。

プラットホームに弧を描き、僕はなすすべなくキオスクに突っ込んだ。ガムや、お菓子、本が散乱し、棚からは小説がこぼれ落ちた。何とか立ち上がろうともがくが、体の痛みが邪魔をする。何とか商品の山から顔を出すと、総が目の前にいる。ただの廃棄の山と化したキオスクから、僕を強引に引きずり出し、そのまま服をつかんで蹴り上げた。僕は両腕で胴体をカバーして、何とか直撃を避けたが、ダメージは相当のものだった。

ホームの柱にぶつかって、崩れ落ちる。

人間の胴体を蹴り飛ばすとは、常人の沙汰ではない。現実なら確実に交通事故の類だ。

「意外と、あつけないもんだな」

地面にうつぶせに伏した僕の耳に、持っていた剣を地面に転がす金属音と、総の足音がアスファルトを通して響いてくる。どうやら、剣を捨てたようだ。コートのすそが僕の視界に揺れている。

「自分でも思わないか？ キッチュ」

僕の鼻先には重厚な革靴のつま先。思い切り振り上げた足で、僕の顔を蹴り飛ばす。ぞっとするような想像が僕の体突き抜けた。両手を地面につけ、体を跳ね上げて緊急回避をはかる。予想通りの事態が、回避した僕の代わりに、ホームの柱を襲っていた。コンクリートが紙粘土にすり変わったとしか思えない。破壊力のたえとしてはそれが適当だろう。

細かい破片が、血のように派手に飛び散る。もし僕がよけられずにいたら、今頃は僕の脳味噌がホームに飛散していたことだろう。再び背筋に悪寒が走る。僕はとっさにホームの柱を蹴って、総の背後を取る。が、前述の恐怖により、僕はそのまま攻めに転じること

ができなかった。

着地と同時に、ステップして後ろに下がる。

「キツチュにしては、いい判断だな」

不気味に笑う総が、僕を振り返る。

「あのまま踏み込んでいたら、串刺しだ」

左手には、捨てたはずの剣が握られている。

「何も驚くことではないだろ？ 想像力の範囲内さ」

僕は自分の顔を手で確かめる。驚いた顔をしていたという自分の顔を。

「まさか避けるとは思っていなかったからな。回避した後の保険を忘れてたよ」

剣を持っていないほうの手で、僕の背後を指差す。額から汗が流れ落ちた。

「ふふ、ははははは」

総の哄笑が聞こえる。背後を振り向いた僕の目に飛び込んだのは、空中に浮遊している剣。

「俺は確かに剣を捨てた」

浮いている剣をよく見れば、ところどころ刃こぼれしている。

「だが、剣は一本とは限らない。剣を持っていない、という先入観は、夢では命取りだ」

浮遊した剣が僕の首めがけて、加速した。僕は身を捌いてかわした。攻撃はかわせても、心の中に芽生える恐怖心だけはかわせなかった。

剣はそのままのスピードで総に直進していった。総は一片の迷いも、恐れもなく、目をつぶったまま右手で向かってくる剣の柄を握り締めた。くると、舞踏のごとく剣を乱舞させ、僕に鋭い眼光をくれる。

僕は恐怖心が体内に巣くっていくのを理解した。恐怖は黒く粘着力のある液体。希望や、気力、動作、ポジティブな意思を覆っている。潤滑油の失った関節が、悲鳴を上げていた。震える足、発汗を

忘れた肌。暗雲は、僕自身の手によって頭上に冷たい雨を呼ぼうとしている。

自信を表出させる総の足取りが、圧力となって僕の向かい風となる。僕は、負けるものか、と足を踏ん張ろうとするが、次第に後ずさりしていく。

思いだけではどうしようもない。

体が、深層意識が、感覚がそう警告している。

「最後まで抵抗して見せる。キツチュではあるが、お前は俺なんだから」

僕は敵と戦う前に、まず自分自身の心と戦わなければならなかった。震える足を叩いて、僕は悪魔のごとき自分を凝視する。二本の剣を両手に携え、不敵な笑みを浮かべる。自覚夢の経験では、圧倒的に不利。僕はまだよちよち歩きを始めたばかりだが、敵はすでに自由自在だ。

圧倒的な戦力差が、更なる負の感情を連れてくる。

僕は、何もイメージできないまま、総に殴りかかっていた。

「ああああっ！」

僕は総を倒したかったのではなかった。

恐怖心をただ振り払いたかった。

恐怖心に縛られた脳が、脚の動きを鈍らせる。それが悔しかった。甘かった自分の考え。守る、という言葉の重さを感じないではいられなかった。雅を必要としている。その言葉を盾にするだけでは、何も守れない。

雅も、そして、自分自身さえも。

次の瞬間、僕の視界は、電車、総、と何回転もしてから、電車の窓ガラスを突き破って床に転がり込んだ。ガラス片が、粉々に散らばっている。総は僕の無謀な行為に落胆を隠せないのか、剣の刃では切らずに、剣の腹の部分で殴り飛ばした。

失望したとでも言いたそうな表情だった。

舌打ちをし、左手を振りぬいた。なすすべなく吹き飛んだ僕の体

は、電車の窓をぶち破った。

僕は、起き上がろうとガラスの破片に手をつけてしまう。手のひらの状態を見ると、ガラス片が突き刺さった箇所から血液が滲み出し、じわじわと苦痛の情報が脳へと送られていった。手のひらを縦にすると血液が筋となって伝う。僕は、痛みを伴いながら、見つめ続ける。

不思議な心境だった。自分の血を見ていると、妙に落ち着いた気分になった。

こちらに歩いてくる総がぼやけて見える。口の中を切ったのか、血液の味が口内をさまよっている。

「味……」

僕は、ひざをついて立ち上がる。ふらつきながらも、電車の手すりを使って、立ったままを維持した。

「……血の味」

理解できそうだった。とても重要な何かを。

「……いや、これは本当に血の味か？」

ここは現実ではない。夢の中だ。常識が常識ではなくなる場所だ。僕はまだ完璧には順応できていない。

頭では理解していても、感覚では理解できていない。これは、夢。自由になる世界。自分の精神にすべてがゆだねられる世界。精神力、想像力が雌雄を決する世界。

僕は手すりから体を離れた。

現実での情報は、全部自分を通して噛み砕かなくてはならない。

しかし、夢の世界では、自分から発せられた記憶の情報を、世界から受け取り、もう一度自分が噛み砕く。味を自分に伝えるのは、自分の舌、自分の脳、つまり自分自身。砂糖が甘い、唐辛子が辛い、それは、常識が作り出した産物だ。ここでは、唐辛子は、甘くもあるし、辛くもある。調節することができる。僕は自覚夢の存在を認めながらも、夢に現実の常識を持ち込んでいた。

一般常識、当然と思う心、またそれに準拠する心を捨てなければ、

死ぬことになる。

生まれたばかりの赤ん坊のような、純真無垢かつ、柔軟な心で挑まなければ、僕は夢の世界に飲み込まれる。

「世界があるから、僕があるんじゃない」

砕け散った窓から見える総を視界の中心に捕らえる。

「僕があるから、世界があるんだ」

痛みなんてない。疲れなんてない。血なんて流れていない。自分の足枷となるものを解き放て。握り締めた手のひらを開くと、流れていた血も、ガラスで切った傷創も存在しない。切り裂かれたシャツも元通りだ。

「まだやる気なのか？」

足元のガラスが震えだす。

「ノンレム睡眠と、レム睡眠の周期の関係もあるからな。そろそろ最後だ」

総は二本の剣を浮遊させて、もう二本同様の剣を両手に出現させた。

第二十一話・「僕があるから、世界があるんだ」(後書き)

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張っていけますので、よろしくお願いします。
評価、感想、栄養になります。

第二十二話・「お前の死が、世の中のためになる」

「夢の終わりだ、キツチユ。死に逝け」

地面を蹴った。

踏ん張った箇所のアスファルトは負荷を支えきれずに割れ、くぼんだ。

僕は高速で迫る脅威に、意識を集中させた。視界が冷静さを取り戻した時、周囲の動きがスローモーションのように落ち着いた。足元に散らばったガラスの破片を、僕を中心として回転させる。

電車の手すりをもぎ取り、浮遊する破片を打ちつけた。

破片が、光る弾丸となる。

だが、総のスピードは落ちない。弾丸の方向を読んでいるのか、総を追尾する剣に、弾丸をはじかせる。

光の乱舞。

響く音。

速度の落ちない総と、総の剣が、僕の持つ棒を真つ二つに切つて見せた。ガラスが回転力を失って散らばっていく。次に襲いかかるは後方に控えた二本の剣だ。振り切った総の隙を補うように僕を串刺しにする。身を右に、あるいは左に傾け、僕は確実に回避する。すると生きた剣は、僕の逃げ道をさえぎろうと、背後を取る。

そこへ、攻撃態勢に復帰した総が、両手の剣を同時に横薙ぎにする。

左斜め後方、右斜め後方、そして、前方。

左右は電車の窓。

上は天井。

下は床。

八方塞の状態に、僕は一瞬の判断を要求された。四本のきらめきが僕を狙う。僕は上体を思い切りそらした。総の横薙ぎの剣が胸を掠め、背後から迫った二本の剣の柄をつかむ。握り、動きを止めた

剣を二本とも床に突き刺し、下半身を力で空中に上げる。空振りに終わった総が目を大きく見開く。防御に回すはずの手と剣はきれいに振り切ったまま、電車のつり革を切り落としている。僕は、腰を右にひねり、から空きになった総の顔面に右足を叩き込んだ。

足には、鉄のイメージ。

総の体が、電車の窓をくぐり、柱に激突する音が、ホームに響き渡る。目では確認できなかったが、ダメージはあったはずだ。回転させた腰の勢いをそのままに僕は立ちあがり、窓の外を見る。柱が崩れ落ち、天と地のつながりを失っている。瓦礫と化してしまった柱の下部が、不自然に積もっている。その隙間からは、総の持っていた剣の切っ先が見えた。

僕が瓦礫に近づくにつれ、えもいわれぬ電気が、足元から脳へと駆け抜けた。

総が柱に激突したという証拠がない。瓦礫から出た剣はカモフラージュかもしれない。

電車の窓から飛び出した総が、とっさに剣を投げ、柱にぶつけた後、瓦礫をイメージした。

当の総は、電車の外、窓の下に隠れて…。

あわてて振り返ると、総が僕に蹴られて飛び出した窓の下には、剣が一本落ちており、僕は謀られたことを悟る。

「フエイクか！」

瓦礫が吹き飛んだが、そこには何もない。持ち主を失った刃こぼれの剣が虚しく転がるのみ。

殺気が僕の死を想起させる。首と胴体が離れ離れになった僕の姿を。

「だから言っただろ」

空中から落下してきた総が耳元で囁く。総の腕が僕の首を強烈に締め上げる。

「俺が剣を持っている、という先入観は、この世界では命取りだつてな」

血流がせき止められて行き場を失う。顔がパンクするようだった。ばやけて意識が揺らぐ。完全に首に入ってしまった、なすすべがなくなる。こうなると、イメージも阻害される。

「僕が…」

最後の力を振り絞って、言葉を形成しようとするが、総の圧倒的な力によってそれすらもかなわない。

「お前と話す言葉はない。死ねよ、キツチュ」

僕の首が壊れた人形のように折れていた。気持ちの悪い生々しい音が、構内を席卷する。響くはずのない小さい音であるはずなのに、それは高らかに響いた。総の歡喜の咆哮を示すかのように。

「ふふ…ついに補完した。補完したぞ。これで…」

喜びに震える総が、僕を放り投げた。ごろごろと転り、ベンチにぶつかるまで転がり続けた。ホームを転がったせい、シャツはほこりまみれになっていた。

「…！」

総の勝利の雄叫びが凍る。

「キツチュ…！」

わななく拳から血が滴る。僕は、満を持して電車の座席から腰を浮かせた。

こうなることは総を蹴り飛ばしたときに予測していたことだった。総の能力を過大評価はしていても、決して過小評価はしていない。不意打ちで攻撃を加えたとしても、総の機転ならば、ダメージを最小限に食い止める。そして、迅速に反撃手段に転じる。

布石をいくつも並べ、罠を張り、僕を巧妙に誘い込む。

わざと不自然に積もらせた瓦礫、剣。

加えて、電車の窓際に置いた剣。

剣を僕の意識にたくみに刷り込ませることで、僕の行動を把握することを可能にした。

「僕が何とか罠にかからずに済んだのは、保険、という言葉。自身に保険をかけられるんじゃないかって、そう思ってたんだ」

背中を向けたまま耐えるように聞いている。

「僕に蹴り飛ばされて、窓から飛び出したとき、剣を柱に投げ、瓦礫と衝撃音をイメージした。そうすることによって、音に紛れて隠れることが出来る。剣をあえて窓際に残し、フェイクを装った。誰しも、裏の裏は読みきれないから」

電車を降り、黙然とする総の背中へ向かっていく。

「もう一人の自分をイメージすることは賭けだった…」

大きく息を吸う総。

一度息を止め、吐き出す。

不気味な空気が、周辺を巡る。針が空気中に内容されているようだ。

大気が総の感情におびえて震えている…そう考えてもおかしくない圧力が迸る。深呼吸をして、自らの激情を抑制することをしなければ、この圧力が炎と化して世界を焼き尽くしていたかもしれない。「時間がない。この世界…何より、俺自身の時間が」

嵐の前の静けさよろしく、奔騰していた気圧が消え去る。僕は喉が渴いていく感覚を思い出す。総から発せられる鬼気。

しかし、怯え、竦むことは許されない。雅の願いを、僕の心を満たすために。

足をしっかりと固定し、目の敵に構える。心を柔軟に。心を枷から解き放つ。

放たれたのは力。

風を切る総の右腕が、僕の頬を切り裂く。恐怖は今の一撃で吹き飛ばされた。イメージする中に恐怖を持ち込むことはない。自覚夢を自分の手足にすることが出来る。頬を切り裂かれたのは、かろうじて逃げられた結果ではない。反撃に出るために一步を踏み込んだ結果である。総の脇が空き、そこへ渾身の力を込めた左手を滑り込ませる。総のイメージが防御に働くのが理解できた。打ち込んだ左手は硬質に遮断され肉体には届かない。腕を戻す暇もなく、頭が驚づかみにされ、ひざが顔面に見舞われる。完全に顔を覆うイメージ

を確立できないと判断し、つきたてられたひざを額で受けた。

鉢金が体とともに宙に舞う。

鉢金をへこませる総のイメージがどれほどのものだったか。考えとぞつとする。僕は反った体を丸め、宙返りで着地しようとする。だが、そう易々とはいかなかった。イメージは槍だった。着地したとたんに、胸を貫かれる。振りかぶり投擲する総。

「立ち上がれ！」

僕が叫ぶと、僕の前に壁がせり立った。槍が壁に刺さり、僕の心臓の直前で停止した。

僕は冷や汗をイメージに転化させる。

着地と同時に銃を出現させる。壁を背にして、一呼吸置き、壁越しに銃を向ける。壁の消滅をイメージすると、壁は瞬く間に砂となり、四散する。砂嵐の只中、総も僕に銃口を向けていた。赤いレーザー照準が、血の滴る額を指している。

赤い血に赤い直線。まるで僕の血が銃口を見定めているようだった。

鏡を見ているような錯覚に陥り、僕の心がざわめき立つ。

初弾はともに外れた。

空薬莢が銃から飛び出す。クロスした弾丸が、並行に動き出した二人の首元をすり抜けていく。総の弾は電車の外殻に穴を開け、僕の弾は電車のないほうの石壁に向かい、行き先掲示板に穴を開けた。移動しながらの銃撃が、空を切り裂く。空気が悲鳴を上げた。電車には切り取り線のように次々と穴が穿たれていく。互いの照準を上回る平行移動。

二人の撃ち合いをホームの柱がさえぎる。弾丸を受けて、柱のコンクリートが飛び散る。ばらばらと微細な粒が無数に吐き出された。僕は最速のイメージで黄色い線の内側に入り、柱を背にする。柱に隠れた僕に気付かず、柱を通り過ぎた総を狙おうとしていた。一瞬だが、この地下鉄のホームに静寂が訪れる。が、総が柱を通り過ぎる気配はない。どうやら、総も同様に柱を背にしているのだろう。

左手には崩れた柱、割れた電車の窓。

右手には一階改札口への上り階段。

総はどちらから攻めてくる。

僕はどちらから攻める。

右か、あるいは左か。

柱を背に二者択一を迫られる。

右。

僕は飛び出し、無限のマガジンを持つ銃を構える。

そこに総の姿はない。

背後に銃を向けても、総の姿は確認できない。

僕は悪寒が身を無意識のうちに動かすことを知る。総が僕を照準に捉えていると思えてならなかった。

それが、僕を助けた。

もし、少しでも自分に過信していれば、きっと蜂の巣にされていただろう。

過信した僕は、ホームの天井に足をつけて立っている総に撃ち抜かれていた。

過信せずに横に飛んだ僕は、難を逃れていた。

僕は自分の気付かぬところで、逃げるか、留まるか、の二者択一を迫られていたのだ。

右から攻めようが、左から攻めようが関係ない、制限時間有りの極限の状況下で。

前転して起き上がった僕は迷わず上り階段へと走った。背中を向けることは危険ではあるけれども、一時でも早く後手に回る自分から脱出するためには、場の変化も重要だと考えたからである。肩越しに総を見ると、天井に足をつけた乾坤逆転の状態から、銃を破棄するところだった。銃は自覚夢の中でも重力に従順で、銃痕の残る柱の脇に転がった。と同時に、総も忘れていた重力を思い出すかのように回転し地面に降りる。綺麗に着地し、両手を広げて何かをイメージしている。

「くそっ！」

階段を最高速で駆け上る僕に向けて、総は両肩に体现させたミサイルランチャーを迷わず発射する。射出音とともに、何発ものミサイルが、尾に炎を灯しながら高速接近してきた。迎撃する手段は思いつかない。持っている銃で撃ち落そうものなら、撃ち漏らして爆死するのが僕の末路だ。壁を作っても、まとめて吹き飛ばされてしまうだろう。

人間の瞬間の想像力は冷静さに比例し、焦燥に反比例する。

僕はただ一目散に階段を上りきることに尽力するしか道はなかった。背中を焼かれる気配に発狂しそうになるのをこらえ、最後の一段に足をかける。

直後、すぐ傍で階段に着弾するミサイル。

僕は風景と音を失った。

爆風に飲み込まれ、爆炎に背を焼かれ、爆音に耳をつんざかれた。自分がどうなっているのか、僕自身にも理解できない。やっと耳に音が入るまでに回復した頃には、肺に侵入してきた煙に咳を連発していた。乗り換えの切符売り場には、階段の破片が一面に広がり、着弾箇所からは黒煙がもうもうと立ち上っている。切符販売機の半分が原形をとどめていない。背面の首の下から腰にかけて、シャツが焼け焦げて黒ずんでいた。ひりひりと痛んでいるのは火傷だろうか。僕は全身に押し寄せる打ち身や、火傷、打撲などの苦痛の波をまとめてイメージで押さえ込んだ。

自動改札に背を預けて、崩壊した切符売り場を見やる。

「あきらめることも必要だと思うがな」

煙の中から総が悠然と歩いてくる。

「お前がいなくても、世界はあり続ける。お前の存在だけが、丁寧に、矛盾なく、人々の記憶から抹消されるだけだ。何の心配も要らない」

自動改札機を頼りに立ち上がる。

「俺が補完しなければ、世界は終わることになる。俺たち人間のつ

けは、俺たち人間が払わなければならない。そのための補完だ」

「…完全なる人間の手で、世界を救済させる…そう言いたいのか」

「それは、世界の事情であり、俺の建前だ。俺の本音は別のところにある」

ガンベルトが総に巻きついていく。足、腰、脇とまるで蛇のように。

「守らなければならないものがある。それが俺の本音だ」

この上、両手に何かを出現させようとしているのか、僕にその何かを向ける。足を踏ん張って地面に固定し、現れる何かに備える。

「父と母、かけがえのない家族を俺は守らなければならない。キツチュ、お前を倒すことで、俺が家族を幸福にするだけの力を得られる。補完には、それすらも可能にする力と価値がある。家族を、母を襲う闇を、俺が払拭する」

複数の銃口を筒状に備えた鈍色の兵器、ガトリング・ガン。

総は肩から提げる格好で、その異様な巨軀を誇示する。

「家族…母…？」

僕のイメージが著しく乱れていく。

「何を驚くことがある。当然だろう？ 世界が二つあれば、二人の同じ人間がいる。そして、家族も二つある。守るべきもの、大切なもの…それらも互いに持っている。そして、相手のそれを奪ってでも、手に入れたい力がある」

筒状の銃口が高速に空回る。

僕は我に返り、自動改札を飛び越えた。

通行禁止のガードが降りていたが、夢の中では無関係だ。ガードを飛び越える僕を、総は乱れ撃った。構内のガラスというガラスが割れ、粉々になっていく。すさまじい銃弾の雨に、僕は不規則な動きで回避するのが精一杯だった。銃弾の速度において、直前にそれを回避するのは不可能だ。いくら自覚夢であつたとしても、自分の空間認識能力を超過したスピードには対応できない。

できることといえば、あらかじめ銃弾に対して予防することぐら

いだ。

僕はでたらめな方向に高速移動しつつ、逃げ場がなくなると、物陰を作り出し、紙一重で鉛の豪雨から身を守っていた。

僕の軌跡は無残なものだ。

清掃が行き届いた鏡のような床が、あつという間に蹂躪されていく。無料パンフレットがちりぢりに舞い、文字も読めない。土産物は中身が露呈し、あちこちに転がった。総は見ただ目にも重量感のあるガトリング・ガンを楽々と持ち歩き、乱射しながら追跡し続けていたが、突然、ずしりと足元に置いた。一方、僕は駅内の一角にあるコンビニエンスストアのカウンターに逃げ込んで様子をうかがっていた。

もはや逃げ場は存在しなかった。

総の立っている場所を通過せずには、移動できない。まさに袋小路。総は、僕を巧みに袋小路に追い込むために、ガトリング・ガンをおる程度撃ち分けた。僕が壁に穴を開けるようにイメージすれば、それを逆のイメージで塞いで、逃げ場を限定させた。

つまり僕は、追い詰められるべくして追い詰められたのだ。

転がったミネラルウォーターのペットボトルからは、水がどくどくとかぼれだしている。僕が打ち抜かれれば、このペットボトルの水のように体から血液が流れ出るだろう。

「お前の助かりたいという欲求はどこから来る？」

「…何？」

瓦礫が崩れ落ちる音で、僕は良く聞き取れなかった。

「何を守るんだ？ どうしてそうまでして生きようとする？」

床に放棄したガトリング・ガンに腰掛けて不思議がる。腰のガンベルトから銀色のリボルバーを取り出して、シリンダーをくるくると回す。

「生きること、理由は必要ない」

「必要だな。それが、この夢の中での力になる。動機があるから夢は生まれる。なければ夢は生まれない。朝、昼、夜の無為な三拍子

が続くだけだ」

シンダーをリボルバーへ戻し、ガンベルトにしまう。

「母を守ると言ったな」

僕は問う。

「……」

深い感情を内包した沈黙に感じられた。少なくとも僕には。

「生きているのか？」

再び問う。

「…かるうじてな」

胸を突き刺される言葉だった。

「だが、長くは持ちそうにない。早急な対応を迫られている。父はそんな母に、仕事も忘れて付ききりだ」

二つの世界、二つの家族。それぞれに人生があり、苦楽もある。まったく同じではないけれども、確かに存在する本物の感情の流れ。誰かが必要とし、守りたいと願う心。思いや、存在の大きさを天秤にかけることは無駄であり、無意味であり、決して量ることのできないものである。それでも僕は、両天秤に乗せてしまふのだった。

篠崎総と篠崎総を。僕と、もう一人の自分を。

「僕の母は…もうこの世にはいない。父が家族を顧みなかったせいだ」

こつも違ふのだろうか。二つの世界の同じ家族であるのに。同じ不完全な人間であるのに。

「違うものなんだな。同じ人間だというのに。皮肉なもんだ。まあ、それを分けているのが、キツチュである劣性さなんだろう。しかし

」

座っていたガトリング・ガンから立ち上がり、コートのポケットに手を入れた。ガンベルトは、立ち上がるというの間に消えていた。銃も同様に。

「これではつきりしたな」

僕はカウンターから静かに抜け出して、いつでも飛び出せる体勢

をとる。二丁の銃をイメージし、現れた銃のグリップを強く握り締めた。

「お前の死が、世の中のためになる、ということが」

とても鋭利な刃で、胸を、心を一刺しされたようだった。

「守るものもない。責任もない。失うものもない。そんなお前に補完する意味なんかあるか？ ばらばらになった家族の絆を、補完の力で修正することは不可能だ。補完の力が絶大だといっても、物理的なものだけだ。精神的なものはどうしようもない。母のいないお前には、悲しんでくれる者もないんじゃないのか？」

「…いるさ」

いるだろうか。いないかもしれない。

僕に愛を注いでくれた母はいない。僕を愛してくれる人はいない。

雅は。

雅は、ただ補完させたいがために言葉巧みに教唆しているだけかもしれない。

父は。

父は、母を失った後ろめたさで僕に優しくしようとしているだけだ。

和泉は。

和泉は、文学部の即戦力として僕の筆力を利用したいただけだ。

巧は。

巧も、僕の存在など大勢いる友人の中の一人に過ぎない。

西口清吾にしてみれば、僕なんていないほうがいいのかもしれない。

「時間が来た。夢の終わりは早いな。だが、キツチュ、お前も本当は理解しているはずだ。理解するのが怖くて、理解していないふりをしていただけなんだ」

「…」

「よく考えるんだな。残された時間は極めて少ない。お前と違い、俺はな。今、こうしている間にも、母は苦しんでいるんだ」

「…」

「明日、昼十二時の一時間前後に眠りにつけ。それが最後だ。この奇妙な関係も」

「…それで終わるのか」

「終わる。お前は俺の母を救うことが出来るんだ。篠崎総の母を」
それが、夢の顛末だった。

第二十二話・「お前の死が、世の中のためになる」(後書き)

興味を持ってください方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張りますので、よろしく願います。評価、
感想、栄養になります。

第二十三話・「寂しさを埋めてくれた」

夢から覚めるのは何度目だろうか。

良い夢も悪い夢も、喜怒哀楽、そのどの夢であっても夢は覚める。覚めない夢などないのだから、人は夢に対してあまり固執したりしない。寝覚めが悪い、続きが見たい、その程度で終わってしまうのが夢だ。その繰り返し。繰り返して、慣れ、また別の夢を見る。

そうして、何度も何度も夢を見る。

目を明けて頬に手をやると、湿っぽい感触があつた。目の前に指をもつてくると、窓からもれた暮れなずむ夕日の下で、淡く光を放っている。

「いったいどんな夢を見ていたの？」

ドアを背にして床に座る僕の横に、ごく自然に座っている和泉。まるで風景に溶け込んでしまったかのようなだった。話しかけられるまで気付かなかったのは、僕にその余裕がなかったから。

「ずっと泣いていた。ぬぐってもぬぐっても溢れ出てきて。体中の水分で涙を補っているみたいだった。ほら、ハンカチもこんなに」
ブラウンにチェックの模様が入ったハンカチが僕に差し出された。僕がそつとハンカチに触れると、水で濡らしたと疑いたくなるくらい、濡れそぼっている。

「泣いていたんだな……」

夢の中で発生した胸の痛みが、夢から覚めてもまだある。夢と現実が密接につながっている。それが嘘ではないと証明されていた。

「……聞きにくくなっちゃった」

和泉がハンカチをしまいながら、おどけて見せた。

「何を？」

「何でしょう」

「だから、何だよ？」

「聞いていいの？」

僕は和泉の顔を窺った。

「…別に。質問にもよる」

僕と和泉が背にする屋上の扉に、オレンジ色の羽衣が伸びている。床に座る二人を、音もなく巻きとっていく暖かい帯。光の帯が和泉の瞳にあまりにも美しく映りこむから、僕は少し恥ずかしくなった。和泉と僕の身体的な距離が、和泉の匂いをより確かにし、僕の鼻腔を中毒に陥らせる。

また、端正な彼女の顔立ちが、彩り豊かに輝く様、つまり表情豊かな様が、目に焼きついて離れなくなりそうだった。

短いスカートからすらりと伸びる太ももが、より僕を赤くさせる。夕日で赤面をカモフラージュできるだろうか。

和泉は僕の赤面に気付く様子もなく、質問の内容を考えていた。

「明日、晴れるかな？」

「却下」

和泉が肩で僕にタツクルした。僕はよろけて床に手をつく。和泉は妙に楽しそうだ。

「質問にもよるって言っただろ」

床についた手にはひんやりとした感覚。日の当たらない場所はこのなんにも冷たいものなのか。

「総は、今朝の約束覚えている？」

僕は、座りなおして頷いた。

「…雅」

その名前を出すのに僕は勇気が必要とした。

「優美で上品なこと。洗練された感覚を持ち、恋愛の情趣や人情に通じていること」

「そうじゃなくて」

僕は向かいの窓に広がるオレンジ色の空に目をはせた。

「そうじゃなくて…」

目に焼きつきそうな夕焼け空。

「彼女は、葉月雅は、夢の中で俺を助けてくれた人なんだ。補完に

ついてヒントをくれたり、もう一人の篠崎総の攻撃から救ってくれたり……」

和泉は穏やかな笑顔を僕に向けていた。一方で、斜陽の効果だろうか、少し寂寥感を帯びたようにも見えた。

「救ってくれたり……？」

「……救ってくれた」

心を書き起こした文章を訂正した。

「どうしてかな……」

和泉のため息交じりの声。生徒の声が下から聞こえてきたが、足音が遠ざかるとともに、声も遠ざかっていった。默然と静寂の区別がつかなくなる。

「どうして、肝心なところだけは隠してしまうのかな」

「……隠すつもりは」

「ほら、隠してた」

膝を抱え、そこにあごを乗せて不平を言う。駄々をこねる子供のように。

「私に言うとか、何かまずいことなの？」

僕は、曲げていた足を伸ばす。同じ体勢を維持していたせいかな、違和感があった。僕は質問には答えなくて立ち上がる。制服のズボンに付いた汚れを払い、扉に寄りかかった。扉はきしんだが、簡単に僕の体重を支えて見せた。

「寂しさを埋めてくれた」

和泉は自分自身をさらに強く抱きしめ、顔をうずめる。

「孤独や迷い、いらだち……いや、それだけじゃない。……俺自身を、すべてを、抱きしめてくれたんだ。不思議な話だけど、それが嘘偽りでないとか、すんなり信じることができた」

太陽の光量が弱まってきている。スポットライトのように僕らを照らしてくれていた夕日も、舞台から降りようとしている。一日という演目も終焉を迎えようとしていた。

「大事な人なんだ。助けを求めているんだ。でも」

夢での総の言葉が僕の中で大きく反響する。

「…助けることができるかどうか、今はもう分からない」

総が母親を助けた後、この世界を救ってくればそれでいいのではないか。この身を犠牲にする価値は十分にある。和泉の中から僕の記憶、存在が完全に消去されれば、文学部としてもっと有意義な活動ができるだろう。僕にこだわらないほうが、文学部は存続していける。その点で、父は息子という後顧の憂いなく、母を哀悼し、後悔することができる。条件は整っている。後ろ髪を引くものはない。

最後は僕の覚悟だけだ。

「…そっか」

和泉も立ち上がった。

「私は総を勘違いしていたみたい」

「…？」

「情けないね」

和泉も立ち上がって扉に寄りかかる。やはり扉は頑丈で、当たり前のように二人を支えた。

「総にそこまでしてくれる子の気持ち、考えたことある？ 人を抱きしめることなんて簡単にはできない。言葉ではうまく説明できないけど、きっと大きな想いが総を包んでくれたはずだよ。だから、総の中にあつたいろいろな感情の荒波を鎮めることができた。それが、どれだけすごいことなのか、総は分かかってない。全然分かかっていない。全然考えていない」

僕より数センチ背の低い和泉が、上目づかいに僕をねめつける。

彼女の二重まぶたが、強い瞳の力を引き出した。

「誰にでもできるわけじゃない。総の気持ちがその子に力を与えるんだよ。なのに総は大事なところにまったく気付いていない。大事なら、本当に大事なら、死ぬ気で頑張つて、そして、助けられなかった、ごめんな、って…死に際で言いなよ」

僕の袖をつかんで揺さぶる。

「自分に負けて、そして、総がいなくなっても、私は悲しむ暇もないんだから！ 悲しむこともできないんだから！」

和泉は理解しているようだった。僕が立たされている状況、そして、その後に訪れる世界の変化も。

「せめて、その子だけには、総の最期を看取ってもらいなよ。でも……」

つかんでいた袖を離す代わりに、僕の肩に額を当てる。薄暗闇が、僕たちの距離をより狭めていくようだった。

「もし……もし夢から覚めることができれば、そのときは……」
彼女はつぶやくように言った。

「誰よりも一番に総の近くにいたい」

「部長として？」

少し時間を置いて額を上げると、和泉は笑った。

「部長として」

一瞬、作り笑顔に見えたのは、僕だけだろうか。

僕は、判別しようと目を凝らしてみたけれど、和泉はすぐに僕に背中を向け、そのまま歩き出した。

階段の手前で立ち止まると、和泉は右手を高く突き上げて、少し震えたような声で言った。

「頑張れ。命尽きるまで」

和泉はそれを何度も言い続けた。復唱するたびに、震えていた声にも張りが出てくる。

何度も何度も、高らかに言い放った。

第二十三話・「寂しさを埋めてくれた」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。スピード感のない文章を書いてしまった典型的な例のような小説ですね。そんな作者ですが、これからもお付き合いいただければ、幸いです。評価、感想、栄養になります。

第二十四話・「心のままにしたい」

「一緒に帰る。副部長殿」

僕は和泉の背中につき従う。バッグを取りに部室に戻ると、部室の電気は消されていて、真っ暗闇だった。いや、もともと点いていなかったただだろう。西口清吾が部室を訪れたときは、点灯していなかったから、最初から電気はついていなかったとみたほうが正しい。とすると、僕が部室を出てから数時間は経過している計算になる。僕は、夢の中にいたのだから数時間の経過は苦でもなかった。

夢の中身は、苦そのものだったが。

「和泉。西口清吾とは、あの後…」

和泉の作業の手が止まった。

「…清吾とは、幼なじみなの。物心ついた頃からずっと一緒に育ってきた」

「俺が聞きたいのは」

「聞いて」

和泉は僕の言葉を塗りつぶした。

「少し大げさかもしれないけど、私たちは双子のようだった。本当にそう思ってもらって遜色ないくらい」

部室の真ん中を陣取るテーブルの表面を指でなぞる。過去の轍を逆行していくように。その軌跡を確認するように。

和泉の指がぴたりと止まる。

「幼稚園、小学、中学…そうして当たり前のような進級、進学を重ねていくうちに、私たちはいつしか離れ離れになっていった。目視できる距離ではなくて、精神的な距離において。清吾も言っていたでしょ。中学の頃の私はとても目立たない存在で、ブスで、暗くて、消極的で、ナイーブで…」

「そこまで言っていないよ。彼は」

和泉は指折り数えた手を見下ろしながら、笑みを浮かべた。

年老いた蛍光灯の淡い光が、その和泉の笑みに感慨深い影を浮かび上がらせる。

意識してではないだろうが、そんなときの和泉だけは、なぜか学校生活では見るこのできない独特の表情を見せる。

影と日向。太陽と月。表と裏。

…そのどれでもない。角度を変えることで表情を変える能面。

そんな複雑な人となりのを和泉は持っている。

「清吾は優しいから。全部は言わなかったのよ」

二人が透き通る不可視の糸でつながれているようで、少しだけ嫉妬した。

「でもね、一方で、清吾は私をどんどん引き離していった。うつん、私が彼に追いつけなかっただけ。清吾のせいじゃない。でも、時々思ってしまうの…」

胸の奥がざわざわしている。

「並んで、二人一緒に歩いてきたのに、どうして引き離されてしまったんだろう。前に進めないで置いてけぼりになる私を、どうして清吾は待っていてくれなかったんだろう、って」

「和泉…」

僕が彼女に何を言えるというのだろう。不用意に言葉を発するべきではない。和泉の気持ちを分かっているつもりでも、それは分かたふりをしているだけで、痛みまでを共有しているわけではない。同情など、憐憫など、ここではただの錯覚だ。

「自分本位だね、私。なのに」

彼女の細指が握りこぶしの中に加わった。そして、糸が切れたように、突然、握力は消失した。

「清吾は、私が必要だって言うてくれた。二人で歩いていこうって好きだって…」

果たして、消失したのは握力だけだったろうか。

和泉の力という力　体の力、意志の力　が和泉から抜け出していつてしまったように見えた。

和泉は床に力なく座り込んでしまった。

巧が彼女につけたあだ名は、オールマイティ恵理子。

それは彼女の表面しか見えていない証拠。彼女は自らの補完を終了して、完璧になったはずだった。でも、精神的な面は、他人と大差ない。それだけは補完することができない。もう一人の僕：総も夢の中で言っていた。

補完したからといって、家族の絆まで修復できるとは限らない。

二つに共通するのは、本人を含めた人々の性質や心を、補完した能力によって覆すことは困難だということ。

「私の中のもう一人の私が、耳元で囁くの。清吾は私が追いつくのを待っていた。待たせていた分、彼は前に進むことができなかった。清吾は否定してくれた。でも…でも、そんなこと信じられない。補完なんてするんじゃない…昔の私でいけばよかった。顔も性格も人並み以下で、うつむいてばかりの…文学だけが取り柄の自分のままで…」

感情の台風が一過しては接近し、そしてまた一過していく。

暴風域に僕はさらされている。

悲哀を宿した雨に打ち付けられ、波浪に身をさらわれる。

彼女に近ければ近いほど、悲しみの力に身を引き裂かれてしまいくさった。

「信じられなくなっている…。私は、清吾が信じられなくなっている…」

自分の両手を見つめながら繰り返す。傍から見ればきれいなその手も、和泉の瞳を通して見れば、薄汚れてしまっているのだろうか。「純粋に人を信じることができた昔の私ではないのに、清吾は昔のままの純粋な瞳で私を見つめる。うれしいはずなのに…傷ついていくの、私が…」

台風の中で和泉は泣いている。

周囲を巻き込みながら悲しみの要素を抽出して、それだけを巻き込みながら、深々と泣いている。これこそ僕の幻視、錯覚そのもの

かもしれない。和泉の双眸には、涙さえも、潤いさえも見ることはできないのだから。

しかし、悲哀を肌で感じるくらいは僕にもできる。

空気を通して伝播してくるから、理解することができる。

…悲しみとは、ずっと共に生きてきたから。

「総…私…」

屋上への扉の前、僕は彼女に涙をぬぐわれたことを想起する。あのハンカチに染み込んでいたのは本当に僕だけの涙だったのか。今、彼女が涙を流せないのは、すでに涙が枯渇してしまったからではないのか。あのチェックのハンカチに吸収されてしまったからではないのか。

「私…どうしたらいいのかな…」

自らも辛いのに、僕を励ましてくれた和泉。

「総が言ってくれたら、私…信じられる」

明るい太陽のような和泉。

「信じられるから…何か…」

文学を愛し、この部のために奔走した和泉。

「何か言って…」

僕はくず折れた和泉に近づいていく。彼女の前で片ひざを付き、和泉の両肩に手を乗せる。和泉は藁にもすがるような表情で、僕の瞳を必死に見つめてくる。

「和泉…僕は」

救いを求める従順な眼差しが、僕の言葉を渴望する。

「…僕には…僕には何もできない」

茫然自失の和泉。手のひらで僕の胸を付く。

「…どうして？」

大きく首を振る。

「どうして、そんなこと言うの？」

「僕は、和泉に何も…」

「聞きたくない。聞きたくない！」

和泉の動揺が僕にも伝わってくるようだった。肩に触れただけで、さつきよりも増して悲しみの色が鮮明になる。ありきたりな慰めなど、言えるはずがない。そんな言葉すら、僕は持ち合わせていなかった。

「総が…総が言ってくれたなら、私はきっと何でもできる気がする」
「できない。僕には、そんな身勝手なこととはできない」
「嫌…信じる。私、信じる、だから…」

必死に僕を頼ろうとする和泉に、僕は首を振り続けた。かたくなに、振り続けた。

「僕は！僕は…一人の、弱い、何もできない、何も変えられない、過去ばかりにこだわっている…ただの男だ。補完されるだけの…」
和泉の悲しみを消し去る言葉も、受け止める行動もない」

本音を語るとき、人はこんなにも悲しいものなのだろうか。自分の力が及ばないと理解したとき、人はこんなにも空虚になるものなのだろうか。

「でも、彼なら、西口清吾なら、きっと和泉を支えられる」

「何で…」

「僕には…君に」

何もしてあげることとはできない。この言葉を躊躇する僕を知ってか知らずか、和泉の裏返った声が言葉を打ち消した。

「何でこういうときばかり、僕、なの。嘘でも、俺、って励ましてよ！」

「…」

和泉の双眸を見つめる。

「そうやって人と壁を作っておいて、時々本音の自分が表れて、心を開いてくれたのかな、って喜んだとたん、壁を作ってまたやり直し。ずっと私一人でぬか喜び。その連続」

「…ごめん」

「謝ってなんか欲しくない！ そんな言葉が聞きたいんじゃない！」
「じゃあ、何だよ、僕にどうしろって言うんだ！」

悲しみを覆いつくすように怒りが奔騰する。

「僕だって…和泉の悲しみを取り除けるものなら、取り除いてやりたい。本当にそう思ってる。でも、僕にはどうすることもできないじゃないか！」

肩の震えが止まらなかった。悔しさ、怒り、悲しみ、すべてを混ぜ合わせたような、やるせない感情。

「つまらない同情や、ありきたりな慰めを口に出したって、何も変わらない。僕だって、それは分かってる」

枯れたはずの涙腺に水があふれていく。

「伝えるのは、言葉だけじゃないよ…」

和泉の目にも、うつすらと涙が見える。

「言葉だけが、すべてじゃない」

和泉の瞳に吸い込まれていきそうだった。吸い込まれることを拒む意思は僕にはない。むしろこのまま吸い込まれていきたいと思っ

った。悔しさ、怒り、悲しみ…僕が持つ負の感情を、彼女もまた持っている。

二人の力オスをひとつにすることが慰撫になるなら。僕たちはそれをすべきではないか。

刹那の現実逃避だとしても、一瞬でも苦しみから逃げられるなら。

「心のままにしたい…考えたくない…」

和泉は僕の中にゆっくりと入ってきた。胸の中に和泉の体を受け止めると、そこには確かな重量がある。身体の重さ、心の重さ、その二つが強く感じられる。

「考えたくないよ…もう何も考えたくない」

和泉の背中に回した腕に、強い力を込める。

和泉の体温が僕の肌に浸透してくる。

和泉が僕で、僕が和泉であるかのように。すべてを共有するかのように。

「総…」

和泉の声が吐息になる。

恍惚を感じているのだろうか。だとすれば、僕も同じだった。

僕が強く和泉を抱きしめれば、和泉も同じかそれ以上に僕を強く抱きしめる。その行為が心地いい。僕は、恍惚をまぶたの裏に閉じ込めた。

すると、ぼうつと、柔らかな光が広がり始める。

どうしたの？ そんなに泣いて。

母が、僕を強く抱きしめてくれた記憶。母の匂いで鼻腔がいつぱいになると、僕は決まって涙を流した。このやるせない感情をずっと受け止めてくれていた、母の海のように深い胸。

僕は、その中にただゆっくりと沈んでいくだけだった。それでよかった。そうすれば、もう次の瞬間には苦しみから解放されていたのだから。

まぶたに抑えきれないほどの涙を溜めていた僕は、母を想いさらに涙を流す。

ずっと一緒だから…。

母の言葉が溢れ出して止まらない。

涙のように、どこからともなく湧き上がってきて、清流のごとく僕の頬を流れていく。

清澄な母の声が、耳の奥でこだまする。

泣かないで…。よしよし。

母さんも悲しくなるでしょう？

「…総…」

和泉の声が、ゆっくりと近づいてくる。

それが和泉との距離だと分かったときには、すでに二人の唇は触れ合っていた。

第二十四話・「心のままにしたい」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張っていきますので、どうかよろしく願います。
します。評価、感想、栄養になります。

第二十五話・「…私は、お前を愛していた…」

深更。

僕は暑苦しさも手伝って、階下から聞こえてきた微かな物音で、目が覚めた。蚊の羽音が耳に障る。足を二、三箇所刺されてしまったのか、かゆくて仕方がない。二階だというのに、コオロギなどの涼やかな鳴き声が聞こえてくる。小さなオーケストラは誰に聞かせるでもなく、いつまでも公演を続けていた。僕は汗だくの体を起こし、かゆみの止まらない足をかきむしると、静かにドアを開けて廊下に出た。

階段から見下ろすと、どうやら父が帰っているらしかった。

キッチンとテーブルのある部屋から明かりが漏れている。ガラスにガラスが触れる軽やかな音。どうやら日課の晩酌をしているようだった。

最近の父は帰りが遅い。

僕にとっては顔を合わせることもなく最良なのだが、母の生きていた頃を彷彿とさせるようで、どこか気持ちが悪かった。

トイレに起きて、そっとキッチンをのぞくと、父の写った写真を見ながら泣いている母の姿がある。傍らにはコップに並々と注がれたアルコール。決して何かに八つ当たりしたり、泥酔することのなかった母が、自分の中に溜め込んだストレスを落涙に託して外へ発散するかのようだった。それでも涙の量はたかが知れている。ストレスがすべて水泡に帰すわけではない。僕はそんな母の姿に、父への憎悪と、母を守らなければ、という使命感を同時につのらせた。階段を下りて、僕は父をそっと覗き見る。

父は僕に背を向けて、酒を飲んでいた。小さいビンとコップが傍らに置かれている。父は何事かをつぶやいていた。正確には聞き取れなかったが、それは独り言ではなく、何かに向けられているようだった。

父に気付かれないように背伸びをして、父の語りかける先を確認する。

大きく見えていたはずの背中が、丸く、小さく見えた。テーブルには二枚の写真が重なって置いてあり、重ねられた写真のうち一枚は容易に判別することができた。二枚目の写真は一枚目の写真にほとんどをさえぎられて、見ることはままならない。かといって、これ以上近付くこともできそうにない。

一枚目の写真は生前の母の写真だった。

正確に言えば、母が持っていた、父の写真である。唯一と言って遜色のない家族写真。母が首をつった庭木の前で撮影された皮肉めいた写真。父は無愛想に木の前に立ち、母は幼い僕を腕に抱えて、父に寄り添う。一見、幸福そうに見える写真だ。だが、その約十年後に、母はその写真を見て、涙を滂沱として流し、そんな日々に耐え切れずに、父の背後に写る木で首を吊った。父は今、母の大事にしていたその写真を見て、郷愁と悲嘆の包含された酒を飲み続けている。

哀れな不幸の連鎖。もちろん僕とて例外ではない。

僕はそれ以上、父の姿を見ることができなかった。

「…私は、お前を愛していた…」

細く静かに語りかける父の声が、写真の中の母に届けられた。母は表情を変えることなく、今も変わらず微笑み続けている。

部屋に戻った僕は、目撃してしまった父の姿に困惑しながら、ベッドにうつぶせに倒れこんだ。雑多な感情を未解決のまま放棄する形で。そもそも、数回、数時間、数日で解決する程度の感情の乱れなどではなかった。答えなど、一生出ないのかもしれない。それでも僕は、感情の渦に自ら飛び込んでいく。分かっているも身を投げいれる。母の痕跡をたどり、残滓を拾い、残り香をかぐ。その行為に、どれほどの意味があるのか。

「それでも、僕は…」

母が恋しい。情けないことだと思う。僕が変わらず生きていくた

めには、母が必要不可欠。和泉と抱きしめあつたときですら、僕は母を思い出していた。温もりそのものが、母であるような気さえした。和泉とすごした夕日の情景が、脳裏によみがえる。

お母さんが自殺していても、私は総への気持ちは変わらなかった。心の奥底で、無意識のうちに思ったかもしれない。私でなくて良かったって。かわいそうだなって。私には、たくさん父や母がいる。私も、そのことではたくさん苦しんだよ。理解できないこともある。でも、そんな苦しみも、総に比べたら微々たるものかもしれない。でも、それでも、私は、どんなに傷つけられても、拒絶されても、総のそばに居たい…。

和泉は、唇を離れたあと、僕の胸の中で告白した。

そばに、居たくて…そう思うと、痛くて…あれ、なに言ってるんだろ。シャレみたいだね…おかしい…。

和泉の涙が、心が染み入る。僕はその染み込んできた和泉の気持ちを抱きかかえるようにして、ベッドにもぐりこみ、眠りについた。少年の頃の、母が生きていた頃の夢が見られるような気がした。

…ひとつ、思い出したことがある。

母が自死を選択した前夜のこと。今夜の父とまったく同じだったということ。

あなた、愛しているわ…。

写真につぶやいていた母。写真の中の父はずっと無表情のまま、少しも笑おうとはしない。

そして、翌朝。

木にロープを巻きつけて、母は首を吊っていた。

第二十五話・「…私は、お前を愛していた…」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
以後もがんばっていきますので、よろしく願います。
評価、感想、栄養になります。

第二十六話・「父さん！」

夢を見ない夜は、ただの一瞬でしかない。

目を閉じ、気付くと朝になっている。睡眠だけを端的に求める、長いようで短い一瞬。

僕は、そんな夜を越えた。

まぶしすぎるほどの光線がカーテンの間隙をぬって僕のまぶたを捕らえる。まぶたにすける血の色が赤々と燃えていて、太陽熱が眼球を直接刺激した。体を起こしてみると、なぜか体中がすつきりしていて、気分が良かった。昨日起こった出来事が夢のように感じられる。そんな爽快感だ。光がいつもよりまぶしく感じられるし、感覚も鋭さを増している。

「妙な、朝だ……」

夢の中にまだいるのではないかと考え、イメージを試みるが世界に変質の兆候は見られない。間違いなく、ここは現実だった。時計の針の動きは一定で狂っている様子もない。登校までは一時間以上あるし、目覚まし時計が鳴るのもまだ先の話だ。

この不思議な感覚は何なのだろう。

足の中から頭のとっぺんまで覚醒したようだった。覚醒がいったいどんなものかは知らないが、このひんやりした感覚をほかに説明する言葉が見つからない。ただひとつ分かることは、この感覚を僕が体験済みだということだ。

忘れもしないあの朝の光景。

目の前で起こっている事実到我を失った。あの朝の僕はその驚愕の光景を受け止めるために、全身を鋭敏化させていた。まるで、準備していない心に変わって、体が準備をしているように。

同じだ。あの朝の自分自身と。

ドアのノブを握ろうとする手が震えている。僕は震えの止まらない右手の手首を左手で握って微震を止めようと試みる。一時は止ま

ったと思つた震えが思い出したかのように左手も巻き込んで震えだす。ドアのノブを握り、回す、そしてドアを開いて、廊下へ出る。たつたそれだけの一連の行動が、怖くて怖くて仕方がない。

「怖い……」

僕は口から自然に漏れてしまった言葉を何度も反芻する。

何を恐れているのだろうか。恐れるものなど何もないはず。外に異形の生物がいて、僕がその生物に八つ裂きにされてしまう……そんな非現実的な出来事が待っているのなら、この恐怖心も理解できる。しかし、この恐怖はそれとは別の恐怖だ。

例えるならこうだ。

箱の中に入っているのが絶望だと知っている。僕はその絶望の詰まった箱を開けるのが怖くて震えている。箱のふたを開けてしまうことで、予期していた光景を見てしまうことで、僕は何かにさいなまれる。恐怖から派生する最もおぞましく、グロテスクな怪物が、僕をじっと見つめている。今か今かと、僕が箱をあけるのを、身を潜め、息を殺しながら待っている。満を持して、僕を襲うために。

映写機が、僕の記憶を上映する。僕は椅子に緊縛されて身動きひとつ取れない。目をつぶることさえ許されずに強制的に見せられる。まるで、拷問だった。

風にゆつくりとなびく白いカーテン。朝の神々しい光が庭に注がれ、カーテンの白をよりいっそう際立たせる。フローリングのひんやりとした床を踏みしめ、テーブルの脇を抜ける。純白のカーテンの隙間から、ちらりと庭にいる母の後姿が見えた。

僕は何の疑いもなく、カーテンをかき分け外へ出る。

庭の芝生が朝露を抱え、きらきらと輝いていて美しい。冷たい空気は肺を浄化してくれる。山の頂上に到達したようすがすがしい気分。

母がいたと思われる場所には、庭で一番背が高くて丈夫な木。

根元には母の靴。揃えて置いてある。

靴の少し上方には母の素足。白く透き通るよう。

左右に揺れる。振り子の時計のように。

左右に揺れる。木がきしむ音。

左右に揺れる。太い枝が泣く音。

宙に浮いた足が。

僕は踏み出す。

母へ。

一步。

目に映る

「父さん！」

僕は叫んでいた。

震える体を脱ぎ捨てて、僕は階段を下りる。足がもつれそうになりながらも、昨夜父の背中をのぞきこんだ場所にたどり着く。テーブルの上にはアルコールのビンが置いてある。コップは片付けられていた。

テーブルの少しはなれたところに、二枚の写真が平積みには伏せて置いてある。父が肌身離さず持っている写真であることは明白だった。

昨夜のまま、置き忘れたのだろう。

…肌身離さず。

僕はその言葉で、自らの不安をかきたてた。

「父さん！」

僕はもう一度叫んだ。言い知れぬ不安を抱えて叫んだ。母の死の風景と父の行動が重なり始め、それに伴って不安が大きく膨らんでいく。

みぞおちに暗澹たる霧が立ち込めて、僕の意味を、動きを、容赦なく奪っていく。

テーブルの周囲に差し込んでいる光の筋が、宙に舞い踊るほこりを黄金に輝かせる。荘厳な現象も、ここでは不気味でしかない。足を風が抜けていく。庭へと通じるスライドガラスが開けっ放しになっている。カーテンにさえぎられているためか、風は足元だけを

さらおうとする。外から吹き込む微風を受けて、純白のカーテンは手招きをするように、その身を動かしていた。目をそらしてしまう僕がいる。

重なり合ったもの同士が溶け合って、もはやそれが以前は二つあったことすら分らない。カーテンの向こうには、一本だけ背の高い木があり、そこにはロープが括り付けられ、人がぶら下がっている。

それは母であり、父である。

見ている僕は過去の僕であり、今の僕である。絶対的な力によって位置づけられている結果が、僕の眼前に広がっている。

カーテンを通れば、僕はもう一度、死、を目撃することになる。歩き始めたばかりの赤ん坊のように、ふらふらとカーテンに近付いていく。僕の足は歩行すら忘れてしまっている。このおぼつかない足取りが、僕の精一杯だった。

太陽が雲に隠れたのか、家中の光が一気に失われる。

純白の光をまとったカーテンは、一瞬で汚されていった。

夜の帳が下りたようだった。

僕はますます恐ろしくなる。

太陽が雲から脱出し、家中が夜から昼へと変貌しても、僕の心は闇に覆われたまま。光量の変化も、僕には警告を知らせる点滅としか考えられなかった。風がやみ、カーテンの動きも止まる。鳥はくちばしをつぐみ、バイクのエンジン音も遠ざかる。世界から音が消え去った。世界は真空となった。

カーテンに手をかける。

刹那、真空の世界から枝のきしむ音だけが聞こえ出す。ぶら下がっている重量にたまらず悲鳴を上げる音。

右へ左へ。

左へ右へ。

重量感のある何かが揺れている。

僕はカーテンを開け放った。

まぶしすぎる朝の光に視界を奪われる。真つ白な世界、世界の始まりを思わせる、何も描かれていないキャンバス。まぶしさのあまり目を手で覆う。しばらくすると、キャンバスにゆっくりと絵の具が塗られていき、世界が構築されていった。世界の色が通常に戻っても、僕は目を覆った手を下げられない。

心臓が爆発寸前だった。

血液が逆流するよう。その中で、恐れにかろうじて打ち勝った手が、がたがたと震えながらも僕の意思によって下ろされていく。

そこには…一本木には…二匹のすずめが止まっていた。

木には何もぶら下がってなどいなかった。

僕は数秒間そこで呆然とし、次の瞬間には引きつった声で笑っていた。

「はは…はは…はははは…」

脱力感だった。安堵感だった。

「何だ。何だよ…驚かせやがって…」

いやがおうにも分かってしまうのだった。その事実。父を失うことに、恐怖を抱いている現実。父が生きていてくれてよかった。そう思っている自分に。

「この写真を忘れていくから…」

僕は八つ当たりするように、写真を取り上げた。平積みされたその一枚目は、昨夜、草葉の影から覗いたもの。そして、見るこ
とが出来なかった二枚目、僕は見たことのなかった写真に興味深々
だった。

「葉月……雅…十八歳……」

鈍器で殴られたような衝撃。そこに写されているのは、紛れもないあの葉月雅であつた。

篠崎雅。それが僕の母の名。父と結婚してこの家に引越したとき
の名。

では、旧姓は。

母の旧姓は…。

僕は見落としていた。

僕が生まれてから親しみすぎた、篠崎という姓に。

「そうか、そうだったんだな……雅、そういうことだったんだな」
目頭が熱くなつていく。信じていたものに裏切られる悲しみ。これが、その痛み。胃が握りつぶされる。内容物が爆発しそうだ。

これで、僕のすべきことは定まった。

「補完　か」

この苦しみから逃れてしまいたい。ならば総の言うとおり、彼の母を救うための糧となればいい。だが、それでは。

「雅……そうじゃないんだ」

雅の言うことがすべてではないような気がする。父の自殺を心のどこかで否定していたように、和泉が悲しみながらも僕の背中を押してくれたように。失うことに対しての恐怖心は誰の心にもある。

そしてその恐怖心は、対象が失われた瞬間に、悲しみに変換される。

「……そうじゃないんだよ」

補完に指定された時間が迫っていた。

第二十六話・「父さん！」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございました。よくよく考えてみれば、この小説はファンタジーではありませんね。ジャンル設定を間違えてしまいました。そんな作者ですが、これからもよろしく願います。評価、感想、栄養になります。

第二十七話・「思慕のすりかえ」

港のコンクリートに放置された網。船体の塗装がめくれ上がった漁船。巨軀に黒いタイヤを巻きつけた船が、港に接岸されている。

早朝に活気付くであろう魚の取引市場は、日中は廃墟同然だ。

「あんなことがあったあとでも、きちんと眠れたんだな……」

歩けば僕は思い出す。

「でも、これは……」

数多くの尊い思い出を。

この海は、心の琴線を爪弾く力を十分に持っていた。母の実家には数えるほどしか行ったことがない。それでも、僕がこうして覚えていられるのは、過去が美化されているからなのかもしれない。美化された美しいもののほど、記憶に残るものである。

僕は防波堤に腰掛けながら、想像の及ばない水平線の向こうに視線を泳がせていた。

潮の匂い、波の緩やかなうねりが、僕を幼少ヘタイスリップさせる。

あなた！

母の甲高い声が防波堤に響く。波間には防波堤から足を滑らせた子供が手足をばたばたさせて、何とか海面にとどまろうと必死にもがいている。母の悲鳴を聞きつけたのか、遠くから父が満面に危機感をみなぎらせて走ってくる。母の表情は、まるでこの世の終末を見ているかのようだった。

母は松葉杖を手放して、その場にくず折れた。このときの母は足を骨折していた。そのため海に飛び込もうとする意気に、足がついていかない。それでも母は、思い通りに動かない足を叱咤して、防波堤から身乗り出す。腕をあらん限りに伸ばし、子供を助けようと死力を尽くす。届くはずのない距離だが、子供もそんな母に触発されてか、母のほうに腕を伸ばす。二人の手が互いの手をつかもう

と迷走する。

やめろ！ お前まで落ちるだろう！

今にも海に落ちそうな体勢の母を引つ張り上げると、父は一縷の躊躇もなく、海に飛び込んだ。子供のすぐ傍に水柱が上がる。子供は夢中で海と格闘した代価か、もはや海面に姿はない。

あ…ああ…。

母の動揺が喘ぎとなって聞こえる。

…実際は、この風景を僕は知らない。

父が飛び込んだときには、大量の海水を飲み込んで海の中へと沈んでいったから。海水を吸収した衣服が、僕を海中へと引きずり込んだから。

目を覚ましたときには、僕の体は、防波堤のうえで仰向けにされていた。体中に衣服がびったりと張り付いていて気持ちが悪い。母は僕が光を取り戻したと知るや、その温かい胸で僕を包み込んで泣いた。

ごめんね…。ごめんね…。

母はただそれだけを繰り返した。

我が子を抱く母に聞こえるわけないと知りつつも、僕は思い出の中に残る母に呼びかけた。

「母さんのせいじゃないよ。僕が悪かったんだ。母さんの注意を無視したから」

父は母が放り出した松葉杖を拾い上げている。自らの危険も顧みずに人助けをしたとは思えない、どこか沈着を装った面持ちだった。そして、泣きながら僕を抱きしめる母の肩に手を置いて、少しだけ微笑んだ。怒るでもなく、喜ぶでもなく、ましてや母のように体いっぱいで表現するでもなく、ただ一瞬微笑んだだけ。自らの命を賭けて守った子供の命と、それを包み込む母の姿を眺める。家族が幸せに暮らしていくこと。それを眺めることが、父の何よりの幸福であるかのよう。

泣き続ける母から離れ、シャツを脱いで力いっぱい絞る。シャツ

から水分が追い出されていく。父の横顔は普段のそれに戻っていた。事故を聞きつけてきたのか、ライフセーバーが母に駆け寄っている。

大丈夫ですか、と確認を取ると、母は大粒の涙をこぼしながら頷いた。

「父さんだったのか……。僕を助けてくれたのは」

僕はずっとライフセーバーが助けてくれたとばかり思っていた。父は何もしてくれなかったと決め付け、思い込んでいた。でも違った。

僕は、この夢の中に広がっている大空を仰いだ。防波堤の上から思い出達は消え、僕一人になった。僕が見ないようにしてきたもの。見てはいけないと必死に目を閉じていたもの。決め付けて、かたくなに信じ続けたもの。一心不乱に、拒絶したもの。

息を吸い込んだ。

分かっていたはずなのに、分からないふりをした。それを許すことができなかった。大切なものが失われた僕には、そんなことをする余裕なんてなかった。ただ、否定するだけ。

父は。

…父は、愛し方が不器用なだけだった。

直接的な愛し方よりも、間接的な愛し方をする人だった。

母のすぐ傍にずっといた僕には、それが分からなかった。分かるうとしても、気付けない位置にいた。狭隘な僕には当然の流れだった。

母は世界で一番、直接的に愛を注いでくれた人。

だから、僕にはその愛し方しか理解できなかった。すべてを母のせいにするつもりはない。けれども、僕の生きていた場所からは、父の愛し方を看過することができなかった。直接的な愛には気付くことができて、間接的な愛には気付くことができなかった。母も同様だった。父は、母が僕を心おきなく愛してくれる環境を、築こうとしてくれていたのに。

結局、僕も母も、目に見えない父の愛に、気付くことができなかっただけ。父を分かつとせず、父を最初から拒絶していた僕。直接的な愛を切望してやまなかった母。それでも、自分の愛し方を貫き通した父。

溢れていた愛。

こんなにも家族の中にあつた愛。

行き場を失った愛が、悲劇を生んだ。僕の心の中に大きな影を落とし、母の命をも奪った悲劇を。

「でも…今更なんだよ。どんなに愛があろうと、それをうまく伝えるすべを持たなければ、結局、何度人生をやり直せたとしても、母さんの死は変わらないんだ」

やり直すことのできない、片道きりの人生。そして、母はいない。それが事実だ。厳然たる事実だ。もう通過してしまつた道。立ち止まつて振り返ることはできても、戻ることはできない。

「戻ることは、できない」

僕は立ち上がった。一匹のカモメが僕のすぐ横を飛び、すぐさま急上昇していく。太陽と翼が重なる。

「こんな、俺の記憶にはないイメージまで見せて…。そう言いたいんだろ。雅…」

僕は雅に笑顔を作つて見せた。雅は愁いを帯びた瞳で口唇を開く。「そう。戻ることはできない。決して」

防波堤の上、距離を置いて、言葉を交わす。高めの波が防波堤に押し寄せる。テトラポットにぶつかった波は白く飛散し、水滴が僕の肌に触れた。

突風が雅の髪の毛を乱暴にかき上げる。

「雅：君は誰？」

突風が止むのを待つて、僕は自分の中にある確信を口にした。

「…母さん、なのか？」

波の音、音の波が耳に押し寄せる。二人の会話を妨害するように。「少し、歩きましょう」

雅は、砂浜を歩いていく。どのくらい歩いたのか。振り返ると、一定の歩幅で連なる足跡の軌跡が、いつの間にか大きな曲線を描いている。

「私が総の母、雅であるということ。そのことに変わりはないわ」

潮騒の音に時間を忘れそうになったとき、雅は背中越しに言った。

「じゃあ…やっぱり君は」

「私はこの世界の生きとし生けるもの、すべての母だから」

砂に残した足跡が、波によって消されてしまう。

「最初に私がいた。あなたが地球と呼ぶ星。私は自分自身が完全な、全知全能な存在であることを証明するために、さまざまな生物を生み出した。それが生物の始まりであるし、人間の誕生にもなった。

でも…それはことごとく失敗した。太古から現在に至るまで、完全なる、完璧なるものを生み出すことができなかった。完全なるものが生み出したものは完全。不完全なるものが生み出したものは完全には至らない。単純なことだった。そして、私は最後に人間を生み出した。私のすべてを注ぎ込んだ愛しい子。私が生み出してきたすべての子供達に勝る、完全な子……のはずだった」

実際にそうだったわけではないが、雅が齒軋りしたように見えた。「人間という器の中には、能力のすべてを保管することはできなかった。人のキャパシティは有限だったの。やむを得ず、私は人を二つに分けた。私が、私を複製し、そこに一人の人間に入りきれない部分を加えて。だから世界は二つある。でも、あなた達には、あたかも世界はひとつしか存在しないように見せた」

波風が声を奪おうと、勢いを強くする。

「私は…それすら、完全にはできなかった」

砂浜ははるか遠くにまで続いている。この夢の中では砂浜しかないのだ。だからどこまで行っても僕たちは砂浜をループする。それは、連綿と破壊と創造を繰り返してきた雅の行為のようにも見えた。「人は…夢によって互いをつなぎとめたままになってしまった。不完全な星が生み出した不完全な人間。皮肉にも、私の不完全さが証

明される形になってしまったのよ」

足跡は、作っても、やがて波風によって塗りつぶされる。いくら作っても、消えていく。その行為の空しさ。

「それだけならまだ救いはあった。私が救いを求めるのもおかしい話だけれど」

そう言つて雅は自嘲する。

「人は進化していった。私の想像を超えて。もともと、進化を視野に入れてはいたのだけれど、この急激な進化は想定外だった。総、分かるでしょう？ 今、この星の現状を」

「…戦争…環境破壊…」

人間の愚行の数々。際限が無い。

「私はもう終わりにするしかなかった。人は人同士で平気で殺し合う。一方で環境破壊によって絶滅してしまった種もある。海も、空気も、大地も、私の体は、病巣と化しているわ。そういう意味では、あなたたち人間は、私が持つ癌…」

言い返す言葉も無かった。正鵠を得すぎていて、反論の余地も無い。

「私は、あなたたち人間に自由と能力を与えすぎた。この星の、私の終わりが確実に近づいてきている」

そして、雅は振り向いた。

「でも、人には可能性もあった。補完という可能性。人は進化の過程でキャパシティを増やし、失われた半身を取り戻せるまでになった。かつて私が完全なる一固体として、存在できることを望んだように。だから私は、この世界をあきらめてしまう前に、人の可能性に賭けてみることにしたのよ」

僕も一定の距離をたもって立ち止まった。その距離は、今まで雅に接してきた距離よりも、確実に遠い距離だった。

「そうか…それが僕、なんだな」

「…」

「過去の母の姿に化けて近づいたのも、僕を補完へと差し向けるた

めなんだな。優しい言葉をかけたのも、それじみた行動も……」

「……そう」

悪びれもなく雅は首肯した。静かに湧き上がってくる黒く醜い感情。

「あなたにすんなりと近付くには、それが一番都合良かった」

頭痛がするのか、雅は少しだけ顔をしかめる。

「なら、満足しただろ。もうすぐ補完が始まる」

僕は顔を背けて吐き捨てた。

「……そうではないの」

「じゃあ、どういふことなんだよ！」

僕の足元には綺麗な貝殻が転がっていた。きらきらと輝いてはいるものの、半分が無残にも欠けてしまっている。

「僕は……君を想っていた。たとえそれが母への思慕のすり替えだとしても、僕は君が……君が好きだったんだ。ずっとそばにいたら……考えていたんだ」

「私もよ」

「……嘘だ。信じられるわけない。いまさら、そんなこと」

「総の夢、温かった。あなたの母親への想い、苦しみ、悲しみ、恋しさ、それがとても愛しく思えた。いつの間にか、私は使命を果たしながらも、総に惹かれ、恋していった……」

「そんなの戯言だ……。君はこの星そのもので、そんなこと……あるはずない」

「私は母である以前に、女なのよ」

「だけど、君は……女である以前に、地球そのものだ！ 地球が恋するなんて、馬鹿げてる！」

「それでも私は篠崎総に恋をした。この気持ちは、地球の想い。地球があなたを愛している。たとえ私が地球の使者、地球の意識そのものであっても、それが揺らぐことはないわ」

雅の言葉に嘘はないようだった。

「……」

無表情でも言葉には温かみがあった。

「……」

だからその言葉だけでも、信じようと思った。

第二十七話・「思慕のすりかえ」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方ありがとうございます。評価、感想、栄養になります。

第二十八話・「…僕は」

「…補完は、それでもしなくちゃいけないのか？」

「可能性を見せて」

「他に方法はないのか？」

「私が生きていくためには。それは、この星に生ける全てのものの生を意味するわ」

「誰も悲しませない方法は？」

「ない。たとえどちらの総に転んだとしても、失われるものは多いわ」

「僕は」

そして、それだけは譲れなかった。

「それでも、双方が生きることで何かを得る。その考えが許せなかった」

何かを犠牲にすることで何かを得る。その考えが許せなかった。強欲でもいい。僕は覆してやりたかった。補完は選択肢の一つに過ぎないのだと。雅を救える道はほかにもあるのだと、証明してみせたい。

「総、それはできない。もう限界なのよ。誰かが、この星を救う起点とならなければ。起点となる力、その力は補完でしか得られない」

「分かつてる。分かつてるんだ」

雅の言うことは正論だ。合理的だ。

「それでも僕は、この戦いの中で、その可能性を、どんな小さな希望でもいい、見つけたいんだ」

遠くから浜辺を歩いてくるもう一人の総。

「余計な雑念はイメージを曇らせる。補完されるわ」

「希望は雑念じゃない」

「……」

雅の沈黙が思案しているように感じた。雅の周囲に、人をはねつけるような風が巻き起こったような気がした。そんな気がしたから、

僕は雅に自分の思いをぶつける。

「人の罪は、人が贖罪すべきなんだ。これ以上君に、この星に、甘えるわけにはいけない。自立しなくてはいけない。人は……僕は……」

「さて、補完される心構えはできたか？」

観察する目が、炯々としている。
「……どうやら、心構えができたといっても、補完されることに対してではなさそうだな」

総のイメージによってビルが乱立していく。海から砂浜から、ビルが生えていく。空を覆いつくし、地面は無機質なアスファルトへと変化する。

「手を出すなよ、雅。いや……星の使者」

「……わかつているわ」

「どうだかな」

「彼女は手をださない。本当だ」

目配せると、雅はゆっくりと頷いた。

「本当かどうかは、これから分かることさ」

「総！ 後ろ！」

雅の声がなかったなら、僕はきっと二度と夢から目覚めることはなかっただろう。目の前にいる総ではない、もう一人の総が、僕を背後から強襲してきた。雅の声をとっさに判断し、僕は前方へ跳躍した。そして体をひねり、背後から襲った総を振り返り、身構えようとする。

「手は出さないとは言ったが、口は出すんだな」

だが、地面に着地することができなかった。振り返ろうとしたのが、選択ミスだった。僕が背後を向いた瞬間に、先刻向かい合って宣戦布告してきた総に羽交い絞めにされてしまう。

「俺、諸共消えてなくなれ」

背後から強襲してきた総が、巨大な砲身を向けてくる。

「はじめから分身……！」

引き金を引く指の動きが鮮明に目に焼き付けられる。そのままや

すやすと引き金を引かせるわけにはいかない。一気にイメージを脳内で練り上げる。すでにアスファルトと化した砂浜から、再び砂浜を出現させる。

正確には、砂の柱。

引き金を引くのと、イメージ作成の、瞬間的なせめぎあい。砂が急激に膨れ上がったかと思うと、爆発。その隙に曲げたひじを、羽交い絞めにする分身に向けて放った。こめかみにヒットしたのか、よろめいてその手を離す。その隙に、着地。砂が空中に舞う。雨のように降り注いでくる。背後で背を打ち付ける分身。砲身を下ろす本体。睨み付けた先で不適に笑む総に向けて、僕は走り出す。砂の雨を受けることはない。イメージを得た音速のスピードで砂に触れる前に潜り抜ける。

手には、大口径のマグナム。素早く狙いをつける。

「チツ、早くなつたな！」

忌々しそうな舌打ちにもかかわらず、同様のものを練り上げる総。それは戦闘における自信の表れか。

銃声は同時だった。

一発目の弾丸は二人の頬をかすめる。続いて放たれた二発目。総は、身をかがめてやり過ぐす。僕は足の裏へ力を集中させ、大きく舞い上がった。僕の姿が総の視界から消える。総が頭上を見上げ、迷わず銃口を向けてきた。そのときにはすでに、もう一丁のマグナムが左手にも用意されている。マグナムを握り締めた両手を天に掲げ、空中を舞う獲物を視界に捕らえる。

引き金は、引かせない。

当たり前の行動に対して、人は当たり前の行動で応えようとする。それは常識に縛られた証拠。空中に舞い上がる敵は、逃げ場を失う。身動きの取れない空中では、狙いを定めやすい。それはなぜか。

重力があるから。

重力があるから、落ちていく物体に対して狙いを定めやすくなる。結果、それを期待してしまう。だから、無防備にも、立ち止まり、

正確な射撃をしようとする。

「だが、これは夢なんだ！」

ビルの三十階に相当する高さまで飛ぶ。ビルの側面。窓ガラスに両足をびったりとはりつけ、そこから、上空を今まさに見上げんとする総に向かつて、イメージを加速させた。

「目には目を、歯には――」

巨大な砲身。まがまがしい鋼の巨躯。構造も理解できない迫撃砲を二門。映画でしか見たことのないそれを、あえて創造。現実ではできないことも、夢の中なら、創造可能。構造なんて無視。設計図なんて無視。機構も無視。それでも、砲弾は出る。それが、自覚夢。自分の思い描いたものがそのまま反映される世界だ。

「歯を！」

二門の迫撃砲が交互に火を噴いた。轟音とともに高速ではき出された砲弾は、唸りを上げて総に接近する。総は二丁のマグナムを地面へ捨てて走り出す。

着弾。

総の背後数メートルの位置に大きな穴がうがたれる。アスファルトを跳ね上げ、噴煙を撒き散らす。

続けて、着弾。

またも総の背後。どうやら、総のスピードのほう为上回っているようだ。爆風をもともしないのは、そのスピードゆえだろう。

着弾。

次弾装填の必要のない迫撃砲が、連続砲撃を可能にする。二門の迫撃砲が、信じられない速度で、交互にオレンジ色の死の弾を吐き出している。たとえるなら超大型のマシンガン。一人を簡単に吹き飛ばせる威力が、総の背後で立て続けに披露される。

着弾。

爆発。

砲撃。

着弾。

爆発。

砲撃。

総の通った軌跡には確実に砲弾の破壊痕。砲弾は、総に沿って街頭の木をなぎ倒し、信号を破壊する。車を爆発させ、外壁を突き破り、デイスブレイを粉々にする。

総は逃げの一手だ。

途中、雅のすぐそばを通り抜けたときに、砲撃をいったん中断しようかと迷ったが、雅の強い眼光によってその懸念は払拭された。そして、雅に直撃かと思われた砲弾は、簡単にその進行方向を捻じ曲げられた。まるで雅の周囲に不可視の障壁でも存在するかのよう

に、雅の手前一メートル付近で方向転換したのだ。当の雅は表情一つ変えずに、総を追撃する砲弾の行方を視界に捕らえ続ける。総は、なおも迫撃砲の魔の手から身を捌き続けるが、次第にインパクトの距離が、総の体に近づいてきている。

いける。

迫撃砲の掃射をそのままに、ビルの外壁を駆け下りた。空中を落下していくように、垂直に駆け下りる。

だが、直後。

背後が爆発し、背中が業火で焼かれた。直前まで、総の逃げ惑うさまを傍観していた場所。絶対的な優勢に立っていると安心していた場所が、今はない。窓ガラスが、僕の体とともに、地面へと落下する。背中がひどく熱い。白いシャツが燃え上がっているようだった。実際に燃えていたわけではない。だとすれば、火傷だろうか。背中全体が今にも発火しそうだ。ひりひりなどという生易しい痛みではない。皮膚を強引にはがしかかっているような、気絶しそうな痛み。

意識が、もって行かれそうだった。

歯を食いしばる。ここでの痛みは、幻想なのだ。傷を負ってしまったのは、まだ現実をなぞっている証だ。急いで強烈な痛みを消しにかかる。脳をフル回転させる。夢を夢であると認識させる。地面が

迫る。ビルのガラスには落下する僕の姿が映し出されている。痛みはもう消えた。風を切る音が、落下速度を物語る。現実なら、絶対に助かるまい。

僕は、体勢を変える。背中を焼いた場所の窓から、総が顔を出して楽しそうに笑っていた。追撃するように、バズーカを窓から続けざまに二発撃ってくる。重力加速度を得たミサイルが、まっすぐ向かってくる。想像もつかない速度での落下。迫り来る地面。追いかけてくるミサイル。対処しなくてはならないのは三つ。

速度か、地面か、ミサイルか。

イメージできるか。いや、するしかない。アスファルトの黒が広がる。ミサイルが牙をむく。金切り声。風の、ミサイルの、それらすべての音は、死へとつながる音。逃げ道は。危険に一つ一つ対処できない。すべてを帳消しにするイメージは…。

「これだ！」

右腕を隣のビルに伸ばす。なるべく高い位置に向けて。ビルに向かい合う体勢に体を入れ替え、袖口に矢じりをイメージ。

「いけえええええっ！」

袖口から射出音。手首に巻いたベルト。ベルトに装着した矢、ベルトに巻きつけられたワイヤー。映画で見たあの装備。颯爽とピンチを切り抜けるあの道具。イメージするのはそれだ。

声が機構の発現となり、矢はあつという間に隣のビルの壁面に取り付く。しっかりとその身を固定。やがて、ワイヤーが限界に達し、体がその衝撃を受ける。矢を支点として弧を描く運動に入る。ひじが伸びきり、痛みが走る。腕の中で何かが切れる音がした。靱帯を痛めたか。それとも骨か。しかし、僕はそれをイメージで押さえ込むと、運動の行方を予測した。

大きな振り子と化した僕は、地面すれすれをかすめて、道路を横断する。

これで、ミサイルと、地面への衝突は回避できた。後は体勢を立て直すだけ。と、安心したのもつかの間、ミサイルは地面に激突

するはずが、生き物のように方向を転換した。おそらく、総のイメージによるものだろう。急ぎ矢じりを切り離し、隣のビルの側面に着地する。僕の体重と速度が加わって、ビルの壁面にひびが入った。僕は背後から追ってくるミサイルの双刃を感じて、視界には捕らえずにビルを駆け上った。

空に向かって駆け上がる。それは空へ落ちていく感覚と見紛う。ビルの終端を目に映す。目指すは最上階。やはりビルへは衝突せず、方向転換するミサイル。加え、イメージも加わってか、加速燃料の増加により、より推進力を肥大させ、急接近するミサイル。尻に火がつくとは、まさにこのことか。足が悲鳴を上げている。早く、もっと早く。走れ、もっと走れ。死に追いつかれないように。

僕が足を一步踏み出すたびに、ガラスにひびが入るようになる。早く、もっと早く走れるはずだ。速度はもはや、風。ビルの側面をなめるつむじ風だ。空が近く感じた。空に落ちていくのか、空が落ちてくるのか。

僕は最上階の縁をいった。コンクリートが破砕する音を置き去りにして、高空へ。ズームアウトしていくビルの最上階をはるか上から見渡す。ビルの側面すれすれを通過するミサイルが見える。コンクリートの破砕音から一秒も経過しないうちに、間髪いれず最上階を離れる二発。

来る。

眼下には、発展した大都市。ビルの群れ。両手に握り締めるは、刀。時代錯誤もはなはだし。上昇力と、重力がプラスマイナスゼロになり、すぐさま体が上昇から落下へ。

激突する。

刀を上段に構え、一回転するつもりで振り下ろす。そのきらめきには確かな手ごたえがあった。敵を認識できなくなった二発のミサイルは、大気圏外へ脱出するロケットのようだ。やがて、花火のようには爆発が起こり、ミサイルの破片がばらと飛散した。ビルの屋上に空気のクッションをイメージして着地。刀を地面に突き刺し

て、追っ手を索敵する。

迫撃砲で迫った直後の足元からの爆発。どうやら、開戦直後に羽交い絞めしてきた総の分身だったようだ。迫撃砲をぎりぎりでかわす様子を見させて、倒れていた分身から意識をそらす。わざとピンチに陥ったように見させることで、それはいとも簡単に達成された。

「油断できるほど」

そう、それは明らかに油断だった。

「強くはないだろ？ キツチュ」

隣のビルの屋上からその声は聞こえてきた。

「それとも、あえてそうしているのか？」

隣のビルの屋上から見下ろす総を、僕はにらみつけた。自分自身の怠慢がその眼光を作らせる。敵に向けてではない、ふがいない自分に向けて。

「だとしたら」

声は、今見上げているビルの屋上からではなく、隣り合うもうひとつのビルの屋上からだった。

「傲慢だな」

索敵を蔽に。気配を探る。

「不遜だ」

今度は別方向からの声。僕の立つビル。屋上へと続くドアを開けて一人が出てくる。

「いや、無謀だ」

別のビルの屋上。耳元で話されているように声が届いてくる。

「無知だろ」

周囲に聳え立つビルそれぞれに、まったく同じ分身が現れる。

「無自覚すぎる」

見上げ、あるいは見下ろし、各々好き勝手な言葉を投げかける。

「彼我の戦力差を知れよ」

周囲をぐるりと囲まれる。索敵なんて言葉は意味を持たなかった。もはやそれすらする必要はない。ビルというビルの屋上に敵がいた。

不適な嘲笑をたたえ、四面を封じられた僕を見下している。

「窮鼠猫を囓む、って故事があるだろ？」

「……」

「あれは、噛んだところで、結局、殺されることには変わりがない
ってという意味だ。つまり、反撃をするだけ無駄だってことだ」

「楽しそうに自らの極論を展開する。」

「総…僕は」

僕の声が聞こえていないのか、なおも続ける。

「ただ、結局殺されるからといってあきらめるのは良くないな。抵抗して、力の差を痛感して、絶対的な死を自覚してから死ぬのが、殺される側としての相応の覚悟だと、俺は考える」

「僕は…」

「残酷だが、それがなければ人は殺せない。たとえお前がまがい物であろうとも、だ。もちろん、現実世界の俺は人を殺したことなんかない。だが、ここで行われているのは間違いなく殺し合いだ。覚悟は決めてる。俺はお前の死を背負って生きていく。だからこそ、お前の凄惨な死をこの目に焼き付けなければならない」

「…僕は…」

「それが、母を救うために支払わなければいけない代償だ」

「……」

「感謝するよ。これで母を、家族を救える」

「総！」

僕は声を荒げた。その声の調子に、ビルというビルで腹を抱えて笑っていた分身達が、いつせいに僕を視界の真ん中に捕らえた。

「僕が死ぬことで、総が力を得て、それで総の家族が救えるなら、僕はそれでいいと思った」

屋上を冷たい風が駆け抜けていく。

「僕の死に涙を流してくれる人なんていない。僕を生に執着させるものもない。死ぬことは、自分の存在がすべての人の記憶から消去されてしまうことは、それほど怖いことだとも思えなかった」

いつの間にか、雅が僕のすぐそばに立っていた。

第二十八話・「…僕は」（後書き）

興味を持ってくださいました方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張りますので、よろしく願います。評価、
感想、栄養になります。

第二十九話・「世界が一番好きなんだ！」

「自分を哀れだと思った。自分の哀れさに涙を流したのは生まれて初めてだった。」

今でも、自分自身の哀れさを強く感じる。存在することの希薄さを感じる。生きていても、死んでいても、その価値は同義なのではないか。厭世的になる感情の渦。体中から噴出してくる黒い倦怠感。漆黒の、鈍重な闇に飲み込まれそうになる。

「でも、その涙を拭いてくれた人がいた。自分の悲しみを後回しにして、背中を押してくれた人がいた。そして……」

僕は、すぐそばでたたずむ雅を見つめた。

「何よりも、愛していると言ってくれた人がいた」

今にも崩れ落ちそうな心の中にある、一筋の光。

「そして、失いたくなかったものに気がついたから」

たった一人の家族。母が愛した父の存在。

「だから、素直に死んでやる気はない。そう言いたいのか？」

僕は、うなづかず総を見つめ続けた。

「その目がすべてを物語っているようだ。だったら、この殺し合いは……」

「殺し合いじゃない」

僕はこぶしを握り締めた。足に力を入れた。この場にしっかり踏みとどまっていられるように。意思をしっかりと持っていられるように。責任に押しつぶされてしまわないように。

「僕たちは、助け合わなくてはいけない」

支えきれないほどの重圧が、今このとき、僕の双肩にのしかかった。

「総……何を言っているの？」

吟味するような瞳で僕の迷いを見ていた雅の眉間が、困惑のしわを刻んだ。

「あなたは、何を言っているの？」

「……」

決して会話に口を挟んでこなかった雅の介入に、注視する総。何かを言いたそうな口をつぐんで、雅と僕の会話の行方を探ろうとする。

「そのままの意味だよ」

「…分からないわ。その言葉が。助け合う？ その行動に意味はない」

「補完することで、人間が本当の人間としての力を得られる。それは、世の中を動かすほどの力なのかもしれない。世界新記録や、大発明を成し遂げられる、偉大なものかもしれない」

「そう。そして、その力をもってして、あなたたち人間にとっての真価が試される。私がそれを見届けて、この星にとって本当に必要なものを、この星を救うに足る存在かを見極める。そのための補完」

僕は、雅の両肩に手を乗せた。

「そうじゃない」

気でも狂ってしまったのか、と言わんばかりの表情で僕を見つめる雅。

「そうじゃないんだ」

僕は周りを囲む総を気にも留めず、雅に優しく迫った。

「補完をすることと引き換えに、何かを犠牲にする。それは当然のことなのかもしれない。何かを犠牲にすることによって何かを得ることは、当然のように聞こえる。でも、それは間違いなんだと思う。僕は、いろいろなものを失った。かけがえのないもの、二度と戻らないもの…。でも、得られるものなどなかった」

母の姿が僕の脳裏に立ち上がる。

「何かを犠牲にしなければ、何かを得られないと、考えてしまっているから…失うことに、犠牲にすることに納得してしまっているんだ。手に入れるためには仕方がない、そう思い込むことによって、

自分に対する言い訳を考えている」

「…詭弁だな」

静寂に一言。平静だが、怨嗟すら加わった総の言葉。

「…分からないわ。補完の力は、総が思っている以上に強大なものよ。理想を簡単に成し遂げることでできる力を得ることができる。」

人々がうらやんでやまない、最高の力を手にすることができるよう歴史に名を残すことだって…」

雅は首を振って僕の意味を否定しようとする。

「なら、雅…。そうだとするなら、雅…」

僕は溢れ出そうになる感情をせき止める。

「母さんを取り戻すことができるのか？」

僕は世界中の誰よりも、母が大好きだった。一番近くにくれてくれた人である母。身体的な距離だけではない。その心と心の距離においても、最も近くにくれてくれた人だった。

「僕が補完することで、母は帰ってくるのか？ 死んでしまった母を取り戻すことができるのか？」

雅は取り乱していたのを忘れ、押し黙った。総もまた、押し黙っている。

「雅…補完は、君が思っているほど万能ではないんだ。人間は、たとえ補完しても、不完全なままなんだよ」

僕は諭すように優しく語りかけた。

「…確かに、一度失われてしまったものを取り戻すことはできないわ。私のこの体は、一度失われたものの情報を元にコピーしたものだから。失われてしまったもの、そのものではない」

僕の瞳は雅を捕らえて離さない。

「でも、総…あなたは自分が言っている言葉の意味がまるで分かっていない」

雅の瞳が強烈な光をとす。それは、相手を射殺すことのできる強さを持った光。間近で目を合わせる僕は、その瞳だけで気圧されてしまう。

「人の可能性を否定することは、人の存在意義を否定すること。補完を否定することは、世界を、私を否定することなのよ。私は、私を作り出したすべての生物の中でもっとも可能性を秘めた生物として、あなたたち人間を指定した。補完することで可能性を見出せないのなら、この行為すら無意味だわ」

「そうなんだ。だから、僕たちは争ってはいけないんだと思う」
「そう…ね」

雅の力が抜けていく。僕の意志を否定する気力が抜けていく。

「争うことはもう無意味ね。最後の希望だったのよ。あなたたち人間にかけることが…。傷を負ったこの星を、私を救う最善の方法は…」

「…雅？」

力の抜けた雅にまわりつく嫌な雰囲気。

「もう、駄目なのね。総…」

目を伏せてくぐもった声を出す。表情が読み取れない分、その異様な声が威圧となって、ひしひしと伝わってくる。

「希望が潰えた以上、もう一度世界を白紙に戻さないと駄目なのね。あの氷河期のように」

「な…」

僕の声と、総の声が重なった。声に込められた驚愕すら重なっていた。

「愛しているのに…。こんなにも、総を愛しているのに…」

肩を震わせ、悲しみに震える。しかし、声の質が変わることはなかった。裏切られたことに対する、怨嗟。

「それなら、一度白紙に戻すなら」

信じていたもの、愛していたものに裏切られたという傷心が、今、極限に高まりつつある。

「いつそ　私があなたを」

そのとき傍観を決め込んでいた総から怒声があがる。

「待て！　雅！　俺はまだ人間の可能性をあきらめてはいない！

補完することで、俺はお前を救ってやることができる！ まがい物の言うことなど、信じるな！」

「そうじゃない、雅！ 僕は、僕が言いたいのは！」

総が隣のビルから跳躍した。僕もあわてて雅を制止しようとするが、雅を捉えることはできなかった。手を伸ばした体勢のまま、僕は着地してきた総と向かい合う。

「どういうつもりだ！」

胸倉をつかんでくる。顔は僕と同じものとは思えない、怒りで満ち満ちている。

「お前は…！ 自分が何をしたのか分かっているのか！」

「…分かっている」

「殺されるぞ」

「させない」

総は胸倉をつかむ手を離して、僕を突き放した。

「人が補完を成し遂げなければ、完全になれない存在だなんて、僕は認めない。人は、僕たちは、それぞれの世界をそれぞれの力で何とかしなければいけないんだ！ 補完に頼ることなく！ 僕は、それを雅に…この世界に伝えなければならぬ。間違っているんだ」

「詭弁ばかりのうのうと…！」

「詭弁かもしれない。でも！ まだそれを詭弁だと、証明する行動をしていない！ それを、僕はこれから証明する。雅を止める。止めてみせる」

僕は苦虫を噛み潰したような総に、強い意志の言葉をぶつける。

「僕は、雅が」

だが、言葉の最後は強風によってさえぎられた。消失し、見失った雅が空中に浮遊し、こちらに手のひらを向けている。

生暖かい風が、頬を掠めた時、僕は自分の死が迫っていることを直感した。印象的に残っていたのは、彼女の凍てつくような無表情と、死を宣告する、長く細い指ときれいな手のひらだった。

巨大な衝撃がこの夢の世界の建造物を簡単に吹き飛ばした。衝撃

波だったのか、爆発だったのか、いずれにせよ、生暖かい風を押し出して襲ってきたのは、破壊の波動だった。ビルの窓ガラスは粉碎され、芥子粒が彼方へと飛ばされた。ビルを形成していたコンクリートも、窓枠も、その形態を維持することもできずにぼろぼろと崩れ去って、隣のビルにのしかかる。半身を失ったビルには、もはや自重を支えるだけの力は存在していなかった。ガラガラと瓦礫を吐き出して倒壊していく。噴煙が四方八方を覆っていく。

僕はそれになすすべなく飲まれていくしかなかった。とっさに、イメージした強固な盾も鎧も　この状況下でイメージできたことに驚きだが　彼女の圧倒的な力の前には無きにも等しかった。

これが、雅。これが、星の力。

粉塵で周囲を塞がれる。風切る音で落下速度が感じられる。何の抵抗もしなければ、このまま僕は地面に激突するだろう。夢の中であつても、精神の死は肉体の死を意味する。死を理解した脳は、その指令を体にも伝えるだろう。

活動の停止。死の指令。

僕は、死ぬ。

それは僕を取り巻く全てのものからの別れ。悲しむ必要もない。もちろん悲しんでもらう必要もない。篠崎総は、誰の記憶からも消え去ってしまうのだから…。

頑張れ。

和泉の声が聞こえた気がした。

命尽きるまで。

そう言っただけで上がった手の力強さを思い出した。

総がいなくなっても、私は悲しむ暇もないんだから。悲しむこともできないんだから。

笑いがこぼれそうになった。

「和泉、君はそこにいるのかな」
声が聞こえたからそう感じた。

和泉は僕の近くにいて、涙をこらえて僕の生還を祈っている。

自分の悲しみ、辛さをこらえて、応援をしてくれた和泉。

彼女の言った通り、僕は何も分かっていない。自分のことばかりで、他人を思いやることもできなかった。父に当たり、和泉に冷たくし…果ては、雅に甘えた。辛いのは僕だけではないのに。僕が世界で一番辛いと思い込んでいた。世界である雅ですら苦しんでいたというのに。

「雅…」

だから。

「愛してる！」

だから僕は。

「君を救ってみせる！」

胸いっぱい広がった愛の衝動がみるみるうちに溢れていった。

「僕は君が、世界で一番、いや」

雅という女性を、この世界そのものである、この星そのものである君を。

「世界が一番好きなんだ！」

起死回生のイメージ。

瓦礫を吹き飛ばす。周囲のすべてを。この体にまわりつくすべてを吹き飛ばすイメージ。瓦礫が僕におびえるかのように遠くへと吹き飛んでいく。視界がクリアになり、雅の姿が角度の関係でビルの陰に隠れる様まではつきり見えた。

だが、それまでだった。

膨大なイメージの作成に全力を注いだ結果だった。人のイメージにも限界はある。脳の能力には限界がある。人の思考回路では、百の難題を同時に解決することなど不可能。短時間になるとそれは不可能をさらに二乗するくらいに不可能である。僕も、その例外にもれることはできなかった。瓦礫を取り除くイメージで精一杯。

もう地面は目の前。

僕は、瓦礫のなくなった地面へ仰向けに激突した。

「……おい」

僕の声がした。

「夢の中でまで寝るな。夢から抜け出せなくなる」

僕であって、僕でない声。夢でつながったもうひとつの世界にいる僕の声だった。

「目を開ける」

「……総？」

地面に目を落とすと、そこは瓦礫を払拭したむき出しの地面ではなく、特殊な緩衝材になっていた。

「……これは？」

体を起こして総を見る。総は、ばつが悪そうに雅のいるであろう空に視線をくれていた。

「雅は世界の白紙化を望んでいるんだ。お前が死んで俺が補完を完了してもそれは変わらない」

雅の索敵を止めて振り向く。従うようにコートの裾が揺れた。

「ならば、お前が生きていることを利用しない手はないだろ」

「……」

「雅は……星はお前を愛したんだ。お前をその手で殺したいと思うことは、異常でも理解できると思わないか」

「だから、僕を助けた、と？ 僕が殺されない限り、雅は僕たちの夢から出て行かない、と考えたから？」

鼻を鳴らしてそれを肯定する。よくできた、と言わんばかりだった。

「俺は救うべき人がいる。世界を、大事な人を消し去らせるわけにはいかない。補完は、その後でもいい」

雅は交差点の真ん中で立ち止まり、こちらを見ている。何度も夢の中で会った、優しい瞳は影を潜めている。

「……分かった。でも」

僕は総の背中に従う。

「僕には補完の意思はない。雅を説得して、そして、世界も救う。総の母親だって救えるはずだ。自分たちの世界だけが救われればいい

いと…そういうのは嫌なんだ！ …互いに出来ることを、互いのいる場所ですべきなんだ！」

僕の言葉を聞いて立ち止まった総が、ビルの上でそうしたように再び胸倉をつかんでくる。顔と顔が限界まで近づく。僕はその総の迫力に負けじと眉毛に力をこめた。

「まだ、全力じゃない！ 人はこんなものじゃない！ できる限界までしていない！ 僕も、総も！」

しばらく火花を散らした後、総は僕を解放した。

「…考えておく」

「総…」

「ついて来い。人の力が本当に試される」

総の背中は頼もしかった。その背中を持っているのが、もう一人の僕であるということ。

そんなことが、自分のことのようにうれしく感じられた。

第二十九話・「世界が一番好きなんだ！」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。これからも頑張りますので、よろしく願います。評価、
感想、栄養になります。

第三十話・「愛は、どうやって確かめるの？」

「試される…篠崎総の本当の力が」

総は雅の放つ無言のプレッシャーに向かっていく。

僕も、それに続く。

交差点の中心にいる雅の周囲にはありえない強風が渦巻いている。極小のハリケーン。しかし、その威力はとてつもない。凝縮された圧倒的な風力が、僕と総の行く手を阻もうと猛威をふるう。あと数メートル進めば、そこはすでに戦場だ。

ばたばたとなびくコートを脱ぎ捨てた総は、動きやすい服装をイメージしたようだった。まばたきの合間に、総の体は黒いジーンズと、ライダーズジャケットにまとわれていた。僕もそれに習って服装を変える。破れてしまった制服はむき出しの箇所が多く、とても服とは言いがたかったからだ。

「そういうファッションは、俺には似合わないと思ったんだがな。なかなか似合っているじゃないか」

ベージュのフレアパンツに、同じくベージュのジャケット。

「そういう総こそ」

軽口をたたいてくる総に、気遣いのようなものが見えた気がした。背後の僕をちらりと肩越しに見て、微笑みかけてくる。だから、僕も素直にそれに応じることが出来た。

本来、僕たちはこういう関係が望ましいのではないだろうか。なまじ補完という奇跡が目の前にぶら下がっているために、互いを殺しあうことに異を唱えない。なぜなら、補完は劇的な高みへと自身を覚醒できる奇跡のシステム。たった一度だけ、夢の中での一対一の戦争を乗り切るだけで、それが得られるのだから。

それゆえに、今の僕と総との関係は不思議だった。成り行き上仕方なかったとしても、この関係は心地良い。利害が一致している間だけの契約であつてもだ。

…もし、出来るのであれば、ずっとこの関係が続いてほしい、僕は切にそう願う。

「…ッ！」

言うが早いか、総が暴風域に踏み込んだ。暴風域の中で信号がひしゃげているのが見えた。足の裏に力を集中させるイメージ。走り幅跳びの要領だ。アスファルトに足がめり込む。総はすでに雅に肉薄している。総のイメージは的確だった。僕と同じイメージを武器の生成と同時に行っていた。対して僕は、吹き荒れる風に呼吸を失い、視界もおぼつかなかった。目がつぶれそうだ。それでも目を開けて視界に二人を捕らえる。

残り一秒とかならない距離で、その攻防は繰り広げられていた。

微動だにしない嵐の中心、雅。超高速で飛び出した全身凶器、総。繰り出した槍の矛先は、間違いなく雅の心臓に狙いを定めていた。容赦のない、一撃必殺。常人には反応できない速度で、それは打ち出された。

雅は身を捌いて難を脱する。しなやかな動きは優雅ですらあり、勝利を確信しているような余裕までも感じられた。総はそれを予期していたのか、口の端を上げると、開いた手のひらに銃を作り出す。「零距离で」

撃てば風の影響は受けない。飛び道具を牽制に用いなかったのは、風の影響で弾道が逸れることを考慮してだ。総は捌いた体勢のままの雅のこめかみに、銃を突きつける。

僕は叫んだ。

雅の死に対して？

総は、動きを止められていた。指をかけた引き金がぴくりとも動かない。

「やああああめろおおおおおっ！」

僕が叫んだのは、総の危険を案じてだった。イメージするのは、両手持ちの大刀。振り下ろした先にもちろん雅は存在していない。どこかに瞬間移動したはずだ。暴風も同時に消え去り、総も金縛り

から解放されたようだった。

「雅は？」

僕は周囲を見回す。道路の先、僕が第一步を踏み込んだ地点に雅はいる。

「乗れ！」

僕の背後で大きな噴射音がした。雅はこちらに向けて優雅に手のひらをかざす。ビルを破壊したあの衝撃波だろうか。地震のように大地が揺れる。僕は総が創造した戦闘機の後部座席へ乗り込む。キヤノピーが僕の着席と同時に閉じられ、閉じられたかと思うと戦闘機は急加速。その加速に僕は座席に押し付けられた。空中でホバリングしていた戦闘機が、ジェット燃料を爆発させ大空へ飛び立つ。それを追うように、雅の手のひらから、数条の光線が放たれる。神々しく、それでいて音速。まるで生き物のように曲線を描きながら向かってくる。

大空は、まるで巨大な蒼いキャンバスだ。

「追ってくる！」

僕が叫べば、

「分かっている！」

総が怒鳴り散らす。

「方法は！」

僕が叫び問えば、

「黙ってる！」

総がまた怒鳴り散らす。

全部で三本。意思があるのか、二手に分かれた光線は、交互に戦闘機に迫ってくる。疲れ知らず、燃料不足の心配のない戦闘機であるが、イメージ行使の精神疲労は蓄積していくばかり。総の額には大粒の汗が光る。

光線は死の矢。総の絶妙のコントロールが冴え渡る。機体をロールして一本をかわす。続いてもう一本も、反対側へのロールでかわす。そのぎりぎりの妙技に、両翼には焦げた跡が残る。

総の汗は、額から滑り落ち、あごに達する。

最後の一本は、機体の下方から突撃してきた。

機体を百八十度ロールさせて、空を隠す。キャノピーからは、乱立したビル天边がはつきりと確認できた。その隙間を縫うように光線が直線となる。地面にキャノピーを向けたまま、総は操縦桿を手前に倒し、機体を起こす。すると、機体は、地面へと突き刺さるべく、急降下を始めた。

僕は口内に溜まったつばを飲み込んだ。

真正面から、光線と対峙していることになる。総は、ペダルを踏んでさらに加速をかけた。

「おい！」

僕は手前の操縦席に手をかける。自殺行為だ、と総に進言するためだ。

「いいか、黙って聞け！」

総が冷静な口調で一喝する。一方、額は汗でびっしょりだ。

「これから雅に特攻する」

「っな……！」

「直前まで迫って、それからミサイルで目くらまし！」

し、のタイミングで操縦桿を横に倒す。螺旋の軌道を描いて帯を巻き込んでいく。光の帯が、キャノピーの上をかすめている。もはやジェットコースターの比ではない。絶対的な消滅の光がキャノピーのすぐ上を駆け抜けていく。

加えてこの重力加速度は尋常ではない。体がつぶれてしまいそうだ。

「そして、お前は雅の元へ行け」

光線の末端を通り過ぎる。どうやら、最後の光線も乗り切ったようだった。

「俺は、俺には　それが精一杯だ」

総が頭を振って前方に目を凝らす。額に付着した汗や、髪の毛にしみこんだ汗が、コックピットに撒き散らされる。

「いいか。ミサイルを撃つたら上昇してやり過ごさずに、雅をかすめて飛ぶ。お前は、その隙にキャノピーから飛び出せ」

「飛び出すって…」

「イメージしろ。何でもいい、とにかくお前が雅をどうにかするんだ」

直滑降した戦闘機が、ビルの谷間を抜け、地面すれすれをなめるようにして飛んでいく。

「…くそ、めまいがする。夢の中だっというのにな」

中央交差点を抜けると、振り切ったはずの光の帯が、その左右の道路から戦闘機が通過した道路へと合流してきた。

「前門の虎、後門の狼か。いや…！」

前方から迫る、螺旋飛行でかわした三本目の帯。

「そんなものじゃないな、これは…」

総の盛大な悪態が聞こえる。

「四面…楚歌」

周囲を取り囲んだ楚の軍勢が、歌を歌って戦意を失わせたという故事からなる状況。輝く光芒に囲まれている劣勢を、僕は嘆いた。正面から来る帯は、さらに細かい帯に分裂し、四方八方から僕たちの乗る戦闘機に狙いを定める。

「言いて妙だな！」

唇を舐める総。

「この光のカーテンの向こうに、雅がいる…」

つぶやいた僕は、ミサイルをイメージする。戦闘機の両翼に抱える、大量のミサイルを。

「タイミングを間違えるなよ。発射は、カーテンを抜けてからだ。それでなければ、すべて雅の直前で迎撃される。それでは、煙幕にならないからな！」

僕はその言葉を頭に叩き込みながら、イメージを続行する。

「それまでは俺に任せろ。このくらいできないで」

総の声が、

「母さんを守るだろうか…」
僕のイメージに力を与える。

「いや!」

叫喚。

「無い!」

反語。キャノピーすべてが光に包まれていく。

僕は目を閉じた。イメージに集中した。外部の情報、状況の変化、それらすべてを遮断した。今は、自分に課せられたイメージを実行するだけ。完璧に、より完璧に…。

「おおああああああああつ!」

暗黒、そして、静寂。

イメージへの没頭。今は自分の責任を果たすだけ。総の信頼にこたえるだけ。そして、信じるだけ。

僕はゆつくりと目を開けた。イメージは完全だ。飛び出す準備も出来た。

「…ハア…ハア…」

総の息遣いが聞こえる。太陽光線がまぶしい。ほんの数秒目をつぶっていただけなのに、こんなにもまぶしく感じられる。

「…準備はいいか?」

見れば、戦闘機はもう満身創痍だ。飛んでいることすら不思議だ。両翼は真っ黒こげで、キャノピーには亀裂が走っている。鉄板がめくれ上がり、ばたばたと悲鳴を上げている。後方の状況は確認できないが、今飛んでいられるのは、総のイメージによるものだろう。

「できてる」

「いくぞ」

「ああ」

ミサイルを両翼、下腹部…表面積という言葉がカバーする範囲すべてに設置する。遠くには、小さな雅の姿。

「…これだけあれば十分だな」

呼吸を整える。

「…全弾、発射」

総は発射ボタンを押し込んだ。総の発射イメージと、僕のミサイルがリンクした。すべてのミサイルが真っ白な尾を引いて、雅へと殺到した。戦闘機の進行方向は発射したミサイルの白い尻尾で埋め尽くされる。間髪いれず、雅がミサイルを迎撃したらしい爆炎が、遅れて爆音が耳に届く。最高速でもくもくとあがる爆炎に突入していく戦闘機。視界は真っ暗闇、ひとたび外へ出れば、高温に肌は焼け爛れるだろう。

「行ってくる」

僕がイメージしたのは、宇宙服だった。高温と衝撃に耐えるイメージは、それしか浮かばなかった。

「想像力が貧困だ」

総は最後まで悪態をついた。右手をふらふらと振って見せ、僕を送り出した。

キャノピーが吹き飛ぶ。緊急脱出装置を起動させた。座席が空中へ放り出され、案の定、真っ黒な噴煙にまかれ、真っ赤な炎に宇宙服は焼かれた。戦闘機の通過に少し遅れて、疾風が煙を除去する。僕は何とか着地して、煙の向こうから姿を現した雅を見据えた。動きにくい宇宙服を消失させる。

「雅…」

僕と雅の距離は十メートル程度。イメージすれば、一秒とかからない距離。話すだけなら、大声を上げるまでも無い。

「犠牲にしてまで、自分の死に抗うの？」

「犠牲？」

雅は目を伏せる。

「まさか」

僕が飛び去った戦闘機の軌跡を追った瞬間、戦闘機はコントロールを失っていた。エンジンからは、制御不能を示す黒煙。総は、最後の最後まで、イメージだけで飛ばしていたのだ。

「……」

声が出ない。人はこういうとき、どうすることも出来ないのだと思いついた。

「…あ、あ…」

間拔けな声が、口からこぼれ出た。

戦闘機がY字路を曲がってまもなく、ビルの谷間から煙が立ち昇った。数秒後に、轟音。

僕は呆然と眺めることしか出来なかった。

悲しみなんて出てこなかった。

涙も出てこなかった。

足元から崩れ落ちることも、叫ぶことも出来なかった。

本当の悲劇に直面したとき、人は何の対処方法も無いのだと知った。目に映った光景を、ただただ読み取る機械にしかねないと知った。そして、遅れて届いた爆音のように訪れる、悲しみ。

あの時と同じ。

世界で一番愛していた母が、自殺したときと同じ。

「…発想が、貧困なんだってさ…」

母の自殺した朝の風景がプレイバックする。

「発想が貧困なんだってさ…あいつ、そんなこと言ってた…」

悲しみは後から訪れ、頬を濡らす。出棺のときの僕も、今の僕も。

「そう、言ってたんだよ…雅…」

信じられた。信頼しあえた。ほんのわずかだが、意思を通じ合わせる事が出来た。信頼を共有した時間は、敵対した時間よりも圧倒的に短いはずなのに、なのに、なぜこれほどまでに胸が張り裂けそうなのか。

「……て」

僕は、アスファルトに崩れ落ちた。両膝が自重を支えられない。

前のめりになって、うずくまって、大声で泣く。

夢から覚めたとき、何気なく頬に手をあてると、涙のあとがついていることがある。夢の内容は忘れてしまっているけれど、泣いていたのだ。夢の中でも、現実の世界でも。寝ているはずの現実の僕は、

今、泣いているのだろうか。

「……そ……や……て」

か細い声が聞こえてくる。

「そう……や……」

声量が大きくなる。

「やめて……総」

そのあまりにも場違いな声は、雅のものだった。僕は、情けない自分の姿などかまいもせずに、涙でぐしゃぐしゃの顔を雅に向けた。雅は、顔面を両手で押さえている。

「やめて……私……」

雅が我を失っているように見えた。僕は涙で濡れてしまった顔を袖でぬぐい、溢れてしまう悲しみの雫を抑えると、雅に歩み寄る。今の彼女は、この世のすべてを生み出した地球という存在よりも、痛みに耐えるただの女の子にしか見えなかった。

一步一步、雅に近付いていくたびに、その痛みまでもが伝わってくるようだった。

「……終わるのに、すべて終わるはずなのに、どうしてこんなにも痛い……」

「……雅？」

「総が、悲しむから！　あなたが、総の気持ち、変わってしまうから。愛だけ……あった。私を求める愛だけがあった。それが、悲しみと同時に、あなたの思いが……消えてしまう……そ、して、あなたの……大切な人……自殺し……た、光景……わた、し……痛く……て……」

文章になっていない、言葉の羅列。

「入って……きた。痛いほどに分かる、総の気持ち……私……だから」
錯乱。

「……早く　消さないと」

雅の右の手のひらが、歩み寄ってきた僕の顔面に突き出される。
「でないと、私が……この星が、手遅れになる」

周辺の空気の温度が上昇していくのが分かる。

「もう一度、白紙に戻して、それから作り直す。今度は間違わない。完全なものを…」

ミサイルで粉々になった道路の破片が、強烈な磁場によって震えだす。

「人では、補完では…無理。だから…」

陽炎が発生し、いびつに景色がゆがむ。

「…だから、この痛みも…愛も、白紙に…」

「人は…そんなものじゃないよ…」

震えていた石が、その場で浮いていた。

「それは、雅…君が一番知っていることだよ」

「分からないわ」

「僕は雅が、この世界が好きだ。好きだから守りたいんだ」

雅の手のひらが震える。肩が震える。

「愛しているから、守りたいんだ」

素直な言葉。どんなフィルターでも通ってしまうぐらいの、透明な意思。純粹な気持ち。

「愛してる…」

垂れ流しの蛇口のように、気持ちの水が流れる。愛で満たされたコップに入りきれない愛が、言葉になって僕の口から紡がれる。

「愛しているから、君を守る」

「…無理よ。あなた一人の力では」

「人は…僕には…その姿形は小さくても…大きな愛があるから。この星を包んでしまうくらい大きな愛があるから。それを力に変えることが出来れば、君を救うことが出来る。だから、信じて」

眼前に広げられた右の手のひら。彼女の消滅の右手に、僕は右手を重ねた。指と指の間に、僕は自分の右手の指を通す。硬く握り合った右手同士。破壊を司るとは思えない、華奢な手だった。

「この愛に、時間がほしい。君を守るために。君を救うために」
「……総……」

偏頭痛をきたす額を押さえていた左手が、僕の頬を愛撫する。そ

れは肯定の証だった。

「雅…」

「人はそんなものではない。…その通りだね。私の想像をいつも超えてみせる」

言葉の続きを待つ。

「…彼は生きている。あなたは補完されていないわ。補完されたら、夢はそこで終わり。それに、あなたは…総は、不完全な総のまま。…私と同じ」

雅は不完全なことが嬉しそうだ。完璧、完全なものを目指し、何度も挫折した雅だから、それが可笑しかったのかもしれない。ひとつだけ、あなたに教えてほしいことがある」

「…何？」

「愛は、どうやって確かめるの？」

そして、僕は。

夢の中で、この星にキスをした。

…遠くで、総の冷やかしの口笛が聞こえた気がした…。

第三十話・「愛は、どうやって確かめるの？」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。次回が最終話です。どうか最後までよろしくお願いします。
評価、感想、栄養になります。

最終話・「愛は地球を救う」

あれから、僕は夢から覚めた。夢の中での出来事がまるで嘘だったかのような現実が始まった。でも、本来の夢とは違って、その出来事のこととは忘れていない。雅との誓いも、総との和解も、すべてきちんと記憶の中で生きている。もちろん、その後も夢を見るし、時々、総と会ったりもした。

少し、別の時間に寝る。俺はお前の夢なんて見たくないんだよ。

ぶっきらぼうな言い方だったが、結局、いろいろなものをイメージして競い、そして、今後のことを話し合ったりした。

いつでも総は母親の病気を気にかけていた。補完することで母の病気を治すことが出来れば、というのが彼の補完への動機付けだった。申し訳なさもある。少なくとも補完のほうが希望をもてたかもしれないからだ。でも、総はそんな僕の顔を嫌った。

俺は俺の意思でそうした。母は俺が救う、それだけだ。補完なんて言っても、結局は努力の賜物なんだ。やってみせる。

総は分かっているのだ。補完して能力が上がったとしても、それは上限だけで、上限に到達するには、たゆまぬ努力が必要なこと。オリンピックメダリストも、ノーベル賞受賞者も、世界的企業の経営者も、人一倍努力した結果なのだ。

総とは何度も戦ったが、それが彼の強さだということを、いまさらながらに理解できるのだった。

そして、不完全だからこそ、完全を目指せる力がある。俺はそう考えることにした。

もうひとつの世界で生き、同じものを持っている。でも、やはり根本的なところは違う。劣性、優性ではなく個々の人間。理想の友人。

これからもその関係が続いていけばいいと思う。これからも、ず

つと…。この星を救うための、お互いの世界を救うための架け橋として。

「何をしてるの？」

和泉の声がそばから聞こえた。奇妙奇天烈な珍獣でも見るような痛い視線のおまけつきだ。

「愛を確かめているんだ」

芝生にべったりとうつ伏せながら言った。校舎の真ん中にある中庭の芝生に、僕は太陽の光を浴びながら横たわっている。両手両足を広げられるだけ広げ、大地から伝わってくる温かみを感じている。「こうしてみると分かるけどさ、結構、地球ってあつたかいんだよ。これって、地球が僕たちに注いでくれる愛だよな」

「北極で同じことを言ってみれば？」

和泉は呆れた風に鼻で笑った。

「ま…それも含めて、総らしいといえば、総らしいんだけど。……ね、それより小説、まだ書き終わらないの？」

白いベンチに腰掛けながら、和泉は何気ない調子で聞いてきた。

最近、和泉は毎日のように僕の小説の執筆状況を聞いてくる。それだけ楽しみにしているというのが感じ取れた。

僕は、他人から見れば珍妙な格好をやめて、和泉の隣に腰掛けた。距離は、少し近い。

「もう少し、かな。僕の気持ちとか、たくさん詰め込みすぎて、收拾がつかないというか…。筆力の問題なのかな。僕自身の」

「そっか」

和泉が僕との距離を少しずつ詰めてきた。僕はそれに気づいて心臓が大きく跳ね上がった。

「俺…って言わないんだね」

「あ、まあ…ね」

「それって、私だから、かな」

また少し接近する。僕の心臓の回転が一層速くなる。

「僕、って使いたくなかったのはさ、単に甘えているような響きが

嫌だったからなんだ。母さんのことが頭から離れなくて、僕って使っただけで、思い出してしまつて。だから…無理にでも俺って言おうとしていたんだ。ただそれだけ。過去から逃げようとしていただけ」

「私だから、じゃないんだ…」

拗ねたように口を尖らせる仕草はかわいいと思う。僕はその姿にドキドキさせられながらも、ベンチに預けた腰を上げた。

「さて、帰ろうか」

放り投げてあつた自分のバッグを取り、出口へと歩いていく。ついでに、ベンチの脇に立てかけてあつた和泉のバッグも持っていく。和泉はしばらく白いベンチに座りながら足をぶらぶらさせていたが、「総らしいといえば、総らしいんだけど。総らしくないと言われれば、総らしくないような気がする」

と言うと、小走りに僕の横に並ぶのであつた。

「総つてさ、どうして私のこと名前で呼んでくれないの？」

僕は困つた。正直に話すことには羞恥があつた。僕の中の甘酸っぱい思い出。和泉に聞かせたらきつと馬鹿にするだろうと思つたからだ。

「理由、あるんでしょ？」

「…笑うなよ」

でも、僕は注意を喚起して心を決めた。

「昔、授賞式で会った人がさ、その人が恵理子って言つ名前だったんだ。ただ、それだけ」

バスを降りて自宅へと向かう。

「それ初恋？」

「まあ…そんなとこ」

「だから、その人と同じ名前だから、意識しちゃう、と」

「まあ…そんなとこ」

「……私……な……けどな」

「え？」

僕はほとんど聞き取れなかったその言葉が気になった。が、和泉は取り合ってくれなかった。

「その子に負けないように、私も頑張らなきゃね。そして、その子に勝ったと判断した時点で、総は私のことを名前で呼ぶこと！ いわね！ 約束！」

自宅に向かう僕を追い抜いて、くるりと振り返る。

「私はこの約束を絶対に忘れない、だから……」
過去の光景がリフレインする。

「総も、忘れないで！」

輝くような少女の顔が、笑いかける和泉の顔と重なった。そして、僕は、無意識のうちに微笑んでしまうのであった。

到着した玄関前。僕はドアノブを握ったところで躊躇する。

「……どうしたの？ 入らないの？」

和泉が小首をかしげ、ドアノブを握ったまま逡巡する僕に問いかける。

「いや、開けるけど。開けるんだけどね……」

「どうしたの？ 歩いて疲れちゃったんだから、お茶のひとつでも出してよ」

僕がいつまでもドアを開けないことに痺れを切らした和泉が、僕の手を払いのけてドアを開けてしまう。はっきり言って。

……僕は気が進まなかった。

「総、お帰りなさい」

私服姿の美しい女性が、慎ましやかに三つ指をついてくる。

「その……ただいま。……雅」

さて、どこから話したものか。少し整理しなければならないよう

だった。

「な…ど、ど、ど、どういうことよおおおおっ！」

和泉という人間には。

テーブルに座って事情を説明する。僕と和泉は隣り合い、向かいには雅が姿勢を正して座っている。姿勢が崩れる様子はない。美しい造型の芸術品のようだ。こころ姿勢を変える和泉とは大違い。

「それで、彼女が噂の夢のプリンセス？」

「うん…まあ、そうなるかな」

雅がここに居るのにはリスクが伴う。この星そのものということが周囲に知れば、それだけで大変なことになるだろう。信じることもがそもそも大変なことだと思うが…。そんなリスクを犯しても雅がここに居ようとする理由。

「総は、愛を確かめる方法を教えてくれた。だから、私も確認したくてここにいます」

「へ…え…言うわね」

こういう事態になることは、不可避だったとはいえ、どうやら事態は思った以上に複雑なようだった。

「で、その夢のプリンセスがどうして、この家に住めるわけ？ お父さんはいきなりこんなことになって、許すわけないでしょ？」

「いや、父さんは納得してくれたよ。特に揉めることもなかった」
「く…」

唇を噛む和泉。和泉が僕との距離を極端に縮めてきた。心臓がドキキしている。意味は、まったく逆だが。うまくはいえないが、緊張と、恐怖だろうか。

そのとき、玄関から物音がした。

「父さん、かな」

僕は険悪な雰囲気はこの場を去る。特に父と話すことなどなかった

たが、逃げる手段としては効果的だと思った。

「着替えを取りに戻ったんだ。すぐに会社に戻る」

父は僕が近くにいたのを知ってか、そう言ってきた。すでに手にはボストンバッグがあり、着替えが入っているようだった。おそらく、女物の靴が一足増えていることに気を利かせて、隠密行動をとったのであろう。

「……そう」

胸にこみ上げてくるものがあつた。父の見えない気遣いを、僕は今、見ることが出来たような気がした。

「夕食、作ったのか？」

「いや」

「よかった。それじゃ、総、戸締り頼む」

寂しそうな父の背中。

「……と、父さん」

靴べらを靴のかかとに滑り込ませながら、父は僕の声に耳を傾ける。

「……明日は、早いのか？」

静止する父。

「今ぐらいには、帰れるはずだが……。そうか、邪魔なら、もう少し遅く帰ってくる。空気を読めなくてすまん」

雅と和泉のことを言っているのだろうか。父は、済まなそうに、そして残念そうに、かかとを革靴にねじ込んだ。

「……父さん。夕食、何がいい？」

立ち上がろうとした父が、また静止した。

「……」

「作っておく。何がいい？」

薄暗い玄関。

「……お前が作ったものなら、何でもいい……。いや、肉じゃがを頼む」
父の声は、少しだけ震えて聞こえた。

「わかった。じゃ」

肩越しに玄関口の父を見ると、父は自分の頬をこれでもかというくらいいつねっていた。

「…夢では…ないな」

父はひとりごちると、立ち上がって肩を大きくゆすった。肺に溜まったしこりを吐き出し、玄関の扉を勢いよく開けた。足取りは、母が生きていた頃の父そのものだった。

そんな父を見て、少しだけ、少しだけ、嬉しくなった。色々なことがあったおかげで、今は父の悲しみが、愛情表現が、僅かだが理解できる。僕が少しでも歩み寄れば、気づくことのできる不器用な愛情。だから歩み寄ってみようと思う。

一歩、踏み出してみようと思う。

今さら、ではない、今から、なんだ。

和泉に原稿を渡してきた帰り道、僕は巧と別れ、駅前を歩いていた。

和泉は僕の原稿を受け取って非常に嬉しそうだったが、印刷の作業を抜け出してきたことで、今はきつと怒っているだろう。巧も、そのことについては深く同意していた。しかし、そんな巧も、原稿をちゃんと提出しているのだから、どこか文学部に魅力を感じているのだろう。僕はと言えば、文学部員であることに劣等感を感じることはなくなった。書くことで、この星の危機を救えるのではないか。小説を書くことで誰かに星の叫びを伝えることが出来るのではないか。そう考えるからだ。

補完を捨てて、今の僕を生きる。総がそうしたように、僕も僕の戦いをする。その手段が、小説を書くことだ。

僕は自分の背中にのしかかる責任という荷物を抱えなおした。心なしか、自分の身が重くなった気がする。

しかし、その責任が僕の足腰を強くする。

僕自身を強くしてくれる。

大切な人を守る力をくれる。

「募金お願いします!」

駅前で募金活動している女の子の声が聞こえる。

黄色い服を着た団体。僕は、それに近づいていって、財布を広げる。今月の懷事情には厳しいものがあるが、それでも、僕は樋口一葉を募金箱に入れた。募金箱をぶら下げた小さな女の子は、大きな声で、

「ありがとうございます」

と笑顔で言っていたが、その隣の大人は、僕の大盤振る舞いに目を丸くしていた。

「どういたしまして」

僕は、その子の頭をなでる。僕が財布をしまつて歩き出すと、女の子は背中に向かって、ありがとうございますと、もう一度大きな声で言った。

踏み出した夏の太陽は、夕方になっても人々を茹で上げようと必死で、歩く人はどこか気だるげだった。

僕は、遠くで聞こえる女の子の募金活動の声を聞きながら、箱に書かれていた一文を思い返していた。

その募金箱には、大きな文字で、訴えるようにこう書かれていた。

愛は地球を救う、と。

【END】

最終話・「愛は地球を救う」（後書き）

興味を持ってくださった方、読んでくださった方、ありがとうございます。
います。ひとまず、この物語はこれでおしまいです。文学とはなにか、家族とはなにか、愛とはなにか、少しでも伝わっていただければ、それにまさる喜びはありません。評価、感想、栄養になります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n4893a/>

ドリーム・コンシャス

2010年10月8日13時26分発行